

TOP > 名誉所長ブログ



名誉所長ブログ

Koby's Note -Honorary Director's Blog

名誉所長ブログでは、CRNの創設者であり名誉所長である小林登の日々の活動の様子や、子どもをめぐる話題、所感などを発信しています。



過去の記事一覧

- 過去のコラム (2008~2013.3)
- 過去のメッセージ (~2007)

「『ホーホー』の詩ができるまで」を読んで

著者： 小林 登 (CRN名誉所長、東京大学名誉教授)

掲載日： 2015年5月22日掲載

カテゴリー： 名誉所長メッセージ

国立民族学博物館で教授をされている信田敏宏さんが、自分のお子さんがダウン症で生まれ、10年間育てられた経験を、奥様の感想と一緒にまとめられたのが「『ホーホー』の詩ができるまで」(出窓社)である。本書からはご両親の優しいまなざしが感じられる。そのお子さんが小学校4年生のときに作ったのが「ホーホー」の詩なのである。

私がアメリカで勉強していた1950年代に、その昔は蒙古症と呼ばれたダウン症が、21番目の染色体が1本余計にあることが原因であると明らかになった。それは先天異常を中心とする新しい小児科学の始まりとなる大きな出来事だったので、今も印象的なこととして覚えている。

「ホーホー」の詩は、短いので、まず紹介しよう。

「ホーホー」

ホーホーとなきま
す。
バサバサとびま
す。
くらいところにいま
す。
さがしてみてね。
きょうのよる
まっています。

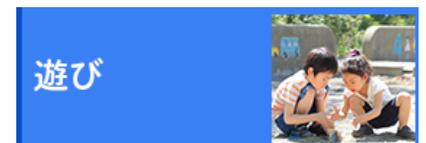


簡単な詩である。しかし、その中に心がこもっていることは、どなたも理解されよう。NHKの福祉番組「ハートネットTV」に取り上げられたのも、うなずける。

本書をぜひ多くの方に読んでいただきたいと、CRNでも取り上げさせていただくことにした。

キーワード検索

Google 提供



名誉所長ブログカテゴリ

- 名誉所長メッセージ (50)
- CRNスタッフメッセージ (1)
- リレーエッセイ

新着記事

- 【誰一人取り残さない「こどもみんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】 その11:若い世代の描くライフデザインや出会いを考えるワーキンググループ

本書を読んで、ぜひ感想など、教えていただきたい。

いいね！ 2

ポスト

BI

看護と私

著者： 小林 登（CRN名誉所長、東京大学名誉教授）

掲載日： 2014年2月7日掲載

カテゴリー： 名誉所長メッセージ

看護師さんにお世話になったことのない人はいないであろう。大人も子どもも、病気や予防注射などで医療・保健の現場に行くと、お医者さんに会う前に必ず、看護を勉強した看護師さん、保健師さんなどのお世話になっているはずである。

それは、看護学の学問的発展と共に、看護師さんの果たすべき仕事が大きく進化し、戦後の看護が歴史的に大きな転換を迎えたからである。その大きな転換の時期に、私は東大小児科の教授と同時に、東大医学部付属看護学校長も兼任していた。

戦後のアメリカによる占領が終わって間もない当時、東大病院の付属看護学校はボケーショナル・スクール（職業訓練学校）と呼ばれており、高等学校を卒業した生徒たちが入学してきた。戦前は5年制の中等学校を卒業してからの入学だったことに比べれば、戦後の新しい3年間の中学校の義務教育に、3年間の高等学校の勉強をした上での入学だったので、教育期間が1年間延びたということになる。

これにより看護教育のレベルは、戦後ある程度高くなっていったが、私が校長を兼任するようになった頃、国立大学医学部付属の看護学校は次々と短大化して、更に教育レベルを上げていく流れとなった。しかし、東大は、1950年代に医学部保健学科（現：健康総合科学科）の中に大学レベルの看護教育を学ぶ部門がすでにでき上がっていたため、付属看護学校は短大化せずに続いたが、2002年に廃校となり、100年を越える歴史を閉じることとなった。

この新しい方針によって国立大学医学部付属の看護学校のほとんどが短大に移行した頃の話であるが、東京大学は当時の文部省から見れば国立大学の代表のようなものなので、東大の付属看護学校長であった私は、国立大学の付属看護学校の代表として短大化のお手伝いをした。当時、大学レベルの看護教育を行っていたのは、私立大学では聖路加病院の看護大学と、国立大学では東大と千葉大学看護学部の三校であったと記憶している。それらの大学の女性教授と一緒に、日本全国あちこちの短大化された看護大学を視学委員として訪問した旅の思い出は少なくない。

短大化された看護教育による第一の影響は、当然のことながら、看護のレベルが上がったことである。アメリカでは、1960年代に看護学校の大学化が始まったが、私が医学教育の世界一周視察を行った1970年代には、大学化によって看護のレベルが向上すると言われていた。看護師さんを生んだイギリスも、看護のレベルを上げるために大学化を行うという話であった。欧米では、大学化によって男性の看護師が増えたかどうかはよく知らないが、アメリカで軍隊の衛生兵が看護教育を受け、男性看護師として一般病院でも働いている姿は、アメリカでインターンをしていた1950年代に見たことを思い出す。わが国では、男性看護師の増加に、看護学校の短大・大学化が果たした役割は大きい。

先日、「医学界新聞」*1で、東大の医学部保健学科で学んで看護師になり、京大付属病院の看護部長をされている男性の看護師さんと、著述業も行っている女性の看護師さんとの対談を読んだ。男性の看護師さんは現在約63,000人（厚生労働省：平成24年度衛生行政報告例*2）で10年前の2倍以上であるが、それでも、全体で100万を越える看護師さんの中で、男性は6%を少し越す程度であると言う。男性看護師は手術室や精神科で働くのが代表的という時代は終わったようで、内科病棟やその他の病棟で働いている男性看護師も増え、男性看護師の知名度は高まってきていると認識されているようである。大きな問題は、女性患者の羞恥心を伴う看護を実施する場合、男性看護師の約70%は躊躇を感じ、約80%は拒否されたことがあるということである。したがって、男性看護師の80%は、女性患者の羞恥心を伴う看護を実施する際、患者自身や家族に「看護しても良いか」と事前確認をすると言う。看護も男女平等になることは

- 【ニュージーランド子育て・教育便り】第51回 天候被害に関する子どもの準備・事後の [PAGE TOP](#)
- 【カナダBC州の子育てレポート】第37回 フルインクルーシブ教育：自立と自律を中心に考える
- 【誰一人取り残さない「こどもまんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】その10：こども政策に関する国と地方の協議の場～こども政策の最前線は自治体～
- 【ドイツの子育て・教育事情～ベルリンの場合】第62回 子どもの健康診査～日独比較
- 【一人一人の違いに寄り添うために】第12回 知識は無限、順位は有限
- 【インドの育児と教育レポート～チェンナイ編】第11回 インドの学校教育におけるスクールカウンセラーの役割
- 【カナダBC州の子育てレポート】第36回 フルインクルーシブ教育の理想と現実
- 【誰一人取り残さない「こどもまんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】その9：「こどもまんなか」の視点で乳幼児の育ちを支える「こども誰でも通園制度」について
- 【CRNA国際共同研究】子どものレジリエンスを育む保育実践に関する調査2024 結果報告



Tweets by crn_jp

悪いことではないと思うが、そこまでしなければならないかと考えると、少々淋しい思いがしないでもない。

*1. 週刊医学界新聞 第3052号 (2013年11月18日)

*2. 平成24年衛生行政報告例(就業医療関係者)の概況

いいね! 0

ポスト

BI

「子育ての社会化」を支援する

著者： 小林 登 (CRN名誉所長、東京大学名誉教授)

掲載日： 2013年12月20日掲載

カテゴリー： 名誉所長メッセージ

子育ては本来、親の責任である。しかし、どういうわけか、社会が豊かになると親の子育て機能が低下すると言われている。私が、そのことを実感したのは、1954年(昭和29年)、大学を卒業して半年ほどたち、アメリカのクリーブランドのカトリック病院でインターンをしているときのことだった。

秋の夕日がエリー湖の彼方に沈む頃、救急室で当直をしていた私のところに、白人の母親がきつい顔で「我が子がベッドから落ちた」と子どもを抱きかかえて、入ってきた。細かく診察してみると、身体の内側に新旧の傷あとがあった。ついで、左手を持ち上げると、大きな声で泣いた。早速レントゲン写真をとってみると、左の上腕に骨折が見つかった。他にも、治りかかった古い骨折のあとがあった。インターンの私は、当直にあたっていた先輩の医師に報告した。彼はすぐに診察をし、その後、市立病院でもある大学病院に送ると言って電話をかけ始めたので、私は驚いた。彼は「子ども虐待(Child Abuse)」だと言うのである。インターンが始まって間もない私はまだ知らなかったが、当時、豊かなアメリカでは「子ども虐待」が増え始めていた。様々な事情を考えて、先輩の医師は、行政と連携している市立病院に連絡をとったのであろう。

それから5年程たった1961年、ニューヨークで開かれたアメリカの小児科学会でC. Henry Kempe医師が「Battered Child Syndrome(被殴打児症候群)」として「子ども虐待」の症例をまとめて発表した。アメリカでは、これを契機に、「子ども虐待」が社会病理のひとつとして認識されるようになっていったことはよく知られているが、1962年に私がロンドンのグレート・オーモンド通りにある子ども病院に留学していた頃、イギリスでも「子ども虐待」が問題になり始めていた。その頃、あるイギリスの小児科医が、私に「子どもに優しい日本では、『子ども虐待』の事例はあるのか」と尋ねてきたことがある。私は当時、そのような話は見聞きしたことがなかったので、誇らしげに「No」と断言したことを思い出す。しかし、日本でも少し遅れて「子ども虐待」の症例が出現し、日本小児科学会で問題になり始めた。私がイギリスから帰国して間もない1960年代後半、東大の小児科でも「子ども虐待」の患者が入院したことを記憶している。周知のとおり、日本経済が戦後の荒廃から立ち直って、社会が急速に豊かになった時期のことである。

親子関係、特に母子関係が失調すると様々な子育て上の問題が起こるが、「子ども虐待」はその極限のかたちである。このような状況では、親に代わって社会が子育てを担うことが必要である。場合によっては、経済的な事情から、また、母親の孤立を防ぐために、母親の就業を支援することが求められることもあるだろう。しかしながら、子育ての在り方は多様であり、個々の状況に応じた方法で対応しなければならない。また、余りにも子育てを社会化しすぎると、親子の相互作用の機会が減少することも考慮する必要があるだろう。

このように、「子育ての社会化」が今のわが国にとって大変重要な問題であることは確かだが、この「子育ての社会化」を支援している新聞社があることは、ご存知であろうか。それは、読売新聞社である。読売新聞社では大阪本社が中心となっており、10年ほど前から子育て講演会を行っていたが、2007年から「よみうり子育て応援団大賞」として、公募を行い、いろいろな子育て支援の団体を、賞金とともに表彰している。

今年、第7回となる2013年「よみうり子育て応援団大賞」には、全国各地から、大賞を希望す

ご意見・ご質問 [PAGE TOP](#)

CRNへのご意見・ご質問はこちらへお寄せください。

[ご意見・ご質問はこちら](#)

メルマガ登録

メールマガジン「CRN通信」を購読しませんか?子どもにまつわる耳よりな情報をお届けします。

[登録・変更はこちら](#)

る137団体と、奨励賞を希望する131団体の合計268団体が応募した。予備選考、一次選考を行って、大賞候補6団体、奨励賞候補14団体が残り、最終選考委員会が開かれ、大賞1団体と奨励賞2団体が選ばれた。全てが甲乙つけがたかったので、残念ながら受賞できなかった団体の中から、選考委員特別賞として、2団体が選ばれた。

今年の大賞に選ばれたのは、岡山県備前市の「[NPO法人子ども達の環境を考えるひこうせん](#)」であった。古い民家を拠点として親子が集う広場や、父親向けの講座、育児相談等を行っている団体で、昨年の利用者は延べ9,700人にのぼったという。目指しているのは、子どもの育ちを社会全体で支える「子育ての社会化」そのもののようだ。大学や行政、企業、他の子育て支援グループと連携し、支援のあり方をともに考える取り組みは、これまでにないものであると高く評価された。

次に、奨励賞の2団体であるが、一つ目の、岐阜県高山市の「[わらべうたの会](#)」は、飛騨地方のわらべ歌を親子で学ぶ取り組みをしており、郷土の文化や暮らしを次の世代へ継承する重要な役割を果たしている。子どもの成長や心の発達ばかりでなく、親子のふれあいも応援するという、この賞の趣旨にふさわしい活動であると思った。

奨励賞の二つ目、京都市伏見区の「[父活project \(ちちかつぶろじゅくと\)](#)」は、子どものおもちゃ作りを通して、お父さんの地域参加を進めるグループである。お父さんのための子育て支援活動は増えているが、男性が参加しやすい「ものづくり」に着目している点がとてもユニークであると評価された。

最後に、選考委員特別賞に選ばれた2団体であるが、北海道倶知安町の読み聞かせの会「[ぐりとぐら](#)」は、絵本の読み聞かせの会から発展し、幼稚園や学校でお話し会を開くなど、言葉の力を育む活動をしてきた。大阪市中央区の「[特定非営利活動法人 プール・ボランティア](#)」は、障害がある子どもたちにもプールで楽しく安全に泳いでもらおうと、様々な取り組みを行っている。いずれも、長年、地道な活動を続けている点が評価されて、選考委員特別賞の受賞となった。残念ながら、賞金はない。

私は、読売新聞社大阪本社のこの運動に当初から関係し、「よみうり子育て応援団大賞」となってからは選考委員長を務めさせて頂いている。ぜひ、この素晴らしい運動があることを知って頂きたいと思い、ブログにとりあげた次第である。

いいね! 0

ポスト



となりの猫～母猫と子猫～

著者： 小林 登（CRN名誉所長、東京大学名誉教授）

掲載日： 2013年11月29日掲載

カテゴリー： [名誉所長メッセージ](#)

わが家では猫を飼っていないが、隣りの家には二匹の猫がいる。母と子の親子猫であるが、どういわけか、夏のころから、私に挨拶をするようになった。私がわが家の門をくぐろうとすると、隣りの家の門の脇で木陰の涼を楽しんでいるこの親子の猫が、私の顔を見て「ニャー、ニャー」と鳴くのである。何となく愛嬌があって、私も悪い気がしないので、自然に笑顔で手を振ってしまう。子猫はまん丸の顔で、大きな目で私を見ながら鳴くので、特にかわいいと思っていた。

秋風が吹き始めて、ちょっと涼しくなった、ある夕方のことである。わが家に入ろうとすると、隣りの家の方から、突然、母猫が私の方に走り寄ってきた。私の脚に絡みつき、何かを訴えるように「ニャー、ニャー」と泣きつくので、私はとても驚いた。飼い主と私を見間違えたのではないかと思うと同時に、いつも一緒にいる子猫はどこへ行ったのだろうか心配になった。家に入って、妻にこの出来事を話したところ、子猫は、近くの獣医さんの紹介で、わが家から1キロメートルほど離れたお屋敷に貰われていったという話を聞いたと教えてくれた。

猫が、人類とは長く特別な関係を持ってきた動物のひとつであることは、よく知られている。記録によると、紀元前数千年前のエジプトで飼われていたと伝えられ、わが国では奈良時代に中国から渡来してきたと言われている。そんな猫が、人間を見間違えることはまずないだろう。闇の中でも瞳孔を大きく開いて光の情報を集める視覚や、鼻孔を大きく開いて匂いの化学

情報を集める嗅覚が共に優れていることを考えても、人を識別する際に間違えることは、まずないものと思う。

そう考えてみると、あの母猫の行動は一体何だったのだろうかと思いを巡らせてしまう。可愛がっていた小さな子猫が貰われていってしまい、母猫として何か感じていたのだろうか。私に何か訴えたいことがあったのではないかと考えると、心の痛む思いがする。猫の行動に詳しい方に、ぜひ、教えて頂きたいものである。

いいね! 0

ポスト



中国の子ども学

著者： 小林 登（CRN名誉所長、東京大学名誉教授）

掲載日： 2013年9月27日掲載

カテゴリー： [名誉所長メッセージ](#)

CRNは、設立以来、中国との交流を積極的に進めてきた。それには、私が中国という国が好きであるという背景もあり、CRNが日本語、英語の次に、中国語のサイトを立ち上げることになったのも、これと無関係ではない。私はさらに、CRNの中国との交流の核として「東アジア子ども学交流プログラム」を作り、事あるごとに、日本と中国が一緒になって「子ども学」について考える機会をつくってきた。

日本と中国の国交正常化が1972年のことなので当然であるが、私が中国に行き始めたのは1970年代に入ってからである。その頃私は、東京大学の小児科医として、もしくは、小児アレルギー学者として中国を訪れていたが、1996年にCRNが設立されてからは、CRNの代表として、また、「日本子ども学会」の代表として、「子ども学」をテーマに交流するようになっていった。

実のところ、「子ども学」を中国語でどのように表現するのかは大きな問題になった。なぜならば、「子ども」を中国語にすると「孩子（ハイツ）」「小孩（ショハイ）」になるが、それは「ガキ」とか「小僧」のような言葉であって、その後に「学」を加えても学問というイメージにはならない。結局のところ、「子ども学」は中国語で、一般的には「児童学」という堅い言葉が使われるようになってしまった。そこでCRNでは、中国語サイトを立ち上げる際に専門家が集まって議論を行い、英語の"Child Science"の訳語に近い「児童科学」という言葉も使うことにして、現在に至っている。

少し話がそれてしまうが、国立小児病院を定年でやめて、関西の女子大学で教え始めてから、保育学にもう少し教育的な考えを導入すべきではないかと考えるようになった。現在の日本では、保育士になるための保育学と、幼稚園の先生になるための幼児教育学とでは、全く内容が異なる場合がある。保育学の中心は、子どもの「遊び」と「生活の世話」であるが、幼児教育学はいわゆる就学前教育で、教育的発想が中心になっているのである。しかし、考えてみれば、子どもはこの世に生まれて来るや、経験すること、感じることをすべてが初めてであり、生活の中で、親や養育者と一緒にそれに対応し、学んでいる。子どもの体の成長や心の発達には、その日々の「学び」の結果といえるであろう。したがって、幼稚園・学校という教育の場だけで行われているものだけが教育ではなく、日々の生活や保育の場においても、教育的な発想が必要であると考えます。

中国では、保育と就学前教育は区別していないようだ。あくまで都心部の話であるが、0～2歳については、祖父母やお手伝いさん（阿姨/アーイー）による家庭での保育が一般的であり、2、3歳になると幼稚園に入園する。この幼稚園は、教育的発想に基づいたカリキュラムのある保育を行っているが、同時に、朝から晩まで子どもを預かり、働く親たちの生活を支えている。保育と教育が一体となっている点で、日本より一歩進んでいるという印象を持つ。

最近、関西の学会のために訪日された上海師範大学の学部長である陳永明教授以下、方明生教授、李燕教授、付属小学校・付属幼稚園の先生2人とお会いする機会を頂いた。私の提唱した「子ども学」を評価してくださり、方教授が中心となって、立派な「子ども学」の教科書「儿

童学概论（児童学概论）」を出版し（表1）、さらに、大学に「子ども学部」を創設されたとうかがい、大変うれしく思った。また、陳教授も方教授も日本語が堪能で、コミュニケーションに困ることはなかったことも、驚きであった。



中国の教授陣・現場の先生方と一緒に「児童学概论」

私が考え、体系づけた「子ども学」を介しての交流が始まって、10年程になるが、中国の上海で「子ども学」が大きく花開いたことは、この上ない喜びである。

(表1) 教科書「児童学概论」の目次

- 第1章 「子ども学」へ—教師養成における「子ども学」の意義
- 第2章 子ども観と教育—教育の基点としての子ども認識
- 第3章 子ども政策—"子どもの権利"理念の下での政策概要
- 第4章 子どもの栄養—現代の子どもたちの栄養の問題
- 第5章 子どもの健康—現代の子どもたちの健康の問題
- 第6章 子どもの心理発達—子どもの心の発達の問題
- 第7章 子どもと哲学—子どもへの哲学教育の開拓
- 第8章 子どもと文学—児童文学教育の深化
- 第9章 子どもと科学—子どもにとっての科学の世界と科学探求
- 第10章 子どもと造形—視覚世界の中での子どもの発達
- 第11章 子どもと音楽—聴覚世界の中での子どもの発達
- 第12章 子どもと遊び—遊戯活動と子どもの発達
- 第13章 子どもと環境—環境と子どもの発達

いいね! 0

ポスト



1

2

3

次へ>>

調査データ

- ▶ 乳幼児
- ▶ 小中高生
- ▶ 国際調査

▶ More

研究論文

- ▶ 異文化理解
- ▶ 健康と発達
- ▶ 学校教育
- ▶ 子どもの権利

▶ More

海外の子育て

- ▶ インド
- ▶ カナダ
- ▶ タイ
- ▶ ドイツ (ベルリン)
- ▶ ニュージーランド
- ▶ ノルウェー
- ▶ フィンランド
- ▶ サウジアラビア ▶ More

CRNについて

- ▶ ごあいさつ
- ▶ CRN概要
- ▶ 活動履歴
- ▶ CRN刊行物

▶ More

TOP > 名誉所長ブログ



名誉所長ブログ

Koby's Note -Honorary Director's Blog

名誉所長ブログでは、CRNの創設者であり名誉所長である小林登の日々の活動の様子や、子どもをめぐる話題、所感などを発信しています。



新しい保育を体系づけるー保育の中の教育性とECECー

著者： 小林 登（CRN名誉所長、東京大学名誉教授）

掲載日： 2013年9月.6日掲載

カテゴリ： 名誉所長メッセージ

6月30日（日）、CRN主催による第1回ECEC研究会が、お茶の水女子大学で行われた。私も出席したが、幼保一元化などの現在の保育問題を考える良い機会となった。

最近の保育のあり方をみると、昔の保育とは大きく異なっていると感じる。私は医者であるので、身近な例として女性医師について話をしよう。

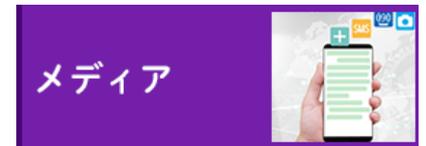
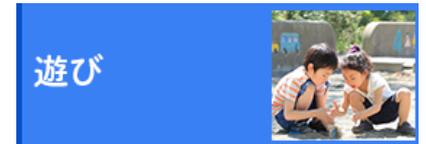
女性医師が結婚し、赤ちゃんが生まれると、まず問題になるのは保育園探しである。医師として仕事を続けるためには、赤ちゃんを預ける場所としての保育園が必須だからである。戦前であれば、医師の家庭は経済的に豊かで、生まれた我が子を世話する女中さんを雇い入れ、女中さんの住む部屋を用意することもできた。この頃、女中さんがいる家庭は少なくなかった。一方、1920年代に生まれた私が小学生の頃、今の保育園に当たるものは「託児所」と呼ばれていた。当時私は、この「託児所」を、生きていくために働かなくてはならない母親が仕事の間に子どもを預ける施設、つまり、社会的に恵まれない人々のための施設であると感じていた。

しかし、社会が発展し、豊かになるとともに、誰もが希望通りではないにしろ、学校に入り、勉強して、なりたい職業につくことが可能な社会になった。敗戦によるアメリカの占領政策の良い影響もあってか、日本政府は男女平等政策を進め、女性の社会参加が実現し、女性無しには社会が機能しなくなってきている。それに伴い、女性の働き方も多様化し、赤ちゃんを預ける時期や方法、産休・育休の取り方もそれぞれ異なるため、それに応えるべく、多様な保育制度が必要になっている。先進国のひとつとして、世界の経済もリードしているわが国の保育園は、女性の就業を可能にするだけでなく、男女が協同して社会を維持するための子育て支援システムとして考えなければならない時代になっている。このような子育て支援システムがなければ、現在の社会を機能させることができないのである。

さて、もともと「託児所」として始まった保育園であるが、その教育的側面について考えてみたい。何も知らないで生まれてきた赤ちゃんは、育っていく中で、食べることから排泄の仕方まで、生活に必要な心と体のプログラムを学びながら、発達する。それは、日々、生活を支援してくれる大人から教えられているのである。勿論、これらは、学校で知識中心に教える教育と同じではないが、広い意味で、「教育」の中に入ると言えるだろう。特に、乳幼児に対する

キーワード検索

Google 提供



名誉所長ブログカテゴリ

- ➔ 名誉所長メッセージ (50)
- ➔ CRNスタッフメッセージ (1)
- ➔ リレーエッセイ

新着記事

- ➔ 【誰一人取り残さない「こどもみんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】 その11：若い世代の描くライフデザインや出会いを考えるワーキンググループ

PAGE TOP

教育は特殊で、学校に入ってから始まる教育の準備や、「しなければならないこと」「してよいこと」「してはいけないこと」などの「しつけ」も含めて、日常的に子どもの生活を支援する中で教えていく必要がある。私は今後、これを「保育教育学」として体系づけなければならないと考えている。

"ECEC"とは、"Early Childhood Education and Care"の略であるが、上述の私の考えを表現するのに適していると思った。私と同じような考えを持つ人が、外国でも主流になりつつあることは、大変うれしいことである。6月30日のECEC研究会を受けて、「保育」の中にある教育性を科学的に整理して新しい保育のあり方を体系づけることにより、現在問題になっている「幼保一元化」を、日本でも、なるべく早く実現して頂きたいと思った。

いいね! 0

ポスト

BI

世界おもちゃサミット2013が開かれた

著者： 小林 登（CRN名誉所長、東京大学名誉教授）

掲載日： 2013年8月30日掲載

カテゴリー： 名誉所長メッセージ

6月9日（日）に早稲田大学 国際会議場 井深大記念ホールで「世界おもちゃサミット2013」が開かれた。多田千尋先生が館長を務める「東京おもちゃ美術館」と、私の関係する「日本子ども学会 "Japanese Society of Child Science"」が共催した小さな国際シンポジウムであった。8日（土）夕方には出席者の懇親会が行われ、その翌日となるサミット当日は、快晴に恵まれ、朝10時から夕方5時まで、多数の出席者のおかげでホールはほぼ満席であった。

まず、開会式でご挨拶をさせて頂いた。はじめに、小児科医として「子ども学 "Child Science"」という考えに至った背景を述べ、つづいて、日本子ども学会10年の歴史について話をした。そして、子どもの体の成長と心の発達には「生きる喜び "Joie de vivre"」を持つことが重要であることを申し上げた。その「生きる喜び」を生み出す仕組み、特に脳の働きについて考える学問を「子ども生命感動学 "Child Bio-emotinemics"」と呼ぶ私の考え方についても説明した。そして、おもちゃは、子どもを「生きる喜び」でいっぱいにする力を持っているが、このサミットの中で、その理由を考えて頂きたいと出席者をお願いして、挨拶を終えた。

つづいて、二つの基調講演を頂いた。榊原洋一CRN所長（日本子ども学会副理事長、お茶の水女子大学教授・小児科医）より「子どもの発達とおもちゃ」、春日明夫先生（東京造形大学教授）より「おもちゃは世界の文化財」というタイトルの講演であったが、いずれも内容豊かで、学ぶことが多かった。

午後は、二つのセッションが行われた。第一部は「遊びとおもちゃのセッション（発達・環境・福祉）」であったが、私は、第二部の「世界の遊びとおもちゃのワークショップ」のセッションが特に興味深く、個人的に関心をもった。

第二部の一つ目は、ドイツのPeter Hanstein先生のセッションであった。彼は、家庭と自然を大切にすることを柱に、木や竹を使ったおもちゃの会社「Hape社」を中国に設立して、世界の子どもたちに供給している。その体験を、おもちゃを作る理念と共に話された。二つ目は、タイのVitoool Viraponsavan先生からのセッションであった。彼は建築家で、ゴムの木の廃材を利用しておもちゃを作る「Plan Toys社」を設立しており、おもちゃの製造を地球温暖化の防止に役立てることを考えていて、感銘を受けた。

日本国内ばかりでなく、外国からもおもちゃに関心を持つ沢山の研究者、学者が集まり、議論することができた意義は大きい。更に、「グッド・トイセッション」として日本グッド・トイ委員会が選定したグッド・トイの展示もあり、来場した人が、実際におもちゃに「触れる」「動かす」ことができた点は、特に良かったと思う。いろいろな視点から考えて、「世界おも

- 【ニュージーランド子育て・教育便り】第51回 天候被害に関する子どもの準備・事後のサポート
- 【カナダBC州の子育てレポート】第37回 フルインクルーシブ教育：自立と自律を中心に考える
- 【誰一人取り残さない「こどもまんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】その10：こども政策に関する国と地方の協議の場～こども政策の最前線は自治体～
- 【ドイツの子育て・教育事情～ベルリンの場合】第62回 子どもの健康診査～日独比較
- 【一人一人の違いに寄り添うために】第12回 知識は無限、順位は有限
- 【インドの育児と教育レポート～チェンナイ編】第11回 インドの学校教育におけるスクールカウンセラーの役割
- 【カナダBC州の子育てレポート】第36回 フルインクルーシブ教育の理想と現実
- 【誰一人取り残さない「こどもまんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】その9：「こどもまんなか」の視点で乳幼児の育ちを支える「こども誰でも通園制度」について
- 【CRNA国際共同研究】子どものレジリエンスを育む保育実践に関する調査2024 結果報告



Tweets by crn_jp

ちゃサミット」は、今後も続けていたいただきたいと思った。

いいね！ 0

ポスト



「NHKと私」

著者： 小林 登（CRN名誉所長、東京大学名誉教授）

掲載日： 2013年7月26日掲載

カテゴリー： [名誉所長メッセージ](#)

3月22日は、NHKラジオ放送が始まった「放送記念日」である。今年は、初めてその式典にお招きを受けた。NHKとは長い間仕事をさせて頂いてきたので出席することにしたが、葉書で返事をする、車まで用意してくださるというので驚いた。どうやら全ては、現在私が「子どもに良い放送」という調査研究プロジェクトをお手伝いさせて頂いている、NHK放送文化研究所のアレンジによるものであったらしい。私はかつてNHK交響楽団の会員として、演奏を聴きによくNHKホールを訪れていた。この度そのホールで行われた式典は、NHK交響楽団の演奏から始まる、大変立派なものであった。

NHKがラジオ放送を始めたのは1925年3月22日である。私の生まれる2年前のことだが、「JOAK」のコールサイン^{*1}で始まったという。私の頭に残っているNHK放送の最も古い記憶は、ベルリンオリンピックの水泳の実況放送である。「前畑がんばれ、前畑がんばれ」と言うアナウンサーの声を、一緒に聴いた父のことと共に思い出す。戦争中の放送のこともいろいろと思い出すが、末期は海軍の学校にいたので、放送を聴くことはなかった。そして、教室で聴いた8月15日の玉音放送と共に戦争が終わり、戦後が始まった。

戦後、日本はあっという間に放送天国になってしまった。その始まりは1951年の民間のラジオ放送であり、1953年にはテレビ放送が始まったと記憶している。民間のラジオ放送が始まってわずか数年後のことである。私は当時大学生であったが、電気屋さんの店頭に並ぶテレビの映像を見るために群がった人々の姿が、今も目に浮かぶ。

「テレビやラジオの放送に出演したことがあるか」と問われれば、“Yes”である。母校の東京大学の教授になって7、8年経過した1970年代後半のこと、NHKのスタッフから、「お母さん方を対象とした朝の番組にレギュラーとして出演し、子育ての話をしてほしい」という申し出があった。番組は「こんにちは奥さん」というタイトルであったと思う。今のように大学教授がテレビに出演することのなかった時代なので、医学部の事務局に相談したところ、事務局長始め事務局の人は皆、「社会教育として大きな意義があるので、ぜひ出演して頑張ってください」と言ってくださり、安心して、この申し出を受けることにした。

週一回、朝7時前にNHKからハイヤーが迎えに来て、8時頃にスタジオに入り、簡単な打ち合わせをして、お母さん方と一緒に本番を迎えた。アナウンサーは誰でも知っている、とても有名な方であった。しかし、開始から数ヶ月後に政界が動き、総選挙に入って、この放送は中断してしまった。残念というより、安心したという感じが強かった。

テレビに出るといことは顔まで覚えられるということであって、東京は勿論のこと、北海道や山形、鳥取、福岡に至る日本全国で、また、鉄道のホームや空港のロビー、小さな町のレストランや寿司屋さんで、「朝のNHKのテレビに出ている小林先生ですね」と声をかけられるようになったのである。テレビは日本の津々浦々で見ることができるので、当然のことであろう。

ラジオ放送となるとテレビとは大分異なる。テレビ放送に出演してから数年たって、NHKからラジオ放送にも出演を依頼された。教育問題について話したと記憶している。深夜放送であったが、それでも日本のどこかで聴いている人がいて、NHKに直接手紙が寄せられてきた。いず

ご意見・ご質問

CRNへのご意見・ご質問はこちらへお寄せください。

[ご意見・ご質問はこちら](#)

メルマガ登録

メールマガジン「CRN通信」を購入しませんか？子どもにまつわる耳よりな情報をお届けします。

[登録・変更はこちら](#)

れも真面目なご意見で、大変勉強になった。

赤ちゃん研究や子育て問題などの特別番組のお手伝いをさせて頂いたことも、忘れることができない。NHKは、いつも"best"を目指すので、ハーバード大学の育児学のBrazelton教授を招いて番組を作ってくださったことは、今も良い思い出として心に残っている。それは、アーカイブに保存されていて、いろいろな教育に利用されているという。

今年はいじめて放送記念日の式典に出席させて頂き、芸能人や多くの有名人の顔を見て、今更ながら、NHKとはご縁の深かったその昔を思い出した。

*1 コールサイン（呼び出し符号）とは、無線局の識別ができるようにするための符号のことで、電波を出している放送局に割り当てられている。大正14年の開局時に「JOAK」がNHK東京放送局のコールサインとなった。

いいね！ 0

ポスト



CRNをバトンタッチします

著者： 小林 登（CRN名誉所長、東京大学名誉教授）

掲載日： 2013年5月9日掲載

カテゴリー： [名誉所長メッセージ](#)

CRN読者の皆さま

突然ではありますが、年齢のことも考えて、CRN所長を副所長のお茶水女子大学教授榊原洋一氏にバトンタッチすることにします。長い間お世話になりました。CRNには、体力の許すかぎり、名誉所長として寄稿するなど、お手伝い致す所存です。

考えてみますと、CRNは私が国立小児病院を定年で辞めた1996年の4月に、当時ベネッセコーポレーションの社長であった福武総一郎さんのご支援によって始めたものでした。

その発想の起源は、それからさらに4年ほど前の1992年春、ノルウェーのベルゲンで開かれた"The Norwegian Centre for Child Research"主催の国際会議「危機にある子どもたち」の後に開かれた小さな話し合いにあります。なお、このノルウェー国立の研究所は、当時は学際的・環学的な「子ども学」の研究をする場所と考えていましたが、最近そこを訪問した榊原氏によると、現在は文化人類学的な研究をしているそうです。必要に応じて研究の目的や方法を変えて研究する研究所と言えるかもしれません。

前述の、国際シンポジウム終了後の小さな話し合いに話を戻しましょう。今でも、その時の様子をありありと思い出すことができます。世界の参加者の中から選ばれた、子どもに関心をもつ学者・実践家が、大型バス2台に乗り、ベルゲンから半日ほどの時間をかけてフィヨルドの水際に建つホテルに集まったのです。ホテルの裏の山には残雪があり、山も空も夕日に輝いて赤く染まっていました。そこで話し合われたことは、子どもに関心をもつ世界の学者・実践家をインターネットでつなげて子どもの問題を解決しようという話でした。当時インターネットの事は何も知らなかった私には、話の内容がよく理解できず、具体的なイメージがわかりませんでした。

しかし、幸いなことに帰国後1年ほど経つと、国立小児病院にもインターネットが導入され、その端末が院長室にも置かれたのです。その使い方もすぐわかり、ベルゲンの話の重要性も意義も理解することができました。それには、インターネットの操作に長けていた院長室の秘書Tさんの力も大きかったと思います。

そうこうしているうちに、定年の時が来たのです。私は、インターネットで我が国の子どもの問題に関心をもつ学者・実践家をつないで、子ども問題の解決に貢献することを、最後の仕事にしようと考えたのです。それで、ベネッセコーポレーションの福武社長にお願いに上がることになりました。

この時お世話になったのは、当時ベネッセコーポレーションの教育研究部長だった島内行夫氏と、私の医学部同級生の石井威望氏でした。島内氏には、福武社長を紹介してくださるなど、いろいろとご支援をいただきました。石井氏は、同級生であります。東京大学医学部を出て医師免許を取った直後に工学部に入りなおして情報工学の専門家になりました。私が教授になったのとほぼ同じ頃、工学部教授になった親友です。そして、私の赤ちゃん研究からはじまり、いろいろとご支援くださいました。CRNの計画をお話すると、Child Research Net (CRN)という名前まで考えてくださり、いろいろご指導をくださったのです。

その後CRNは、様々な方のご協力により発展し、現在は日本語版ばかりでなく、英語版、中国語版（簡体字と繁体字）と3つの言語、4つのサイトに広がり、世界各地で子どもに関心をもつ学者や実践家と交流しています。これも、皆さん方のご指導、ご支援のおかげです。

今回、私も応分の年齢になりましたので、いろいろ考えた末、この4月から榊原氏にバトンタッチすることにしました。

榊原氏は、学生時代の頃から小児科に熱心な学生として記憶に残っています。卒業後私の小児科教室に入局し、小児科の臨床をされ、アメリカにも留学して小児神経学を勉強され、小児科専門医になられました。そして小児科医としては、数少ない「発達障害」の専門医として、診療ばかりでなく研究でも活躍されています。現在はお茶の水女子大学大学院で育児学・保育学・幼児教育学などを講義し、女子高等教育において活躍されています。また、私の始めた「日本子ども学会」でも副理事長として私をサポートしてくださっています。

これからのCRNは、榊原氏の新しい発想のもと、ますます活発に活動することになるでしょう。皆さま方におかれましては、これまでのご支援に感謝致しますとともに、引き続きご指導とご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

いいね! 0

ポスト



ゲームと遊び

掲載日： 2012年11月9日掲載

カテゴリー： 名誉所長メッセージ

中山隼雄科学技術文化財団が研究費を出して応援している研究者の発表会が、10月10日の午後1時に東京で開かれた。この財団には、現在は関わっていないのだが、中山隼雄さんが設立して以来最近まで関係していたためにお招きいただいた。テレビゲームなどのIT技術は、教育にうまく利用すれば有用であることは明らかなので、毎回出席して勉強させていただいている。

第I部では「オンラインゲームとゲームの教育利用」というテーマで3題の口演発表、「ゲームと遊びの本質・影響」というテーマで14題のポスター発表がされた。第II部でも「オンラインゲームとゲームの教育利用」というテーマで2題の口演発表、また「新しいゲームと技術」というテーマで14題のポスター発表が行われた。そして最後に「デジタルゲームを用いた遊びと学習の違い」という調査研究が口演で発表された。

その全てをここに紹介することはできないが、個人的に関心をもったテーマを紹介しよう。宮崎大学の宮野秀市さんは、仮想環境に高い臨場感を感じる者は、低い臨場感を感じる者に比べて、「他人との信頼」が高く、「行動が他者の影響を受ける傾向」とか「不安障害傾向」が低いことを、平均年齢20.8歳の女子学生41名を対象に性格検査質問紙を使って示した。また、

岩手大学の藤井義久さんは、小学4年から6年の小学生354人を対象に質問紙調査を実施し、テレビやパソコンなどの電子メディアを利用した遊びをよく行っている子どもほど、またひとり遊び、点数を競わない遊び、体を動かさない遊びを好む子どもほど、キレやすいことを示した。

名古屋工業大学の田中悟志さんは、高度な視覚・運動制御が必要なアクションビデオゲームの経験は、右頭頂葉領域灰質の体積を増加させる可能性を示し、この部分が視空間認知能力と関係するからであると説明した。

鹿児島大学の福留清博さんは、高齢者福祉に対するビデオゲームの利用について興味深い発表をした。ビデオゲームを利用したバーチャルリアリティ訓練をすると、片足立ち時間、10m最大歩行速度、左足中心移動速度などが向上し、高齢者の転倒を予防できる可能性があることを示した。

工学的な研究発表も多く、「視覚楽器」と称する時空間イメージを創り出す装置、二次元・三次元の動画の滑らかで高速な動きを作り出す技術、コガネムシや蝶、またサラマンダーなどの動物の動作を自然に作り出す装置の開発などが発表された。また、知的障害や読み書き障害のある子ども、入院治療を予定している子どもたちを遊ばせて、障害の克服や病院で受ける治療を学習させる研究まで発表された。

わが国では、メディアなどの技術を利用する弊害が強調されているが、コンテンツを含めうまく利用すればメリットは大きいことを、これらの研究は我々に教えている。

いいね！ 0

ポスト



<<前へ

1

2

3

次へ>>

調査データ

- ▶ 乳幼児
- ▶ 小中高生
- ▶ 国際調査

▶ More

研究論文

- ▶ 異文化理解
- ▶ 健康と発達
- ▶ 学校教育
- ▶ 子どもの権利

▶ More

海外の子育て

- ▶ インド
- ▶ カナダ
- ▶ タイ
- ▶ ドイツ (ベルリン)
- ▶ ニュージーランド
- ▶ ノルウェー
- ▶ フィンランド
- ▶ サウジアラビア ▶ More

CRNについて

- ▶ ごあいさつ
- ▶ CRN概要
- ▶ 活動履歴
- ▶ CRN刊行物

▶ More



TOP > 名誉所長ブログ



名誉所長ブログ

Koby's Note -Honorary Director's Blog

名誉所長ブログでは、CRNの創設者であり名誉所長である小林登の日々の活動の様子や、子どもをめぐる話題、所感などを発信しています。



台湾で初めての『東アジア子ども学交流プログラム』のシンポジウムが開かれた

掲載日： 2012年11月2日掲載

カテゴリー： 名誉所長メッセージ

この9月22日（土）、23日（日）、台湾で初めての「東アジア子ども学交流プログラム」のシンポジウムが台北で開かれた。テーマは『<遊び>と<学び>の子ども学』であった。ベネッセの台北支社の方々が熱心に応援して下さいましたので、盛會に終わることができた。

会場は、国立台北教育大学の300人程のホールであったが、テーマが良かったこともあって、台湾の幼稚園、保育園に関係する先生方や、学生さん達で一杯になった。スピーカーは、日本から3人（内2人は小児科医）、中国は上海から1人、台湾から4人（内1人は小児科医）であった。したがって、「子ども学」の立場から学際的に話し合うことができた。2日目の午後は、一般公開にして保護者も参加できるようにした。

22日午前10時から開会式が始まり、国立台北教育大学の学長陳先生の歓迎の御挨拶に続いて、私が「子ども問題の予防と解決」には「子ども学」の考え方が必要であることを申し上げた。そして、いろいろな子どもに関係する学問の専門家同士が話し合っ、できれば子ども問題を予防し、起こった場合は解決して、21世紀こそを「子どもの世紀」にしようと呼びかけた。台北で開かれるこのシンポジウムは、学問ばかりでなく、文化のバリアーを越えて話し合うことができる重要な会でもあることを、CRN代表として強調した。

シンポジウムが始まり、まず私が「子ども問題の予防と解決のために子ども学を」と題して話をした。そのまとめとして、「遊び」も「学び」も、子どもたちが遊ぶ喜び、学ぶ喜び、そして生きる喜び一杯の感動を体験できるようにするチャイルドケアリング・デザインが重要であることを申し上げた。

続いて、上海の華東師範大学教授の朱家雄先生が「子どもが遊ぶのか、それとも子どもは遊ばされているのか」と題して発表し、子どもの「遊び」の本質と価値についての先生のお考えと、子どもたちを自由に遊ばせることの重要性について講演された。

午後は、お茶の水女子大学教授の榊原洋一先生が「子どもの発達とおもちゃ」と題して、「おもちゃ」に関係する赤ちゃんの手足の発達・行動パターンを整理して、発達における「おもち

キーワード検索

Google 提供



インクルーシブ教育



社会情動的スキル



遊び



メディア



発達障害とは？



タイプ・年齢別の症状と対応

名誉所長ブログカテゴリ

- 名誉所長メッセージ (50)
- CRNスタッフメッセージ (1)
- リレーエッセイ

新着記事

- 【誰一人取り残さない「こどもみんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】 その11：若い世代の描くライフデザインや出会いを考えるワーキンググループ

や」の重要性を論じた。

続いて、中国医薬大学副教授の郭煌宗先生（小児科医）が「就学前の親子遊びと子どもの発達」と題して小さい子どもの遊びについては、親子の相互作用が重要であることについて話された。

1日目の講演の最後には、国立台北教育大学教授の翁麗芳先生が「台湾と日本の保育者の描く保育観」と題して日本と台湾の保育園・幼稚園関係者の考え方の相違を発表された。大変参考になった講演である。

2日目の午前には日本のおもちゃ美術館館長の多田千尋先生が、世界のおもちゃを分類してその役割を整理し、「幼児教育とおもちゃ」と題して、ワークショップ、実演を交えて興味深く参考になるお話をされた。

続いて、国立台北教育大学教授張世宗先生が「玩具から『学具』へ、教育から『楽育』へ—おもちゃの『遊芸』研究と応用」を題に、おもちゃによる学習、教育の意義を研究し、子どものみならず、生涯学習の中に取り入れるべく応用研究のお話もあった。新しい考え方としての「学具」、「楽具」、「遊芸」という発想は、大変勉強になった。

最後に国立台北教育大学教授の范丙林先生が「マルチメディアによる授業デザイン」と題して、教育のデジタル化に多様なインタラクションを加えた新しい教育方法を発表された。工学を勉強された教育学者の素晴らしい発表であった。

それぞれの講演に対する質疑応答ばかりでなく、午後の一般公開でも、2日間の講演について質疑応答を中心に発表者と参加者との間で活発な話し合いが行われたので、シンポジウム全体が活性化された。

私の台北訪問は、1971年が初めてである。その後東大小児科在任中に留学生を10人近くお世話したこともあって、台湾小児科学会に招かれるなど、いろいろな機会に台湾を訪問し、今回で少なくとも5回目になろう。台北は、緑濃い美しい街で、いつ来ても楽しい。その上、台湾料理も中華料理もおいしい。今回の旅で、体重は2kg近くも増えてしまった。

いいね！ 0

ポスト



医学を勉強したいと考えている若い人達に—人間科学

掲載日： 2012年10月11日掲載

カテゴリー： [名誉所長メッセージ](#)

医学と関係ない日本画家の家庭に育った私が、何故医学を勉強するようになったか、最近いろいろと考えるようになった。その答えは、結局のところ、戦後の混乱の中での人との出会いと運ということになる。しかし、医師になることは素晴らしいことであり、また医学を勉強することはもっと素晴らしいことであると考え、その思いを若い人たちに伝えたいと本文を書くことにした。

医学校で勉強した人のほとんどは、病院や診療所で、患者さんを診て、その痛みや苦しみを取り除き、病を癒し生命を救うという、家庭ばかりでなく社会にとっても大変重要な仕事をしている。したがって、当然のことながら、患者さんの痛みや苦しみに共感できる優しい心を持った人にこそ、お医者さんになって頂きたいと思う。

しかし、医学を勉強した人が、医療以外のいろいろな仕事で活躍していることは、皆さん御存知の通り。厚労省ばかりでなく、保健所や役所に勤めているお役人さん達、医学校ばかりでなく、一般的な学校や大学で教えている教育職の人達、更には小説家、音楽家、画家というよう

- [【ニュージーランド子育て・教育便り】第51回 天候被害に関する子どもの準備・事後の](#) [PAGE TOP](#)
- [【カナダBC州の子育てレポート】第37回 フルインクルーシブ教育：自立と自律を中心に考える](#)
- [【誰一人取り残さない「こどもまんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】その10：こども政策に関する国と地方の協議の場～こども政策の最前線は自治体～](#)
- [【ドイツの子育て・教育事情～ベルリンの場合】第62回 子どもの健康診査～日独比較](#)
- [【一人一人の違いに寄り添うために】第12回 知識は無限、順位は有限](#)
- [【インドの育児と教育レポート～チェンナイ編】第11回 インドの学校教育におけるスクールカウンセラーの役割](#)
- [【カナダBC州の子育てレポート】第36回 フルインクルーシブ教育の理想と現実](#)
- [【誰一人取り残さない「こどもまんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】その9：「こどもまんなか」の視点で乳幼児の育ちを支える「こども誰でも通園制度」について](#)
- [【CRNA国際共同研究】子どものレジリエンスを育む保育実践に関する調査2024 結果報告](#)



Tweets by crn_jp

な芸術家までいろいろな人がいるのである。

それは何故かと考えてみた。その答えは、病気のことを教える前に、医学では「人間とは何か」ということを教えているからであると思う。人間は、生物的存在として生まれ、社会的存在として育ち育てられ、そして生きいきといえる。医学では、解剖学・生理学・生化学のような基礎医学の立場で人間の生物学的側面を教え、人間生態学・公衆衛生学のような、広く言えば社会医学の立場で人間の社会的側面を教えているのである。勿論、それで充分とは言えない。しかし、考えてみればこれらの学問は、「人間科学」"Human Science"としてまとめられる。その場合、「社会文化」も「情報」として人間の生態因子に位置づける立場が重要になろう。

この様な「人間科学」こそ、人に関係する仕事を職業にする人が皆学ぶべき学問である。逆に、医学を学んだ人は、人間科学を学んでいるからこそ、人間に関係する医師以外の職業にも就いていると思うのである。そして、同じように子どもに関わる仕事を職業にする人も、当然のことながら、「子ども人間科学」を学ばなければならないと思う。それを、私は「子ども学」"Child Science"とよんでいるのである。

いいね! 0

ポスト



ご意見・ご質問 PAGE TOP

CRNへのご意見・ご質問はこちらへお寄せください。

ご意見・ご質問はこちら

メルマガ登録

メールマガジン「CRN通信」を購読しませんか？子どもにまつわる耳よりな情報をお届けします。

登録・変更はこちら

軽井沢で日本思春期学会が開かれた

掲載日： 2012年9月20日掲載

カテゴリー： 名誉所長メッセージ

第31回「日本思春期学会」学術集会・総会が「思春期の危機に迫る」をメインテーマにして、今月初めの9月1日、2日に軽井沢で開かれた。学会長は産婦人科の女医・家坂清子先生で、「ぐんま思春期研究会」の会長さんでもいらっしゃる。この学会が、女性の医師を会長として開催されるのは初めてであろう。参加者は1,000人を越し、大成功であったと言われている。女性の参加者が多く、「女性の實力」が感じられる学会でもあった。

この学会は、思春期の子どもたちの問題を産婦人科学、泌尿器科学、内科学、女性内科学、心身医学などの医学を出発点として、医学関係者ばかりでなく社会学、教育学、心理学、保健学などの専門家も加わって勉強する学際的な学会である。したがって、参加者は医師ばかりでなく、看護師、保健師、助産師、小学校・中学校・高等学校の教員、心理学関係の職員、そして行政関係の方々も参加している。

日本思春期学会は、当時群馬大学産婦人科教授でいらした故松本清一先生が1963年（昭和38年）に、思春期医学会として多くの産婦人科医、泌尿器科医、小児科医、公衆衛生学者らと共に第一回の研究会を開いたのが始まりで、1982年（昭和57年）には思春期学会に改称して、学会活動を続けて来た。私が学会に招かれて入ったのは、学会名が変わってからであった。

今回の学会ではメインテーマの「思春期の危機に迫る」を反映し、「思春期の友人関係」、「不登校」、「ひきこもり」、「自傷行為」、「性同一性障害」、「性虐待」、「性感染症」、「性教育」などの諸問題について、教育講演などとしてわが国のリーダーによる発表、そしてシンポジウム・一般演題として若手研究者による発表が多数行われた。また会長講演として家坂先生は、「思春期の危機を見つめて」と題して、産婦人科外来から広くみた思春期問題のレビューをされた。

日本思春期学会の理事長は公衆衛生学者の林謙治先生であるが、「家族計画」、「リプロダクティブ・ヘルス」、「思春期妊娠対策」などの問題について、社会医学の立場から国際的な流れもふくめて理事長講演をされ、大変勉強になった。「リプロダクティブ・ヘルス」"Reproductive Health"という概念が、カイロで1994年に開かれた国際人口開発会議で「女性の生涯にわたる性と生殖の健康」という定義で提唱されたという話は、興味深かった。

価値観の多様化する現在の豊かな社会の世相を反映して、思春期の子どもたちが当面する諸問題も、いろいろな要因が複雑にからみ合って、身体的な問題ばかりでなく、多様な心の問題も

おこしている。御関心をおもちの方々は、ぜひ入会されて勉強して頂きたい。

いいね! 0

ポスト

B!

PAGE TOP

赤ちゃん誕生で「うつ」になる父親

掲載日： 2012年9月18日掲載

カテゴリー： [名誉所長メッセージ](#)

赤ちゃんの妊娠・分娩・育児に関して、母親が「うつ」状態になりやすいということは常識的なことである。ところが、父親も「うつ」になりやすいことが、イギリスの研究で最近明らかになったという。論文を読んでいないので、その理由は明らかではないが、もし事実であるならば、考えなければならぬことである。

女性の場合、妊娠・出産・育児のそれぞれのステップにホルモンが関係するので、多様なホルモンの分泌の変化と子育てのいとなみ（労働）が精神的ストレスとしてからみ合った結果で、女性の「うつ」が発症すると考えられている。しかし、男性の場合は妊娠・分娩という身体的な変化やホルモンの分泌とは関係ないので、育児のいとなみ（労働）のみが精神的ストレスになっておることになる。日本でも最近では父親の子育て支援が盛んに言われるようになっているので、その可能性は高い。

早速、わが国でも父親の「うつ」と母親の妊娠・出産・育児の関係を明らかにして、予防処置を考えるべきであろう。

いいね! 0

ポスト

B!

閉校した東京大学医学部附属看護学校の同窓会

掲載日： 2012年6月25日掲載

カテゴリー： [名誉所長メッセージ](#)

5月19日（土）夕方、東大病院入院棟の屋上15階にあるレストランで開かれた東京大学医学部附属看護学校の同窓会の親睦会に、元学校長として招かれ出席した。窓から東京の下町が一望でき、あちこちに立つ高層ビルばかりでなく、スカイツリーも見える素晴らしい風景を楽しみながら、元学生たちと話に花を咲かせた楽しいひと時であった。

東京大学医学部附属病院は、1858年（安政5年）に設立した種痘所から始まる150年もの歴史をもっている。したがって、東京大学医学部附属看護学校の歴史も長く、100年を超える。種痘所が紆余曲折をへて東京大学医学部になったのが1877年（明治10年）、その20年後の1897年にイギリスから看護師を招いて、わが国初の大学病院附属看護学校の看護教育が始まったという。しかし、ご存知のように、看護教育が戦後アメリカ式になり、25年経った1970年代に入ると大学教育に位置づけるべきと考えられるようになった。したがって、国立大学医学部付属の専門学校レベルの学校は次々と短大、あるいは四年生の大学に移行して、現在はなくなってしまったのである。東京大学医学部附属看護学校も、次に述べる様な経緯で10年前に閉校した。

東京大学は、ある意味で看護教育に対する先見性があり、聖路加病院付属看護学校が4年制大学に移行した後を追って、1953年（昭和28年）には、医学部に衛生看護学科を設置した。したがって、附属看護学校が閉校した2002年まで、東京大学には大学レベルの看護教育と専門学校レベルの看護教育の2つのコースが約50年間続いていたことになる。全ての国立大学の附属看護学校が短大化、あるいは大学化するなかで、東京大学は50年前に設立した4年制看護教育を生かした。しかし、残念ながら専修学校としての看護学校は10年前に閉校せざるを得なかったのである。

大学紛争直後の1970年に、私が東大の小児科の教授に就任して間もなく、この看護学校長に任命された。それまで、病院長が兼任していたのであるが、大学紛争の余波で、病院にもゴタゴタがあり、院長業務が難しくなっていた。そこで、別に看護学校長のポストを作ることになり、教授になったばかりの私が選ばれたのである。大学紛争の影響で看護学校の学生さん達も

落ちつかず、「学校長同交」というピラが貼られている古い校舎で、初めて学生さん達と話し合ったことを今も思い出す。

PAGE TOP

また、その半年後に行われた最初の卒業式は、学生さんたちが卒業式をボイコットしたので、たったひとりの卒業生に卒業証書を渡すだけの式となってしまった。その思い出は今も強く目に浮ぶ。その卒業式に出席した、意志が強く真面目で立派な学生さんは、この度の同窓会には残念ながら出席しておられなかったが、今どうしておられるのだろうか。立派なお母さんになられているに違いない。

このようなピラや、卒業生たったひとりの卒業式で始まった私の看護学校長の仕事ではあったが、ストをやったりした学生さんたちは、親睦会で出会うと、今や立派な看護師になられていた。いろいろななかたちで、今も立派に看護関係の仕事が続けられている話を直接伺って、大変嬉しく思うとともに、女性のたくましく生きていく姿に感銘を受けた。

閉校した東京大学医学部附属看護学校は、2年に1回同窓会を開いている。毎回50～60人は集まるようである。2年後に、またこの同窓会に出席できるよう元気でいたいものである。

いいね！ 0

ポスト

BI

<<前へ

2

3

4

次へ>>

調査データ

- ▶ 乳幼児
- ▶ 小中高生
- ▶ 国際調査

▶ More

研究論文

- ▶ 異文化理解
- ▶ 健康と発達
- ▶ 学校教育
- ▶ 子どもの権利

▶ More

海外の子育て

- ▶ インド
- ▶ カナダ
- ▶ タイ
- ▶ ドイツ (ベルリン)
- ▶ ニュージーランド
- ▶ ノルウェー
- ▶ フィンランド
- ▶ サウジアラビア ▶ More

CRNについて

- ▶ ごあいさつ
- ▶ CRN概要
- ▶ 活動履歴
- ▶ CRN刊行物

▶ More



TOP > 名誉所長ブログ



名誉所長ブログ

Koby's Note -Honorary Director's Blog

名誉所長ブログでは、CRNの創設者であり名誉所長である小林登の日々の活動の様子や、子どもをめぐる話題、所感などを発信しています。



子どもの虹情報研修センターは10周年をむかえた

掲載日： 2012年6月6日掲載

カテゴリー： 名誉所長メッセージ

「子どもの虹情報研修センター」というと、何をやる所かわからない方も少なくないと思う。正式名称は「日本虐待・思春期問題情報研修センター」という堅苦しい名前である。虹センターという名前は、虐待などの言葉を表に出さないで、「優しい」、「希望をもてる」名前にしようと思われたものである。スコットランドのグラスゴーの子ども病院には、虐待を専門とする「レインボー・クリニック」というのがあることも、参考になった。

このセンターは、政府が戸塚にある横浜博萌会という社会福祉法人に委託して、運営されている施設である。子ども虐待に関する情報を集め、それを整理分析して、問題点を明らかにし、より良い対応を確立するため、日本全国にある関係する施設の職員の研修を行うことを目的とするセンターなのである。

政府は、多発し増加する子ども虐待に対応するため、平成12年4月に、センター設立準備室を設置し、平成14年4月に子どもの虹情報研修センターを設立した。初めはプレハブの仮設事務所であったが、早速業務を開始し、7月には第1回目の研修を近くのウィリング横浜という横浜市の会館で行った。「新任児童相談所長研修」であった。平成15年3月には、3階建てのセンターの建物を竣工し、開所式が行われ、本番の業務が始まった。この第1回の研修、また開所式のことは、今も思い出す。

開始した平成14年度は、研修は10回、研究は2プロジェクトであったが、徐々に増加し、平成23年度には研修は26回と2.5倍に、研究は10プロジェクトと5倍に増加している。虐待問題の複雑な事例についての専門相談件数も、始めた頃の平成15年度の76件から平成23年度の448件と6倍になっている。

光栄にも私は、厚労省の依頼でこの初代センター長を拝命し、設立以来8年間にわたって務めさせて頂いた。2年程前の平成22年4月に、大阪府立母子保健センター部長であり、私のあとに日本子ども虐待防止学会会長を継いだ方でもある、小林美智子先生にバトンタッチした。美智子センター長になって、早速の平成23年11月には内閣府から大臣表彰を受け、この5月12日には10周年の記念シンポジウム「子ども虐待対応を考える：これまでの10年とこれからの10年」が開かれたのである。

私が初めて子ども虐待の事例をみたのは、1954年の冬、アメリカでインターンをしている時であった。その時、こんな問題が病気として子どもの救急患者の中にいるということに驚くと共に、ひょっとすると、子どもを大切にするとされる日本人社会でも、現われるかも知れない

キーワード検索

Google 提供



インクルーシブ教育



社会情動的スキル



遊び



メディア



発達障害とは？



名誉所長ブログカテゴリ

- 名誉所長メッセージ (50)
- CRNスタッフメッセージ (1)
- リレーエッセイ

新着記事

- 【誰一人取り残さない「こどもみんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】 その11：若い世代の描くライフデザインや出会いを考えるワーキンググループ

と思った。日本に帰って東大病院で働き始めると、1960年代末から、大学病院でも年間2、3例では見られ始めた。勿論、一般病院、さらに社会で広く見れば、「子ども虐待、子ども虐待」と騒がれる程多く見られるようになっていたのである。そして、その数が減る傾向は全くなく、徐々に増加している。

残念ながら、10周年記念のシンポジウムには出席できなかったが、お祝いの会には出席して、仲間達と会うことができた。子ども虐待が増加する中、このセンターの果たすべき役割は、ますます大きくなることには間違いない。御関心をおもちの方は、[子どもの虹情報研修センター](#)にお問い合わせくだされば、必要な情報は得られることと思う。

いいね！ 0

ポスト



医者さんは長寿

掲載日： 2012年5月21日掲載

カテゴリー： 名誉所長メッセージ

医者は、健康のあり方を学んでいるので、確かに長生きする人は少なくない。皆さんご存知の方の中では、先ず日野原重明先生であろう。100歳を過ぎても、テレビの映像や、新聞・雑誌に現れるあの元気なお姿をみる度に、私もあのようにになりたいものと思う。

日野原先生には、2桁に近い回数のお祝いのお会が開かれたそうである。それを、全てお元気にお出されたという。この所長ブログ「[日野原重明先生の100歳の誕生日をお祝いして](#)」に書いたように、私もあるお祝いの会に招かれて元気なお姿を拝見した。

日野原先生と私のおつき合いは、古い。もう30年前になるが、文部省の看護教育の視学委員として、あちこちの看護学校・大学に、また厚生省の研修に関係する委員として、地方のいくつかの病院に御一緒させていただいた。そんな時はいつも、視察に直接関係するお話ばかりでなく、長寿や健康についてもいろいろと教えてくださった。先生の長寿は、日々の生活の中で作られているのである。

長寿のシンボルともいえるお医者さんの中に小児科医も少なくない。しかも、身近にである。その代表は、東大小児科の大先輩である広瀬茂先生である。現在、109歳であるから、日野原先生以上である。今から7年程前の2005年に、私の後任の教授3人と一緒に4人で広瀬先生を東大にお招きして、お祝いのお食事の会をしたことがある。お嬢様と御一緒にお出でくださったが、饗饌（かくしゃく）として健啖、一同6人で医学部のイタリアンレストランで楽しいひと時をもった。

同じく、東大小児科の先輩、「育児の神様」と言われた内藤寿七郎先生も、長寿の小児科医である。残念ながら2007年12月に101歳で天寿を全うされた。戦後の混乱の中で、旧制高校の生徒だった私は、焼野原の浅草に建ったばかりの、薬屋さんの家の2階で育児相談をなさっている内藤先生にお会いした。その薬屋さんの小学生の息子さんの家庭教師をしていたのが御縁である。その内藤先生との出会いで、理学部か工学部に入ろうか迷っていた私は、医学部に進路を決め、一年浪人して医学部に入って、結局小児科医の道を進むことになった。内藤先生は私に人生の生き方を教えてくださった、大恩人なのである。

「医者は不養生」とよく言うが、医師は健康のノウハウを知っているので、長生きする人が多いようである。私も、100歳を目指して朝晩体操をしている。海軍の時に学んだ体操に、テレビでやっていた老人体操を組み合わせたものである。

いいね！ 0

ポスト



おもちの王様、佐藤安太先生の88歳の夢－総理大臣・閣僚の1日研修を開きたい

掲載日： 2012年5月8日掲載

- [【ニュージーランド子育て・教育便り】第51回 天候被害に関する子どもの準備・事後の](#) [PAGE TOP](#)
- [【カナダBC州の子育てレポート】第37回 フルインクルーシブ教育：自立と自律を中心に考える](#)
- [【誰一人取り残さない「こどもまんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】その10：こども政策に関する国と地方の協議の場～こども政策の最前線は自治体～](#)
- [【ドイツの子育て・教育事情～ベルリンの場合】第62回 子どもの健康診査～日独比較](#)
- [【一人一人の違いに寄り添うために】第12回 知識は無限、順位は有限](#)
- [【インドの育児と教育レポート～チェンナイ編】第11回 インドの学校教育におけるスクールカウンセラーの役割](#)
- [【カナダBC州の子育てレポート】第36回 フルインクルーシブ教育の理想と現実](#)
- [【誰一人取り残さない「こどもまんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】その9：「こどもまんなか」の視点で乳幼児の育ちを支える「こども誰でも通園制度」について](#)
- [【CRNA国際共同研究】子どものレジリエンスを育む保育実践に関する調査2024 結果報告](#)



Tweets by crn_jp

カテゴリー： [名誉所長メッセージ](#)

戦後「ダッコちゃん」や「リカちゃん人形」などの大ブームを起こした玩具を制作したことで有名な、佐藤安太先生の「米寿の会」がライフマネージメント学会の主催で、先月3月22日の午後に関われました。安太先生は88歳に見えない若さで、元気いっぱいでした。

安太先生の設立された玩具財団の仕事には、私も20年以上も関係してきたことから、そのお祝いの会に出席し、楽しいひと時を過ごすことができました。その時の安太先生のお話が大変魅力的だったので、ここに紹介申し上げます。

安太先生は、自分にはとても実現できそうにもない「夢」を抱いた時、それを口に出して喋り、文章にして発表したりして、繰り返しその夢を発表し続けると、必ず実現できるようになるとおっしゃるのです。それを「夢実現法」と呼んで、多くの方々に薦めていらっしゃるそうです。安太先生の作られた「ダッコちゃん」も、「リカちゃん人形」も、その「夢実現法」を実践された結果だという話です。

88歳を迎えるに当たって、安太先生は「新しい国づくりの夢」をもちました。それを実現するには当然「夢実現法」を始めるしかありません。その夢を話さなければなりませんし、書かなければなりません。それを米寿のお祝いの会でお話しされました。当然のことながら、話す内容は文章にされて、印刷物にもなり、資料と一緒に出席者に配布されたのです。そして、総理大臣と全閣僚に1日研修会を開いて直接お話し申し上げ、わが国の当面する問題を解決し、現在の国難を乗り越えたいとおっしゃり、出席者一同を湧かせました。

そんな考えを安太先生がもたれたのは、20年程前から経済的に不調になった韓国が破産した後、1997年にIMFから援助を受け、2008年にはリーマンショックも加わったにもかかわらず、最近大きく変わって素晴らしい発展を遂げている姿をみたことが全ての始まりだそうです。安太先生が「ライフマネージメント学」という考えを発表して以来、韓国の海洋大学と関係ができ、そこで講義され、学生や教官とも交流するようになって、韓国の発展ぶりを身をもって体験されたことも大きいようです。それに加えて、昨年出版された大前研一氏の著書『新国家戦略論』（朝日新聞出版）をお読みになって、韓国が生まれ変わるドラマの全体像や真相などを理解されたのです。

現在日本を取り巻く内外の環境が激変しているにもかかわらず、国が旧態依然とした体制のままであることが最も大きい問題であると、安太先生は指摘しています。外を見れば、世界はグローバル競争の時代にあり、内を見ればわが国は「肉体労働社会」から「知的労働社会」に大きく変わっています。国や社会の全ての制度、システム、仕組みを、根本から発想を転換して、新しい時代の要求に合うようにしなければならないとおっしゃるのです。

安太先生は、「グローバル化社会」や「知的労働社会」に対応するには、国家を「次世代システム国家」にしなければならないと考えていらっしゃいます。それを、自らデザインしようとしているのです。それを考える素材として、身近な商店の運営のやり方を挙げています。その昔の商店は、家族が中心になって商品を選び、品揃えして販売していました。しかし、現在の商店の代表であるコンビニエンス・ストアでは、商品の売れ行きも、在庫量も、値段も、伝票も、全てがコンピューターで管理され、少しでも売り上げを上げられるように、あらゆるファクターを勘案して運営されているとおっしゃるのです。

国家となると、それなりに複雑なシステムの統合体ですが、システムを整理し、機能するメカニズムを明らかにして、包括的、統合的に管理できるような「次世代システム国家」でなければならないと考えるのです。それには、情報科学や数学のような高度な理論科学も必要なのではないかと、個人的には考えました。

さらに「次世代システム国家」を実現するため、総理大臣と全閣僚には、ぜひ1日研修を受けて頂きたいと、安太先生は考えています。研修は2つに分かれていて、第1は「人材育成研修」であって、人格形成とか、人間としての器量を大きくすることなどを行って、政治家が国民の模範となれるようにしたいと計画しているようです。考えてみれば、新聞の報道やテレビのニュースで映る、政治家の、どうしてこんなと思うような行動を見ると、私でさえもそう思い付くくらいですから、安太先生にすれば、何とかしたいと思われていることが沢山あるに違いないでしょう。

[ご意見・ご質問](#) PAGE TOP

CRNへのご意見・ご質問はこちらへお寄せください。

[ご意見・ご質問はこちら](#)

メルマガ登録

メールマガジン「CRN通信」を購入しませんか？子どもにまつわる耳よりな情報をお届けします。

[登録・変更はこちら](#)

研修の第2は、「重点国家戦略設定研修」だそうです。総理大臣として、責任をもって「国家ビジョン」、「国家目標」を立てること、「グローバル化」、「一国二制度」を進める国家戦略を立てることです。さらに、政治・経済・教育・スポーツ・文化などあらゆる分野で世界ーを目指す目標を総理大臣として示すべきであるとしています。さらには、どんな政策が、どんな成果を上げたか、または逆に上げなかったかを、「政策教書」として発表するべきであるとしています。

佐藤安太先生の、米寿の会で述べられた夢は、余りにも壮大で全てを述べることはできませんが、もし御希望の方がいらっしゃったら、[ライフマネジメントセンター](#)に電話されれば、資料は手に入ると思います。最後に安太先生は、アメリカのケネディ大統領も自律自戒の教訓とされて有名になった上杉鷹山公の「伝国の辞」と句を紹介して講演を終えられました。

伝国の辞

- 1) 国家は、先祖より子孫に伝え候国家にして、我私すべき物には無之候
- 2) 人民は、国家に属したる人民にして、我私すべき物にはこれ無之候
- 3) 国家人民の為に立たる君にて、君の為に立たる国家人民には無之候

右三条御遺念有間敷候事

天明五巳年二月七日 治憲 花押

治広殿 机前

受次て国の司の身となれば 忘るまじきは民の父母

なせばなるなさねばならぬ何事も ならぬは人のなさぬなりけり

いいね! 0

ポスト



3月4日に、西和賀子育てフォーラムに行ってきた

掲載日： 2012年4月18日掲載

カテゴリー： [名誉所長メッセージ](#)

岩手県の西和賀町で3月4日に開かれた「子育てフォーラム」で講演する話が日本子守唄協会からきた時、まず「西和賀ってどこ？」と思った。そこでWikipediaを開いてみると、三方が標高1,000m級の奥羽山脈に囲まれ、残りの一方が秋田県の横手盆地に向かって開かれており、冬は積雪2m以上になる特別豪雪地帯にある、和賀川沿いの町であった。そして、2005年に湯田町と沢内村が合併して西和賀町になった、と書かれているのを見て驚いた。

沢内村といえば、その昔、乳児死亡率が極めて高い寒村であった。しかし、1957年に村長になられた深沢晟雄氏が、1歳未満の乳児と60歳以上の老人の医療費を無料化し、行政と医師・保健婦のチームで保健活動を盛り上げ、老人保健の向上ばかりでなく、乳児死亡率を激減させたのである。そして1962年には、ついに乳児死亡率をゼロにしたことで、保健界や医療界で大きな話題になった村なのである。東大小児科の責任者になった1970代に入った頃、その話を当時の日本医師会長武見太郎先生からいろいろとうかがったので、沢内村に一度は行ってみたいと前から考えていた。今回、それが実現したので大変嬉しかった。

東京から東北新幹線に乗ると、2時間45分程で盛岡から二駅手前の「北上」につき、秋田の横手行のローカル線に乗りかえた。「北上」から山に向かってのぼるにつれて、雪が次第に深くなり、約45分走ると、2m近い残雪の「ほっとゆだ」駅についた。駅から歩いて10分程の西和賀町文化創造館・銀河ホールで、子育てフォーラムは開かれたのである。

ホールは、まわりの雪に黄色が目立つ色鮮やかな建物でちょっと驚いたが、その地域は音楽や演劇の活動が活発で、そのためにも作られたことを知り、建物の派手な感じにも納得した。中には椅子席ばかりでなく、老人のためと考えられる座敷席まであったのである。勿論、雪は車の通る道路には殆どなかったが、両側は高い残雪の壁で、ホールの前の大きな窓からは、和賀川をこえて奥羽山脈の雪山が近く遠くにみられた。

会は主催者代表のNPO法人輝け「いのち」ネットワーク代表の高橋和子さん—深沢村長のもとで保健婦さんとして活躍された方である—そのごあいさつに続いて、盛岡のみちのくみどり学園の中学生の大きな太鼓の演奏で始まった。続く第一部に私の基調講演「子育てに大切な優しさ」が行われ、第二部はみちのくみどり学園長藤沢昇先生司会の「虐待防止は子守唄から」のパネルディスカッションが続いた。西和賀町に子ども虐待が多いわけではなく、むしろ、ないと言えるのではないと思う。しかし、町の事業として、虐待で親元をはなれて施設にいる子ども達を、週末とか休暇の折に、町民それぞれの自宅に泊めてお世話をしているのである。そのような家庭的なものにふれた子ども達の喜びは、特に大きいという。

そして第三部では、地元の女性合唱団の合唱と、バンド演奏、そして日本子守唄協会の川口京子さんによるわが国各地方の子守唄などなど。続いていつもの「よいとまけの歌」も、長谷川美佐子さんのピアノ伴奏で歌われた。そしてフィナーレは、出演者全員がステージに上り、会場の皆さんと一緒に「ふるさと」を歌ったのである。

ホールは満席というわけにはいかなかったが、第一部、第二部の教育的な部分も、第三部の歌と音楽によるエンターテインメントの部分も、それなりの盛り上がりを見せ、社会教育的な意義は充分果たせたものと思う。

ホールの外では、残雪が春の陽光に輝いていた。西和賀町は、近くに旧石器時代の遺跡もあるそうで、われわれの遠い祖先が住み続けてきた長い人間の歴史と、その静かな営みを感じさせる町であった。夕方帰京の途、ほっとゆざわ駅のホームの脇で、残雪も消えた地面に低い西の太陽に映えるように開いている黄色い小さな花一輪を、ひとりの青年が写真に撮っているのに気付いた。何を撮っているのかと思っていたら、私の脇で一緒に来る列車を待っていた町のおばさんが、春を待つ明るい声で、「タンポポ」と教えてくれた。豪雪の町も、春本番は近いのである。

いいね! 0

ポスト



CANVASがデジタル絵本のコンテストを始めた

掲載日： 2012年4月11日掲載

カテゴリー： [名誉所長メッセージ](#)

CANVASとは、石戸奈々子さんが2002年11月に始められた、「遊びと学びのヒミツ基地」と称する、子ども達の想像力や表現力を育てるNPO活動である。具体的には、「キッズクリエイティブ研究所」と称して、幼児・学童（小学生）が参加するさまざまなワークショップなどを、東京大学福武ラーニングスタジオ、慶應義塾大学日吉キャンパス生協館、さらに二子玉川ライズ・オフィス（8F）で、それぞれ月1回程開催している。それらのワークショップは、造形・デザイン・映像・音楽・デジタル・言葉・体・環境・サイエンス・食などに関係するアーティストや専門家によって企画開発されている。

また、毎年1回、子ども向けワークショップの博覧会と言える、「ワークショップコレクション」が慶應大学日吉キャンパスで開かれ、いろいろな形式のワークショップを集めて公開することも行っている。この2月25日、26日に、その第8回目が開かれ、7万5,000人程の子どもが集まったという。当日行ってみて、子ども達の長い行列に驚いた。

CRNでも、設立後間もなくの何年間にわたって、「あそび」と「学び」を融合するにはどうしたら良いかを考える「プレイショップ」と称するワークショップを開いたことがあり、また「エデュテイメント」という考えも提唱したことがある。CANVASの目指すところは、これと相通ずるものがあるように思う。

そもそも「あそび」と「学び」は融合しているものである。それは、赤ちゃんや小さな子どもを見れば明らかである。それが社会の先進化と共に、学校という教育専門の施設が現われ、年齢別に分かれて、「あそび」と「学び」は乖離したのである。伝統文化の社会では、その乖離は弱く、子ども達は大きくなるまで生きるすべ（術）を遊びながら学んでいるのである。

子どもにとって、あそび喜び、学ぶ喜びを体験し、生きる喜び一杯になることが体の成長、特に心の発達にとって重要であることは明らかである。したがって、現在の社会において、「あそび」と「学び」を融合させるには、「子ども生命感動学」"Child Bio-emotionemics"という、新しい学問の体系づけが必要とさえ考えている事は、前にも折々述べた。

そのCANVASが、昨年子ども達がワクワクする新しいデジタル表現手法を開発して、「子どもとデジタル」を総合的にプロデュースする「(株)デジタルえほん」を設立した。そして、昨年「デジタルえほんアワード」という表彰事業を始めたのである。「デジタルえほん」とは、タブレット、電子書籍リーダー、電子黒板・サイネージ、スマートフォン等、テレビやパソコン以外の新しい端末を含む子ども向けデジタル表現を総称したものである。その審査委員として招かれ、この「ワークショップ・コレクション」の当日である2月25日（土）に開かれた授賞式に参加した。

作品部門では、審査員特別賞に「とんでけ おふとん」（ラチオえほんプロジェクト作）、準グランプリに「こえのわ」（チームこえのわ作）、そしてグランプリに「さわって おして ゆびあそぶっく ちょんちょんちょん」（tocco作）が選ばれた。企画部門では審査員特別賞に「ホニヤかわ！！」（チームわれら作）、準グランプリに「ねこみっけ」（滝原宏野作）、そしてグランプリに「アカリ・トモス・ユビサキ」（西野つぐみ作）が選ばれた。

個人的には、グランプリになった「さわって おして ゆびあそぶっく ちょんちょんちょん」は特に良い作品だと思った。「たのしい」、「みたことがない」、「世界がひろがる」の選考基準の他に、個人的に関心ある"チャイルドケアリング・デザイン"（子どものことを気にかけてデザインする）、「理性の情報」と「感性の情報」の表現の在り方も勘案して選ばせて頂いた。

本作品は、小さい幼児でも簡単にできる三拍子の指押しの操作で、「卵の殻が破れて雛が生まれる」、「鍵盤をタップするとピアノの音と音符が出る」などの簡単な物語を、デジタル絵本ならではの機能を働かせ、明るく感性の情報豊かに映像化している。人差し指の感覚と共に、視覚・聴覚を介して脳を働かせ、この時期活発な「言語」、「象徴」、「社会的参照」などの機能の発達を加速させるチャイルドケアリング・デザインの良い作品と考えたのである。

選ばれた作品は勿論のこと、選にもれた応募作品の中にも、沢山の良いものがあった。デジタル技術を駆使することによって、盛り込もうとする情報を映像として色々なかたちにデザインすることができ、「感性の情報」も、いろいろな音声・色彩を中心にデザインとして与えることが可能であり、デジタル絵本の未来は大きいことを実感した。成り行きによっては、従来の絵本は消えてしまうのではないかとさえ思えた。更にコンテンツの情報を十分に工夫すれば、教育効果も高められることは明らかで、関係者のやらなければならない事は多いと実感した。そして、それはデジタル教科書に続くものでもあることも重要である。

いいね！ 0

ポスト



<< 前へ

3

4

5

次へ >>

調査データ

- ▶ 乳幼児
- ▶ 小中高生
- ▶ 国際調査

▶ More

研究論文

- ▶ 異文化理解
- ▶ 健康と発達
- ▶ 学校教育
- ▶ 子どもの権利

▶ More

海外の子育て

- ▶ インド
- ▶ カナダ
- ▶ タイ
- ▶ ドイツ（ベルリン）
- ▶ ニュージーランド
- ▶ ノルウェー
- ▶ フィンランド
- ▶ サウジアラビア ▶ More

CRNについて

- ▶ ごあいさつ
- ▶ CRN概要
- ▶ 活動履歴
- ▶ CRN刊行物

▶ More

TOP > 名誉所長ブログ



名誉所長ブログ

Koby's Note -Honorary Director's Blog

名誉所長ブログでは、CRNの創設者であり名誉所長である小林登の日々の活動の様子や、子どもをめぐる話題、所感などを発信しています。



シベリアの友、小児科医コズロフ教授

掲載日： 2012年3月30日掲載

カテゴリー： 名誉所長メッセージ

最近の所長ブログでは「モスクワから来た難病のサーシャちゃん」、続いて「ロシア小児科学のアカデミシャン、ステュディニキン教授」と、ロシア関連のものを書いてきたが、最後にシベリアのアカデミシャン、ハバロフスク大学の小児科学教授コズロフ先生の話を書こう。

先天的な難病のサーシャちゃんが、モスクワから（私が院長を務める）国立小児病院に入院した頃、シベリアの各地から小児がんや白血病の難病の子どもたちの入院の要請があった。実際に入院したのは、二人程であったかと思うが、カムチャッカの小児科医からも要請があったくらいで、ソ連邦崩壊に向けて、シベリアの医療も混乱していた時代だったのでなかろうか。

国立小児病院の小児科医とシベリアの小児科医との交流を提案したのは私であったが、相手はコズロフ教授であった。子どもの患者を外国に送って治療を受けるということは、どちらにとっても、負担が少なくないことは明らかである。最初は、国立小児病院から小児神経学と小児血液学の専門医二名がハバロフスクに行くことになった。相手側の要請もあって、専門が決まったものと思う。

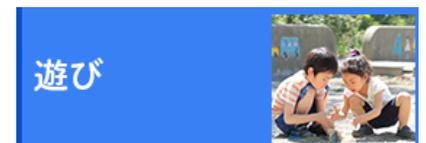
実際に私が初めてハバロフスクに行ったのは、その翌年の秋であったかと思う。新潟から飛行機で2時間足らず、ハバロフスクの町は近くて遠い町であった。当時の町は、活気なく閑散としていた。病院も、わが国の終戦直後のような状態であって、壊れた建物は修理されず、特にトイレはひどかった。何しろ、教授の月給が数カ月も遅れるという状態だったのである。ある週末のひと時、アムール川の林に、ピクニックに案内していただいた。鮭だったと思う、ゴツタ煮ではあるが、ピクニックでの食事の味は格別であったことを今も思い出す。

コズロフ教授は、明るく知性高い風貌のアカデミシャンの小児科医であった。すなわち、モスクワのステュディニキン教授と同じように、研究業績による学会会議のメンバーであって、ハバロフスク大学ではアカデミシャンは彼一人であった。専門は小児科学と言うよりは、新生児学であって、ハバロフスク大学の産院の院長もしておられた。始めて会った時以来、意気投合して、私の考えた日ソ交流の勉強会が始まったのである。残念ながら、コズロフ教授は英語が話せなかったため、いつも小児科医の息子さんの通訳が必要だった。

それ以来、年一回をベースにして、日本とロシア（シベリア）の小児科医の交流勉強会が始まった。すでに五回は行ったと思う。その間カムチャッカに一回行き、またコズロフ教授を日本小児科学会にお招きしたりした。

キーワード検索

Google 提供



名誉所長ブログカテゴリ

- 名誉所長メッセージ (50)
- CRNスタッフメッセージ (1)
- リレーエッセイ

新着記事

- 【誰一人取り残さない「こどもみんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】 その11：若い世代の描くライフデザインや出会いを考えるワーキンググループ

カムチャッカの時は、モスクワからの飛行機が、オイルの都合がつかず欠航になり、2日ほど足止めされてしまった。したがって、滞在期間が短縮され、十分に町をみる事が出来なかった。空港に着陸する時にみた、火山の煙をはく姿が印象的であった。また水着を着て入るプールの様に大きな温泉も、今なつかしく思い出す。

テレビ・新聞でみると、ロシアという国は、何を考えているかよくわからない感じがする。しかし、つきあったロシア人は、皆良い人であった。ステュディニキン教授にしる、コズロフ教授にしるナイスガイという感じである。

最後にハバロフスクに行ったのは、もう四、五年前になるが、経済発展が進み以前の状況とは異なって、町は明るくなり、デパートも開かれ、チョコレートショップに沢山の品々が並んでいた。ロシア連邦になって国が豊かになると、これ程違うものかと思った。今後とも、わが国とロシア、特にシベリアの小児科医との交流が更に深まることを祈っている。

いいね！ 0

ポスト

81

ロシアの小児科学のアカデミシャン、ステュディニキン教授

掲載日： 2012年3月22日掲載

カテゴリー： 名誉所長メッセージ

前回の所長ブログのモスクワの難病サーシャちゃんの話の中で、シベリアの白血病の子どもたちが、1980年代に国立小児病院で治療を受けた話を書いたが、今回はアカデミックな話を書こう。

国際小児科学会／International Pediatric Association (IPA) の役員になったのは1977年、会長、副会長、理事と1989年までの12年間に渡り務めた。その間、いろいろな国の小児科医のリーダーと親しくなり、外国を訪問する機会は少なくなかった。行くことができず今でも残念に思っているのは、東ヨーロッパと南アフリカくらいである。

1980年代に入って間もなく、ロシア小児科学会の代表として、モスクワ大学教授であり、モスクワ小児病院の院長のステュディニキン教授が、評議員としてだったかと思うがIPAの役員仲間に入って来た。世界の各地で開かれる会議で、任期中は少なくとも年1回は、会うことになるので、お互いに関心をもてば、仲良くなるのは当然のなりゆき。ヨーロッパの中で小児科学の歴史も伝統もある国のひとつであるロシアの小児科は、個人的にぜひ見たいと思っていたこともあって、急速に親しくなり、お互いに不自由な英語で話し合うようになった。

当時、IPAの本部はフランスのパリにあり、年に1回は理事会に行かなければならなかった。それに使うヨーロッパ便は、ほとんどが成田を飛び立ち、アンカレッジ、モスクワで給油して、パリに着くのであった。したがって、モスクワで2、3泊してパリのIPA理事会に出れば良いということになり、モスクワ訪問が決まった。それは、1980年代の中頃だったと思う。

歴史と伝統あるロシアの小児病院は、古い重厚な建物であり、確かにパリとかロンドンの小児病院と同じ趣があった。パリやロンドンの小児病院より、郊外の広々とした敷地にあり、樹木も豊かだった。しかし、古さが目立ち、アメリカの小児病院のような、学問の新しさは感じられなかった。

つづいて、モスクワ大学に案内されたが、いずれも立派な建物が印象的で、歴史と伝統の重さとともに、学問のレベルの高さを感じさせるものであった。当時は、モスクワ大学の医学部は成人医学部、小児医学部、歯学部、公衆衛生学部の4つからなっていた。その後、日本と同じように医学部・歯学部の2つになったという。

当時はソ連邦の時代で、レニングラードのエルミタージュ美術館を見たいと思ったが、日本でビザを取ってこなかったため、行けないことになり残念に思っていた。しかし、ステュディニキン教授のお計らいで、夜行列車で帰る旅行ならば、ビザも簡単にとれることがわかり、夜行列車に乗ってそれを強行することにした。モスクワを夜10時頃出て、レニングラードに到着して、朝食をとり、エルミタージュ美術館に一日いて、夕食をとり、また夜行列車でモスクワに帰るといふ強行軍である。国営旅行社Inturistが全てアレンジするので、困った思い出は全くな

- ▶ 【ニュージーランド子育て・教育便り】第51回 天候被害に関する子どもの準備・事後の [PAGE TOP](#)
- ▶ 【カナダBC州の子育てレポート】第37回 フルインクルーシブ教育：自立と自律を中心に考える
- ▶ 【誰一人取り残さない「こどもまんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】その10：こども政策に関する国と地方の協議の場～こども政策の最前線は自治体～
- ▶ 【ドイツの子育て・教育事情～ベルリンの場合】第62回 子どもの健康診査～日独比較
- ▶ 【一人一人の違いに寄り添うために】第12回 知識は無限、順位は有限
- ▶ 【インドの育児と教育レポート～チェンナイ編】第11回 インドの学校教育におけるスクールカウンセラーの役割
- ▶ 【カナダBC州の子育てレポート】第36回 フルインクルーシブ教育の理想と現実
- ▶ 【誰一人取り残さない「こどもまんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】その9：「こどもまんなか」の視点で乳幼児の育ちを支える「こども誰でも通園制度」について
- ▶ 【CRNA国際共同研究】子どものレジリエンスを育む保育実践に関する調査2024 結果報告



Tweets by crn_jp

い。

当時ソ連邦はあらゆる面で行きづまり始めていて、旅行者に見えない問題があったことには間違いない。私の様な外国人の泊まるホテルは決まっていた、そこでとる食事は別格のようであった。キャビアが白い大きな皿に山盛りにされ、それを黒パンに乗せて、ウォッカを飲みながら食べる、そして、魚も肉もついたフルコースであった。そこに集まったモスクワ小児病院の小児医5～6人にとっては、雰囲気から察するに、普段味わえない久しぶりの機会であったようである。お互いにメートを上げた楽しい夕食であった。ステューディニキン教授は、静かに笑いながらウォッカをみんなにすすめていた。

ステューディニキン教授は、アカデミシャンとよばれ、小児科医の中でも、かなりの研究業績を上げて学術会議のメンバーになり、モスクワ大学の教授をされていた代表的な小児科学者である。毎年、クリスマスカードの交換をしてきたが、この2、3年はカードも来なくなってしまった。サーシャちゃんが国立小児病院に入院している時、日本小児科学会にお招き出来たことが、せめてものおかしさとなってしまったと、なつかしく思い出す。

いいね！ 0

ポスト



モスクワから来た難病のサーシャちゃん

掲載日： 2012年3月9日掲載

カテゴリー： 名誉所長メッセージ

ロシア連邦大統領メドヴェージェフと首相プーチンとの交代劇とか、それに関連した最近のプーチンに対する反対運動、荒々しいモスクワのデモの様子をみると、難病のサーシャちゃんは どうしているかなと思う。元気ならば、もう立派なレディになっている年齢である。

それは、1980年代後半のことだったと思う。国立小児病院の院長になって間もないころ、アレクサンドル・デミトフ、通称「サーシャ」ちゃんという先天性の難病の女の子が、モスクワから治療のため入院しに来た。ソ連邦からロシア連邦に代ったのが1991年の事だから、政治は勿論のこと、経済的にも行きづまったソ連邦時代末期の出来事であったと思う。医療も同様の状況となり、わが子のため、日本に医療を求めて来たのであろう。

当然のことながら、サーシャ親子の東京での医療費、滞在費はかさみ、ロシア庶民にとっては大変な事であったろう。親子の窮状をみた有志が支援のため募金を始めたところ、それを知った鹿児島島の創立間もない池田学園高校の生徒さんが、バザーを開いたり、募金をしたりして、数回にわたり、破格の浄財を送って下さったのである。

大変感激したサーシャちゃんの母親は、学校まで御礼に行くということになり、私も同行した。羽田から鹿児島へ飛行機で飛び、学園の広々とした体育館に入ると、鮮やかな赤のソ連国旗が飾られ、ロシア語で書かれた「サーシャ頑張れ」と横断幕まで張られていた。そして、生徒さん達の折った千羽鶴が、全校生徒の前で、白いスーツ姿の美しい母親、ナターリヤさんに渡されたのである。その時会場には、ロシア民謡「トロイカ」も流れていた。母親ナターリヤさんは勿論のこと、私もそして生徒さんも、みんな涙ぐみ、会場の一同は「小さな生命」への祈りで一杯になった。

その後、東京で開かれた日本小児科学会に、私の友人であるモスクワ大学小児病院長、ステューディニキン教授をお招きする機会があった。入院中のサーシャちゃんを診察して頂き、そのお陰でサーシャちゃんは帰国してからモスクワの小児病院で治療を続けられることになったのである。残念ながら、帰国後どうなったかは全く連絡がない。ステューディニキン教授にとっては、難病とは言え、病気治療のためにわざわざモスクワから東京まで、と思ったに違いない。

当時、シベリアのハバロフスクからも希望があって、ロシアの子どもたちが、何人か入院した。この場合は、子どもたちの病気は白血病で、シベリアの医療レベルより国立小児病院の方が高かったものと思う。その医療費は、いつも森林公園とか、漁業公園とかがスポンサーになっていた。恐らく日本との貿易で、外貨をもっていたのであろう。

ご意見・ご質問 PAGE TOP

CRNへのご意見・ご質問はこちらへお寄せください。

[ご意見・ご質問はこちら](#)

メルマガ登録

メールマガジン「CRN通信」を購入しませんか？子どもにまつわる耳よりな情報をお届けします。

[登録・変更はこちら](#)

しかし、子どもたちを外国で治療するより、日本とロシアの小児科医が交流して、お互いにレベルアップした方が良いという事になり、シベリアの小児科医との交流が始まった。サーシャちゃんをはじめ、難病のロシアの子どもたちは、日本とシベリアの小児科医を結びつける大きな役割を果たしていたのである。

いいね! 0

ポスト



絆という言葉

掲載日： 2012年2月16日掲載

カテゴリー： [名誉所長メッセージ](#)

「絆」（きずな）という言葉が、今年の3.11の東日本大震災以来盛んに使われるようになったように思う。しかし、この言葉は30年近く前にも、盛んに使われた時期があった。

「絆」という言葉を国語辞典で引いてみると、「動物などをつなぎ止める綱（つな）」とともに、「断つにしのびない恩愛」とか、「離れがたい情愛」ともある。

言葉は使われているうちに変わるものである。3.11後の絆は、「恩愛」と「情愛」より広い、人と人をつなぎとめる、人間関係を維持する「心の絆」のような意味であろう。30年近く前のそれは、「母と子の絆」として使われたもので、母と子を結ぶ、母と子の新しくできる人間関係を作る「心の絆」の意であった。「母と子の絆」は、私が発表した論文にも関係しているものと思う。

1950年代に入って、国土が戦場にならずに、戦勝国になったアメリカで「子ども虐待」が大きな問題になり始めた。そこで小児科医は、母と子、父と子の人間関係は、どんな仕組みで作られるのかについて考え始めたのである。1960年代に入って、アメリカのオハイオ州、クリーブランドのウエスタン・リザーブ大学の小児科医ケネルとクラウドは、未熟児が虐待のハイリスク要因になることから、母と子の絆を作り上げる仕組みに「母子相互作用」という考え方を発表した。

健康にして健全な母子関係を作るのは、母と子のお互いのふれあい豊かな相互作用によると考えたのである。母親は、わが子を抱き、語りかけ、眼と眼を合わせるなど、お互いがふれ合うことにより、母性愛に目覚め、わが子を可愛いと思うようになる。同時に、赤ちゃんは、優しさを体験する中で母親に愛着をもち、母親を慕うようになると考えた。このお互いのふれ合いによって、母と子の心の絆ができるという理論なのである。

裏を返せば、出生直後から未熟児はインキュベーター（保育器）に入れられて育てられるので、母親とわが子はお互いにふれ合うことができず、母と子の心の絆ができにくく弱いものである。したがって、母親のわが子を虐待する頻度が高くなると説明できるのである。

クラウド・ケネルの論文をよむと「母子相互作用」は"mother-infant interaction"と書かれ、その結果、母と子の間には"tie"ができ、"bonding"すると書かれている。この"tie"とか、"bonding"の結果できる"bond"をどう訳すか迷った。その時、「絆（きずな）」という言葉を思いついたのである。そんなことで、クラウド・ケネルの理論の紹介や、育児の講演などで「母と子の絆」という言葉を使ったので、当時広まったものと思う。

その昔、亡くなられた河合隼雄さんと対談した時、「絆」は「綱」である以上、切れることがあると、おっしゃった事を印象的に覚えている。心理相談で、いろいろな事例をご覧になられていたからであろう。しかし、東日本大震災の復興のためにも、わが国の未来のためにも「人と人の心の絆」は勿論のこと、人生の出発点となる「母と子の心の絆」も切れないものであって欲しいと思う。

いいね! 0

ポスト



桶谷式乳房管理法とその研鑽会、法人化のお祝い

掲載日： 2011年12月27日掲載

カテゴリー： [名誉所長メッセージ](#)

PAGE TOP

「桶谷式乳房管理法」とは、そもそもは第二次世界大戦中、旧満州で開業していた助産師の桶谷そとみさん（1913-2004）が、マッサージ師の資格をとって勉強し、あみ出した医療技術である。母乳の出の悪い時、母乳哺育中の痛み、さらには乳腺炎を起こしたりした時に対応する良い方法と言われている。戦後、桶谷さんは高岡に帰られてからも開業をし、技術を高めるとともに、治療手技を体系化して、現在の技術に発展させた。また、1980年には、研鑽会を作り、研修センターを併設して後進の指導を始めたのである。

その後、桶谷さんは大阪堺市に移り、続いて東京に出て、同じやり方で後進を指導されてきた。亡くなられてからは、お弟子さんが、あとをついで現在に至っている。桶谷さんのなさっていることに関心をもって、私が直接高岡に参上してお会いしたのは、1970年代の終り頃で、まだ研鑽会を始めてはおられなかったと思う。何故、関心をもったのかというのは、乳房マッサージとは全く別で、育児支援、特に母乳育児支援と関連してのことであった。国際小児科学会の役員として、パリの理事会に出席した折、昔ロンドン留学中によく行った医学書の書店で求めたD. Raphaelさんの本、"Breastfeeding, Tender Gift"から全てが始まる。彼女は女性の生命のバトンタッチ、すなわち妊娠・分娩・育児、特に母乳哺育には、エモーショナル・サポートが重要であると述べている。更に、どんな伝統文化の社会でも、女性同士のエモーショナル・サポートを柱にした助け合いシステムが存在する、とも述べているのである。しかも、その中心的な役割を果たす女性が必ずいて、それをドゥーラ（doula）と呼んだ。先進社会では、近代産科医療が進むと共に、その助け合いシステムと一緒にドゥーラも消えてしまったと言うのである。それが、先進社会の問題であると強調している。そういう医療人類学的な発想に私は強い感銘をうけると共に、日本の社会のどこかにドゥーラと呼べる人がいないだろうか、探し始めていたのである。そんな時、高岡に桶谷さんという助産師がいると、先輩のある小児科の教授が教えて下さったのである。

ドゥーラのことは以前にこのCRNブログでも書いたと思うので、これ以上は述べないが、1970年代の末頃、金沢に講演が何かで行った折、帰途高岡にまわって桶谷さんにお会いしたのである。

今でも思い出すが、3月の上旬の日本海側では珍しく晴れ上がった快晴の日であった。桶谷さんのクリニックは下町にあり、屋根は未だ雪が残っていて、それが早春の陽光で溶け、ぼたぼたと輝きながら落ちていたのが印象的であった。桶谷さんは、優しく母親に語りかけながら、優しく指を動かして、乳房をマッサージしていた。それは、エモーショナル・サポートを取り込みながらもそれだけにとどまらないマッサージの技術で、母親達の乳房をめぐる苦しみを取り除くものであった。同時に、優しい会話のやりとりが、乳房の苦痛の除去によって、更に母親達の子育ての悩みの解決の効果を高めていることがわかった。

現在、桶谷さんに直接指導をうけたお弟子さん、更にそのお弟子さんによる指導によって、桶谷式乳房管理法研鑽会は、桶谷さんの技術を伝え、日本全国で母乳育児の推進と母親の子育て支援を展開している。

桶谷式乳房管理法研鑽会がこの度、法人化されて、11月12日土曜日にお祝いの会が開かれた。そこに招待され、出席した時の印象は、資格をとられた助産師さんの熱気一杯で、わが国の子育て支援の大きな力になるばかりでなく、何か母乳哺育を通じて、ガタが来たわが国の社会の立て直しにもなるのではないかと思った。

桶谷式を学ぼうとする助産師さん達、また桶谷式乳房管理法で治療を受けようとするお母さん達、下記にご連絡下されば、その方法を教示してもらえます。

一般社団法人 桶谷式乳房管理法研鑽会

〒162-0044 東京都新宿区喜久井町20-8オケタ二早稲田ビル

TEL：03-5291-1020 FAX：03-3203-5008

調査データ

- ▶ 乳幼児
- ▶ 小中高生
- ▶ 国際調査

▶ More

研究論文

- ▶ 異文化理解
- ▶ 健康と発達
- ▶ 学校教育
- ▶ 子どもの権利

▶ More

海外の子育て

- ▶ インド
- ▶ カナダ
- ▶ タイ
- ▶ ドイツ (ベルリン)
- ▶ ニュージーランド
- ▶ ノルウェー
- ▶ フィンランド
- ▶ サウジアラビア ▶ More

CRNについて

- ▶ ごあいさつ
- ▶ CRN概要
- ▶ 活動履歴
- ▶ CRN刊行物

▶ More



TOP > 名誉所長ブログ



名誉所長ブログ

Koby's Note -Honorary Director's Blog

名誉所長ブログでは、CRNの創設者であり名誉所長である小林登の日々の活動の様子や、子どもをめぐる話題、所感などを発信しています。



日野原重明先生の100歳の誕生日をお祝いして

掲載日： 2011年12月22日掲載

カテゴリー： 名誉所長メッセージ

11月2日、日野原先生が、医学書ばかりでなく看護学書もたくさん出版されている医学書院が主催した、日野原先生の100歳のお祝いの会に、私も招かれて参加し、楽しいひと時を過ごさせて頂いた。

医療に関係する人たちを中心とした、出席者60~70人のささやかではあったが、落ち着いた雰囲気のであった。日野原先生のお好きなピアノ演奏も行われ、日野原先生らしい会でもあった。

日野原先生とは、最近では残念ながらお会いする機会が殆どなくなってしまったが、1970年代から80年代にかけて、厚生省の委員として病院視察に御一緒したり、また1980年代から90年代と2000年に入ってしばらくの間は、日本音楽療法学会設立などのお手伝いで良くお会いしたものであった。

いずれの機会も、医師としてばかりでなく、社会人としていろいろと人生勉強をさせて頂いたものである。特に、音楽療法学会の設立の経緯について学んだことは多い。初めは日本バイオミュージック研究会として出発し、年一回学術集会を行い、すでに精神科医が中心になって作った音楽療法研究会を日野原先生のお力で統合し、日本音楽療法学会が生まれたのである。この学会が、わが国の音楽療法の発展に寄与したことは間違いないと思っている。現在、個人的には直接関係なくなっているが、事実学会活動は現在も活発に行われているのである。

日野原先生のお祝いの会で、先生はメモを御覧になりながら、100歳とは思えないちゃんとした声と内容のスピーチで、出席者全員に感銘を与えていらっしやう。また、直接ご挨拶申し上げた折、私の事をちゃんと覚えていてくださっていたことに感激した。

スピーチの中でとりあえずの目標は、元気で110歳を迎えることであるとおっしゃった。10月下旬に放映された、先生のNHKドキュメントの映像からも、今回のお祝いの会の印象からも、110歳は間違いなしと思うと同時に、先生のご長寿に小生も少しでも肖りたいものだと思った次第である。

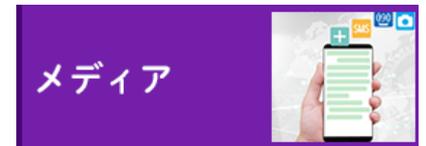
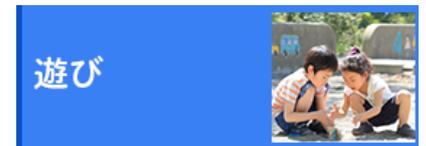
いいね! 0

ポスト



キーワード検索

Google 提供



名誉所長ブログカテゴリ

- 名誉所長メッセージ (50)
- CRNスタッフメッセージ (1)
- リレーエッセイ

新着記事

- 【誰一人取り残さない「こどもみんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】 その11:若い世代の描くライフデザインや出合いを考えるワーキンググループ

PAGE TOP

母乳哺育で子育てしよう

掲載日： 2011年12月15日掲載

カテゴリー： 名誉所長メッセージ

日本母乳哺育学会・学術集会在、東京の日本赤十字病院にある看護大学で、10月8日、9日に開かれた。この学会は、私が25年前に設立した学会で、5年程前に若い世代にバトンタッチしたが、特別の思い入れがある。今回の学術集会是、日赤病院副院長の産科医杉本充弘先生が学会長として主催された。母子感染や、環境汚染によって母乳中に分泌される化学物質や、母親の飲んだ薬物が母乳中に分泌される問題などが、母乳哺育とどう関係するかが話し合われた。韓国の母乳哺育学会からも、医師が当面している問題について発表された。

わが国でも、母乳哺育する母親の数は少なくなり、母乳育児の重要性を認識している関係者、特に本学会の会員はいろいろと危惧している。その要因は、やはり豊かな社会の陰の部分であり、現在の物質万能主義の社会の在り方にある。しかし、悪くとればそれを利用しているミルク会社の販売戦略も関係しているという。広告のあり方は勿論のこと、分娩のため入院している母親に粉ミルクをプレゼントするなどいろいろな事が行われてきたのである。また、産科の先生が開業することになると、ミルク会社がクリニックの設立の費用までもって応援するという話まであるくらいである。頭のいいミルク会社は、産科の先生とお母さんを狙い撃ちしているのである。

1970年代末から1980年末まで12年間国際小児科学会の役員を務めていた時にも、ミルク会社との関係が取り沙汰された。国際小児科学会の会場には、世界をリードするミルク会社が用意した休憩所があり、コーヒー、紅茶、クッキーなどがサービスされていたのである。また、学会役員は、特別なディナーに招待されるなど、接待の攻勢があった。それを切ったのは、トルコの小児科医 I. ドラマチ教授であった。私が学会役員をしていた時の国際小児科学会・理事長である。その上、当時は発展途上国も少なからず経済力をもち始め、生活水準の向上も始まっていたのである。そうすると、アフリカのハイウェイにミルク会社が大きな広告看板を立て始め、母乳よりミルクをすすめて、売上を狙ったのである。アフリカ人の母親の中には、あの白い旦那のような立派な体格になるようにと、ミルクでわが子を育てるようになった人もいた。しかし、電気や下水道のインフラは整備されないままで、水は汚く、冷蔵庫もない、その結果哺乳瓶のミルクは細菌に汚染され、乳児は下痢などで死亡するという現実があったのである。

そんなこんなでWHOはミルクについてのコードを発表し、1980年代だったと思うが、ミルクの広告などを規制したのである。それも、I. ドラマチ教授のなされた事と思う。教授は、第二次世界大戦終了後のWHO宣言にも招かれる程、WHOとは関係の深い方であった。

しかし、今やわが国でも、豊かであるがゆえ、下水道や冷蔵庫の問題とは別の企業倫理の面で、このWHOコードが問題になっている。今回の学会の開催前の2時間程を使って、学会員の有志がこの問題を話し合った。その意義は大きい。母乳で育てる母親が増加することを祈りたい。

いいね！ 0

ポスト



日本子ども学会 第8回子ども学会議 10月1日、2日に神戸の武庫川女子大学にて開催

掲載日： 2011年12月12日掲載

カテゴリー： 名誉所長メッセージ

10月、11月は、秋の学会シーズンで、私の関係する学会も次々と開催されている。日本母乳哺育学会や東アジア子ども学交流プログラムについては、すでにCRN上で取り上げさせていただいた。今回は日本子ども学会について述べることにしたい。

日本子ども学会は、平たく言えば、学問や職種をこえて、子どもに関係する人なら誰でも参加して、子ども問題を話し合おうという学会である。年1回子ども学会議として、子どもについ

- 【ニュージーランド子育て・教育便り】第51回 天候被害に関する子どもの準備・事後のサポート
- 【カナダBC州の子育てレポート】第37回 フルインクルーシブ教育：自立と自律を中心に考える
- 【誰一人取り残さない「こどもまんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】その10：こども政策に関する国と地方の協議の場～こども政策の最前線は自治体～
- 【ドイツの子育て・教育事情～ベルリンの場合】第62回 子どもの健康診査～日独比較
- 【一人一人の違いに寄り添うために】第12回 知識は無限、順位は有限
- 【インドの育児と教育レポート～チェンナイ編】第11回 インドの学校教育におけるスクールカウンセラーの役割
- 【カナダBC州の子育てレポート】第36回 フルインクルーシブ教育の理想と現実
- 【誰一人取り残さない「こどもまんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】その9：「こどもまんなか」の視点で乳幼児の育ちを支える「こども誰でも通園制度」について
- 【CRNA国際共同研究】子どものレジリエンスを育む保育実践に関する調査2024 結果報告



Tweets by crn_jp

て日頃勉強してきたことばかりでなく、テーマを決め、アイデアを持ち寄って話し合うことも行っている。普通の学会ならば、学術集会ということになる。

今年の第8回子ども学会議は、10月1日、2日の2日間にわたって、「育ちと学びを支える」をメインテーマに、創立以来70余年の歴史をもつ名門女子大学、武庫川女子大学の河合優年教授を会長とし、兵庫県西宮市にある大学の日下記念マルチメディア館ホールで開かれた。第1日目のサブテーマは「子どもの育ちと学び」で、第2日目は「東日本大震災の子ども達を支える」であった。主なプログラムは次の通りである。

第1日目は、お茶の水女子大学教授榎原洋一さんを座長に、パネリストとして大阪府立母子保健総合医療センター総長の藤村正哲さん、大阪大学人間科学部教授の金澤忠博さん、そして指定討論者として河合優年さんが加わってシンポジウム「小児医療から見た子どもの育ち」が行われた。藤村さんは、母子保健総合医療センター設立にあたって、母子同室方式を柱にした病院を作った方である。藤村さんは、新生児集中治療室（NICU）でケアされた子ども達、特に超低出生体重児の成長・発達について発表された。

心理学者の金澤さんは、小児科医の藤村さんと一緒に約500名の極小未熟児について行ったフォローアップ研究の成果を発表した。すなわち8歳の時点で、心理学的検査の結果を、出生時の母子同室やカンガルーケアと関連づけて、その有用性を論じたのである。

第2日目の午前は、甲南女子大学教授の一世伸夫さんを座長とし、あしなが育英会・あしながレインボーハウス・チーフディレクターの八木俊介さんと神戸市教育委員会事務局課長の中溝茂雄さんが話題提供者として発表をした。発表に対して神戸学院大学教授の小石寛文さんがコメントを述べる形でシンポジウム「被災の子ども達を支える：阪神淡路大震災が伝えるもの」が行われ、午後のシンポジウム「震災の子ども達を支える：今なにが起きていて何がもどめられているのか」につながられた。

午後のシンポジウムの座長はお茶の水女子大学文学部教授の内田伸子さんで、話題提供者は、東日本大震災の現地で救援活動に直接関係した仙台白百合女子大学人間学部教授の大坂純さん、ハーバード大学公衆衛生大学院リサーチフェローの吉田穂波さんが赤ちゃんを中心とした現地の状況を報告し、パネリストとして宮城県石巻市湊小学校校長の佐々木丈二さんが発表された。さらに午前のシンポジウムの話題提供者の八木さんと中溝さんが発言された。

第2日目の午前・午後のシンポジウムは、細かい内容は後にゆずるが、大変時宜を得た内容の濃いものであった。いずれ「大震災の子ども学」としてまとめなければと思っている。

今回の子ども学会議にとって大変光栄だった事は、秋篠宮妃殿下が、第2日目の二つのシンポジウムに大変御関心をもたれ、会議の冒頭から終了まで終日御出席下さったことである。熱心にメモをとられているお姿が印象的だった。

この光栄をバネにして、日本子ども学会の更なる発展を期しているところである。岡山で開催する予定の第10回では、国際シンポジウムも行いたいと考えている。

いいね！ 0

ポスト

BT

子どもにとってのバーチャルなサンタさん

掲載日： 2011年12月8日掲載

カテゴリー： 名誉所長メッセージ

一昨年のクリスマスイブだったと思うが、カナダの空軍司令部が子ども達に向けて、サンタクロースが今どこを「飛んで」いるかと、移動経路について何回か続けて発表したというニュースを聞いたことがある。確か民放のニュースだったと思う。

それを聞いて思い出したのが、戸塚滝登先生の『子どもの脳と仮想世界－教室から見えるデジタルっ子の今』（岩波書店、2008年）という本である。その本の中に1954年のクリスマスイブ

ご意見・ご質問

CRNへのご意見・ご質問はこちらへお寄せください。

[ご意見・ご質問はこちら](#)

メルマガ登録

メールマガジン「CRN通信」を購入しませんか？子どもにまつわる耳よりな情報をお届けします。

[登録・変更はこちら](#)

に同じようなことがアメリカでも起こっていたという話を書いてあったからである。

1954年のクリスマスイブというと、私が大学卒業直後にアメリカに渡り、クリーブランドの病院でインターンを始めていた年の出来事ということになる。その日は、アメリカ人の若い夫婦の家に招かれて一泊した日であった。積もった雪は、1メートルにはなっていないかったが、相当深かった事は今も思い出す。

招いて下さったW夫妻は、アメリカで言えばエリートであった。御主人は名門大学で法律学を学び、卒業後のしばらくの間クリーブランドで仕事をされていたのである。後にお会いした時は、ニューヨークで弁護士を開業されていた。奥さんは名門女子大を卒業され、お父様がアメリカの中国大使で、小さい時は中国で過ごされた経験もおもちであった。その時、3つか4つの女の子がいたが、その子も80年代に入ってアメリカの大手銀行の東京支店にお仕事でおいでになり、日本料理店にお招きしたこともあった。

当時のアメリカのインテリゲンチヤルがよくやっていた事であるが、クリスマスイブに行くとこころがなくて楽しめない外国人留学生を招いて、七面鳥のディナーを家族と一緒にもてなすという行事が流行っていた。それに、運よく私も招かれたということになる。当時の日本は、戦後10年程で、やっとラーメンが出始めた頃であり、貧しい食事も闇市に依存している様な状態であった。やっと家は建ち始めてはいたと言うものの、アメリカ空軍の爆撃による東京の焼野原は、東日本大震災の津波でやられた東北の裸の港町のように荒涼と広がり、JR御茶ノ水駅に立つと、東大の安田講堂が見える程であった。そんな日本から来て、私はアメリカの衣食住の豊かさに圧倒されていたのである。

そのクリスマスイブにアメリカで起こった出来事というのは、コロラドにある北アメリカ航空宇宙防衛司令部（NORAD）に突然子どもから電話がかかり、「サンタさんはどこにいるか」、「どの辺を飛んでいるのか」と尋ねてきたというのである。しかも、子ども達からの電話は次々とかかり、司令部はパニック状態になったという。

原因は、コロラドの百貨店のクリスマス商戦で、子ども達のために「サンタさんホットライン」を設けたが、その電話番号に事もあろうか誤りがあり、NORADにつながることになったという、信じられない偶然が起こってしまったのである。しかし、当直の司令官は、気転をきかせて「只今ロッキー山脈上空通過中」、「ソロモン群島上空飛行中」などと部下に伝え続けさせたという。以来、それはNORADの子ども達に対する恒例のクリスマス行事となり、「NORAD Tracks Santa」と呼ばれ、一昨年のクリスマスイブの出来事もそれだったと思うのである。

NORADは、アメリカ合衆国とカナダの共同で運営する統合的防衛組織で、北アメリカの航空・宇宙に関しての観測、または危険の早期発見、さらには人工衛星や宇宙船のゴミなどを監視する役を果たしている。

サンタは架空の存在であり、仮想世界の住人である。しかし、子どもたちにとっては、クリスマスにはプレゼントを持ってくる存在なので、完全な仮想でもなく、また完全な現実でもない。

私個人にとって、サンタはどんな存在だったろうか。わが家は、キリスト教でもなく、母は真面目な仏教徒といえる人であったが、どういうわけか日曜学校にだけは行かされた。したがって、クリスマスは恒例の、しかしあまり宗教色のない行事であった。絵書きの父も、仏教に熱心な人であったが、母の熱心なクリスチャンの友人の日曜学校に画室を開放したこともあった。また、東京女子大学の近くの善福寺川の林の脇に住んでいたため、女子大の日曜学校には、小学生として久しく通ったこともあり、なつかしく思い出す。お姉様方になる優しい学生さんと楽しくひと時を過ごしたものであった。太平洋戦争の始まる前の、まだ平和が感じられた時代で、今もその思い出と共に、女子大の立派な建物の尖塔の前にひろがるキャンパスの緑の芝生が目につく。

子どもは一体いくつ位まで、サンタさんを完全に信じているのだろうか。「赤ちゃんはどこから生まれるか」のシークレット・オブ・ライフよりは、早く現実を知りたいと思うが、考えてみれば文化という点でみても興味深い問題である。社会の情報が子ども達の生活空間の中にどんどんと入り込む現在では、意外に早いかもしれない。

私の場合は、小学生になって間もない1930年中頃だったと思う。クリスマスイブの夜遅く、ふと物音が目が覚めた。母親がクリスマスプレゼントを枕元に置くその手が、目の前にすっと出

てきたのである。その手は、窓から差し込む冴えた月明りで浮かび上がっていた。その時のピンとした夜の寒さも思い出す。以来、サンタクローズは、リアルなものになってしまった。それは、優しかった母親の思い出とも重なるが。

最後に付言すると、1954年のコロラドの出来事は、戸塚先生の本を読むまで全く知らなかった。当時も、その後も、医師としてのアメリカ生活が余りにも忙しかったためか、在米中にもかかわらず、私の身边では全く話題にはならなかったと思う。しかし、いろいろ調べてみると、1955年の出来事であるというのが正しいようだ。考えてみれば、起こったのは冷戦真っ只中の事であったということになる。

NORAD Tracks Santa公式サイト（毎年12月にオープン）

<http://www.noradsanta.org/>（英語）

<http://www.noradsanta.org/ja/>（日本語）

いいね! 0

ポスト



女子大生の私語

掲載日： 2011年11月1日掲載

カテゴリー： 名誉所長メッセージ

現在、「私語」と言うと、「授業中に学生・生徒、特に女子大生が、隣り同志でひそひそと話しあうこと」と定義されるくらい、大学で私語が多い。勿論、私語は学生・生徒だけではない。

考えてみれば、私達の学生時代は、戦後10年もたっていない時代だったので、学生にとっては先生の教示される内容が貴重で、ノート取りに熱中し、私語など交わす余裕もなかった。第一、その時代は、街は戦争による焼け野原、教科書も充分ではなかったのである。また当時、礼儀の問題もあって、私語を交わす者は誰もいなかった。

国立小児病院を停年でやめた1990年代中頃、関西の女子大で短期間ではあったが、「子ども学」を講ずる機会があった。その時、女子大生の私語を初体験した。特に大きな教室の授業になると激しかった。カッとなって、私語を交わす学生につめより、授業の邪魔になるから教室を出て行って欲しいと言ってしまい、むなしい思いをしたものである。

2001年9月、ニューヨークの国際テロ事件が起こった時、北京では国際小児科学会議が開かれていた。その学会場で、アメリカの小児科医が英語で発表している最中に私語があった。私語を交わしているのは東洋人の女性で中国語を話していたので、おそらく中国の若い小児科医と考えられた。その程度は相当ひどく、邪魔になって発表が聞きとりにくい程であった。会場から「シー」という声が上がって、私語はサッとおさまった。声をかけたのは、アメリカかヨーロッパから来た小児科医であった。アメリカで勉強した方に何うと、アメリカの大学では女子学生でも私語は殆ど交わさないという。

何故、日本では私語がこんなに交わされるようになったのだろうか、と、関西の女子大での初体験以来考えてきた。私は、社会が豊かになり、テレビが普及し、テレビの「ながら視聴」が一般化したためと考えた。わが国では、食事しながらテレビを見るのは普通のこと。むしろ、テレビをつけっぱなしの中で生活しているのである。したがって、北京の国際会議の私語を耳にした時、中国も私語が問題になる程豊かになり、テレビも普及したのだと思ったものである。中国へは1970年代初頭から何回も旅し、大・小の学会に出席したが、それまで見られなかった現象であった。

脳のいろいろな機能は、そもそも脳のあちこちに分散して局在しているものなのである。すなわち、脳はいろいろな機能をもつモジュール（構造の単位）を組み合わせた構造をもっていると言える。これを、「脳機能の局在論」、あるいは「脳のモジュール構造」という。

モジュールというつまり宇宙船を思い出す。それぞれの科学・技術の粋を集めた機能をもつ宇宙船（モジュール）を組み合わせて宇宙ステーションが出来上がっているように、脳も出来ているのである。したがって、人は二つ以上の脳のモジュールを手際良く使えば、二つ以上のコトを同時に、しかも比較的簡単に問題なくやっつけてのけることが出来るのである。それは、皆さんも折々体験済みのことではなからうか。例えば、音楽を聴きながら自動車を運転することは、その代表とも言える。テレビの「ながら視聴」によって、日々脳のそれぞれのモジュールを手際よく使う腕を上げているのかもしれない。それが、私語を蔓延させている原因のように私には見える。

女子大学に関係する教官は、1990年代に入って私語が活発になったという。しかも、私語と学業成績は関係しないことも明らかになっている。この100年の大学教育の歴史をみると、戦後の1960年代までは、わが国では、貧しくて大学で使うような教科書、参考書は充分なかった時代が続いている。第二次世界大戦敗戦後の10年間程は特にひどく、私自身も体験した。しかし、戦後の回復と共に、豊かな社会を築き、テレビが普及すると共に、情報化が進み、大学生の学習パターンも大きく変わったのである。教科書、参考書を利用して簡単に情報を集め、教授の授業のノートも情報機器を利用して、ファックス・ノート、e-メール・ノートなどというなかたちになり、現在学生はお互いに仲良くそれを利用して勉強するようになっていく。

勿論、私語の問題は、社会の情報化だけが関係しているのではない。社会の礼儀や模範の問題も関係しよう。しかし、その模範も縦関係より、横関係が強くなり、家庭教育の弱体化も関係して、個人主義や自己中心主義が、良い意味でも悪い意味でも強くなってきているのである。したがって私語の問題は、単純な要因で起こっているわけではなく、多様な要因がからみ合っているのである。少なくとも、「出ていけ・メッセージ」だけでは解決出来る問題ではない。

重要なことは、学生達の心を読みとって、授業のあり方も、大きな子ども達としてチャイルドケアリング・デザインしなければならない時代にあるということである。それは「みんなで静かに聴く」集团的聴取スタイルに代って、「自分なりに静かに聴く」という個人的聴取スタイルが出来るような授業にすることではなからうか。例えば、小グループの授業にするとか、学生参加型の授業にするとか。勿論、教官自身が勉強して、学生の心を引きつけられる授業にすることが全ての始まりである。

いいね! 0

ポスト

B!

<<前へ

5

6

7

次へ>>

調査データ

- ▶ 乳幼児
- ▶ 小中高生
- ▶ 国際調査

▶ More

研究論文

- ▶ 異文化理解
- ▶ 健康と発達
- ▶ 学校教育
- ▶ 子どもの権利

▶ More

海外の子育て

- ▶ インド
- ▶ カナダ
- ▶ タイ
- ▶ ドイツ (ベルリン)
- ▶ ニュージーランド
- ▶ ノルウェー
- ▶ フィンランド
- ▶ サウジアラビア ▶ More

CRNについて

- ▶ ごあいさつ
- ▶ CRN概要
- ▶ 活動履歴
- ▶ CRN刊行物

▶ More

TOP > 名誉所長ブログ



名誉所長ブログ

Koby's Note -Honorary Director's Blog

名誉所長ブログでは、CRNの創設者であり名誉所長である小林登の日々の活動の様子や、子どもをめぐる話題、所感などを発信しています。



「カミツ」と「カミツキ」

掲載日： 2011年9月7日掲載

カテゴリー： 名誉所長メッセージ

八王子の共励保育園の長田安司先生から、「カミツとカミツキ」という一文を頂いて驚いた。今、保育園の0～1歳児保育では、保育児同士の噛みつきが問題になっているそうである。もう40年も前になるが、東京大学小児科の現役時代に一例みたことはあったが、その後はみなかったもので、いろいろと考えさせられた。今や、小さな子ども同士の噛みつき合いが問題なのである。

子どもはよく、犬や猫に噛まれて病院の救急外来に来るので、小児科ではいろいろな咬傷が問題になる。アメリカでインターンをしていた1950年代中頃、兎に噛まれた小学生をみて、事態を理解するのに時間がかかった事を鮮明に思い出す。"rabbit"ならすぐわかったが、親が"hare (野うさぎ)"と言ったのでパツと気付かなかったのである。

長田先生の一文を読んで、早速手元にあるアメリカでスタンダードなネルソン小児科学教科書の第15版を開いてみた。1996年の出版だから15年程前の本になる。そこでは、「哺乳動物による咬傷」"Mammalian Bites"の中で、「人間による咬傷」"Human Bites"として取り上げられている。アメリカの病院でおこった咬傷をみると、当然のことながら、犬による咬傷が80%で最も多く、つづいて猫によるものが6%である。それに加えて、人間による咬傷も1～2%はあるとしている。人間による咬傷は、子どもの行動問題として特異である。現在なら、爬虫類による"Non-mammalian Bites"も問題になろう。価値観の多様化と共に、ペットも多様化していることは明らかである。残念ながら、わが国のこの種のデータは見つからなかった。

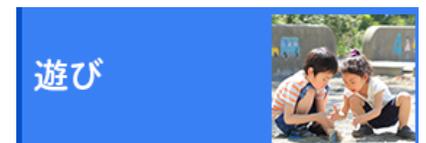
長田先生のおっしゃっている「カミツキ」(噛みつき)の原因は「カミツ」(過密)にあるという事は、全国の保育所で通説となっている「ダジャレ」だそうである。動物と同じように、0～1歳児の子どものでもテリトリー意識というのが強く、自分のテリトリーが侵害されると、自分の安全や安心感が脅かされて、攻撃的になって、カミツキが起こるといふ。保育現場では、保育室が過密になればなる程、カミツキの頻度が上がることが知られているのである。

この事実は、われわれに重要な事を教えている。もしこの様な環境の中で小さな子どもたちが育てられるのであれば、子どもの心の発達に対する影響は計り知れないものがある事は明らか。しかも、過密な保育園の問題は、生活空間の広さの問題だけでなく、質の問題、さらにはマンパワーの質とか量の問題にも当然関係することになる。

アメリカ国立小児保健・人間発達研究所(NICHD)の研究によると、0～1歳児保育でも、保育の質が保証され、保育時間が著しく長くなければ、子どもの体の成長、心の発達にはほとん

キーワード検索

Google 提供



名誉所長ブログカテゴリ

- 名誉所長メッセージ (50)
- CRNスタッフメッセージ (1)
- リレーエッセイ

新着記事

- 【誰一人取り残さない「こどもみんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】 その11:若い世代の描くライフデザインや出会いを考えるワーキンググループ

ど支障ないと示されている。子ども達の生活空間の広さは、保育の質の基本である事は明らかである。わが国の未来を担う子どもたちの保育は、保育に欠ける子どもたちだけの問題ではなく、保育がわが国の社会にとって必須の制度となっている現実を考え、国としてぜひ限りなく良いものにして頂きたいものである。今こそ、国の先行投資として良い保育が必要な時なのである。

いいね! 0

ポスト

BI

「リテラシー」という考え方 - 「情報リテラシー」、「ゲームリテラシー」

掲載日: 2011年7月29日掲載

カテゴリー: 名誉所長メッセージ

最近、「リテラシー」"literacy"という言葉をあちこちで耳にするようになった。先日ある会で、ゲームを教育に利用する話が出た時に、「ゲームリテラシー」という言葉が、また、あるメディアと教育について研究している人から、教育には「情報リテラシー」が必要であるという言葉が出た。この「情報リテラシー」という言葉は、1980年代後半、中曽根内閣の時にできた臨時教育審議会の第2次答申（1986年）の中で、教育には特に重要であると指摘されているのである。これからの教育では「情報および情報手段を主体的に選択して活用していくための個人の基礎的な資質」を高める必要があると答申している。その成果が現われて、教育の情報リテラシー、さらにはゲームリテラシーの考え方が強くなったのであろう。

英語辞典を開いてみると、そもそも、「リテラシー」"literacy"とは、「学問のあること」、「教育のあること」の意味であり、つづいて「読み書き能力」と出る。「イリテラシー」"illiteracy"も、「無学なこと」、「読み書きができない事」、「文盲」、「非識字」などを意味する。国際小児科学会に関係していた1980年代、しばしば「イリテラシー・レート」（非識字率）という言葉が、理事会でよく出て来た事を思い出す。それぞれの国で、それぞれの文化の中で、どのようにしてこのイリテラシー・レートを下げるか、などが話し合われたものである。結論は、当然のことながら、小さい時からの教育ということになった。

わが国では「イリテラシー」はほとんど問題にならないが、多くの発展途上国では、大きな問題なのである。もっとも、先進国でも、貧困と関係して、全く問題ないとは言えない国もあることも、忘れてはならない。

最近の「リテラシー」は、広い意味で、「特定の分野についての知識や、それに関係する機器を使いこなす能力」などとして使われるようになったと思われる。コンピューターが普及して、社会の情報化が進むにつれて、意味が拡大されるようになったと言える。考えてみれば、われわれ一般人は、どれほど「情報」についての知識や、それを使いこなす能力をもっているのだろうか。この広い意味での「情報リテラシー」こそが問題なのである。「ゲームリテラシー」であっても、この「情報リテラシー」なしには考えられないと言えるからである。しかも、「情報リテラシー」は、単に「リテラシー」と呼ばれる場合さえあるのである。

「情報」"information"という言葉とその考え方は、第2次世界大戦中にアメリカで生まれたものである。暗号解読や弾道計算のために、大量の情報を高速で機械処理する必要が出てきて、計算機から始まってコンピューターを開発する事になったのである。その流れの中で、情報を科学の対象として、物質のように定量化し、それを利用するための「情報科学」や、計算機からコンピューターを開発するための「情報工学」が体系づけられたと言える。わが国では、戦後になって出てきた言葉だが、現在この「情報リテラシー」そのものに関する教育はどうなっているのだろうか。

現在、我が国でも、「情報」というと、社会の中でおこるモノやコトに関する知らせというような単純な意味ばかりでなく、ある特定の目的について、適切な判断をするのに有用な資料や知識も指すようになっている。この場合、情報はエントロピーを下げるもの、すなわち、あるシステムの「乱雑さ」、「無秩序さ」、「不規則さ」の程度を下げるものというような熱力学的な定義も出てくるのである。さらには、機械系や生体系では、情報というものは、システムがその機能を果たすために必要な指令や信号の組合せを指すことになる。それなしには、システムはゴタゴタして機能しなくなるのである。

- 【ニュージーランド子育て・教育便り】第51回 天候被害に関する子どもの準備・事後のサポート
- 【カナダBC州の子育てレポート】第37回 フルインクルーシブ教育：自立と自律を中心に考える
- 【誰一人取り残さない「こどもまんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】その10：こども政策に関する国と地方の協議の場〜こども政策の最前線は自治体〜
- 【ドイツの子育て・教育事情〜ベルリンの場合】第62回 子どもの健康診査〜日独比較
- 【一人一人の違いに寄り添うために】第12回 知識は無限、順位は有限
- 【インドの育児と教育レポート〜チェンナイ編】第11回 インドの学校教育におけるスクールカウンセラーの役割
- 【カナダBC州の子育てレポート】第36回 フルインクルーシブ教育の理想と現実
- 【誰一人取り残さない「こどもまんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】その9：「こどもまんなか」の視点で乳幼児の育ちを支える「こども誰でも通園制度」について
- 【CRNA国際共同研究】子どものレジリエンスを育む保育実践に関する調査2024 結果報告



Tweets by crn_jp

したがって、どんなカタチでも、情報を扱う人は誰でも、我々がもっている、分子、原子や遺伝子の知識のように、情報の基本的理解から始まる情報リテラシーをもつ必要がある。特に、情報を提供して、子ども達を教えている教育関係者には、それが必須であることは明らかである。子ども達が、情報を取り込みやすいカタチにするにはどうしたら良いか、それこそ情報科学とか、情報工学の立場から考えなければならない時に来ている。それは、子ども達が、「学ぶ喜び」の中で、学ぶことができるようにすることである。

そのカタチのひとつとして、当然のことながら、ゲームを利用する方法もある。ゲームに関心をもっている人は別としても、多くの人は知らないことの方が多いのではなかろうか。コンピューターゲームは、対戦ゲームから始まってロールプレイングゲームが加わり、オンラインゲームに発展して来たという。教育など、ゲームそのもの以外にも役立たせるよう開発したゲームを「シリアスゲーム」と呼ぶそうであるが、それを教育に利用するとすると、教育関係者は、正に情報リテラシー、そしてゲームリテラシーも持たなければならない時代になったと言える。

コンピューターゲームで育った親の子ども達が、今学校で学んでいる時代であることも考えなければならない。そう考えると「シリアスゲーム」の教育利用も、避けて通れないものと言えよう。したがって、情報リテラシー教育はますます重要になっていると言えるだろう。

いいね! 0

ポスト



子育ての本質を考えるのに良い本が出ました。 - <スケッチ「親と子の50年」> (赤ちゃんとママ社)

掲載日： 2011年6月27日掲載

カテゴリー： 名誉所長メッセージ

5月中旬、出来たてホヤホヤの<スケッチ「親と子の50年」>という本を頂いた。著者の小山敦司さんが、わざわざ私の仕事場まで持って来て下さったのである。誠実なお人柄に心を打たれた。申し訳ないことに、引越したばかりで、新しい場所をお教えしてなかったのも、旧い所においていただくことになってしまい、ご迷惑をおかけしてしまった。

小山さんは、育児関係者ならば、どなたも御存知と思うが、1965年に創立社員として「赤ちゃんとママ社」を立ち上げ、育児問題を追求しながら、育児雑誌の編集ひと筋に仕事をされて来た方である。1981年からは社長、2008年からは最高顧問として、「赤ちゃんとママ社」をそれこそ赤ちゃんの時から育てた方なのである。大学では哲学を勉強されたそうで、書かれた本の素晴らしさが、それで理解出来たような気がする。内容に哲学があるのである。

本書は、全2章からなり、第1章は、スケッチ「親と子の50年」として、1955年から現在までを10年毎に分けて、子育て問題の歴史的展開を述べておられる。その前の1945年から1955年までの10年間は、敗戦後の混乱として、「虚無から混乱へ」というタイトルで、戦後前史として位置づけておられる。昭和ひと桁生まれとしては共感を覚える。

それからの10年毎のタイトルも良い。豊かな社会を築く基盤作りの1960年代を「変化と構築の時代」、急速に豊かになる中で中国の文化大革命、世界の大学紛争、日本の赤軍派活動などが起こった1970年代を「争乱と成長」と、日本の豊かさの蔭が見えはじめた1980年代を「子どもの受難 そして再生」、社会の明るさが蔭り、政治も混乱した1990年代を「失われた10年」、最後に2000年代を「21世紀はどうなる」としている。それぞれ時代毎に、社会を鋭く見つめ、子ども問題を洞察しておられるのに感銘を受ける。

問題という日本語を英語に直すと、"problem"、"question"、"issue"になるかと思うが、小山さんの視点は、勿論、幾何の問題のような"problem"でなく、質問するような問題の"question"でもなく、論争点になる問題の"issue"なのである。時代の移り変わりによって、子育てにどんな問題が社会に現われ、学者、実践家、そしてジャーナリストが、どのように考え、どのように論じたかが述べられ、子どもを中心にみる日本現代史として大変勉強になった。

ご意見・ご質問

CRNへのご意見・ご質問はこちらへお寄せください。

[ご意見・ご質問はこちら](#)

メルマガ登録

メールマガジン「CRN通信」を購読しませんか？子どもにまつわる耳よりな情報をお届けします。

[登録・変更はこちら](#)

第2章は、「50年目の子ども論」として、寺山修司の「書を捨てよ、町へ出よう」という言葉から始まり、「赤ちゃんに会う」というタイトルで、育児書のあり方についての考えを冒頭に述べておられる。つづいて、情報のあふれた現代社会で起こった、あるいは起こっている子育て問題を、23のテーマに整理しておられる。現場で起こった子育て問題をいろいろと分析しているばかりでなく、いわゆる学者や研究者といわれる立場の人々の解釈や意見も加えておられ、大変勉強になる。

それぞれのテーマのタイトルは、冒頭の「赤ちゃんに会う」から始まって、「子どもだましのやさしさ」、「やさしさにこだわって」、「親ができること、できないこと」、「育児はなぜ難しいと考えられるのか」、「マスコミがつくり出す病気」、「母性愛神話とは」、「どこからが大人?」、「子どもにとって時間とは」、「スピードが生み出す不幸」、「暮らしの不感症」、「もうひとつの少子化要因」、「人間は脳に何を求めるのか」、「人間の脳は迷うために存在する」、「子どもの才能」、「ヘンな時代のヘンな育児」、「さまざまな倫理的尺度」、「子どもにかかってきている制度疲労」、「格差社会はこうしてできあがっていく」、「今の教育に欠けていること」、「安心と安全、その違い」、「子どもを大切にするとはい」、「生きることの意味」という23項目で、小山さんの広い意味での育児哲学が書かれている。ここにあって23項目のタイトルを列記したのは、タイトルのコピーがいずれも意味深長で、読者の関心を引くに違いないと思ったからである。全ては読んでからの楽しみという事にした。

本書の中には、見開き2ページで、10人の育児学者、または研究者といっても良い先生方のコメントが入っている。巷野悟郎、高山英男、平山宗宏、原ひろ子、汐見稔幸、渡辺久子、羽室俊子、大日向雅美、小西行郎の先生方である。私も仲間に入る光栄をいただいた。しかし、正直なところ、小山さんの原稿を読んでから書かせて頂きたかった。書いた内容が、余りにも恥ずかしいからである。

頂いた直後、さっと目を通してこれを書いた。小山さんの育児哲学のあり方に、強い感銘を受けたからである。そして、早速ブログの記事としてCRNで取り上げることにした。親である、実践家である、学者・研究者である、子育ての本質を考えようとする人にお読みになることをおすすめする。私も、これからひとつひとつじっくり読んで勉強することにした。

いいね! 0

ポスト



日本アレルギー学会の春季大会に出席して

掲載日: 2011年6月13日掲載

カテゴリー: [名誉所長メッセージ](#)

日本アレルギー学会の春季臨床大会が5月14日（土）、15日（日）の2日間にわたって、千葉の幕張メッセで開かれ出席した。

若い時には、私も子どものアレルギーを勉強し、診療もしていたので、日本アレルギー学会設立時にはお手伝いさせて戴いた。もう30年以上も前のことである。学会は、東大の先輩で内科の大島教授や医科学研究所教授のアレルギー研究者の方々を中心に、日本全国の専門家の方々とはかって作られたものである。私も、東大小児科の教授になったばかりであったが、小児アレルギーも教室の看板にしていたので、誘われてお手伝いしたという経緯がある。その上、医学部同級生の宮本教授が大島教授の後を継ぎ、学会の理事長もされたこともあり、親しみの深い学会のひとつで、都合のつく時には必ず出席して勉強することになっている。

アレルギー学という学問は大変幅広く、年齢を問わず、また体の部分も問わずに病気が起こるもので、アレルギー学会は、基礎医学の研究者ばかりでなく、内科、小児科、外科、老人科、婦人科、耳鼻科、眼科、皮膚科などの専門医も多数参加する。したがって、学会員数は多く、正にマンモス学会なのである。

そのため、学会設立以来の毎年秋に開かれていた学術集会を分けて、秋は基礎アレルギー学を中心にして残し、春には臨床、すなわちアレルギー疾患を中心にした学術集会を、春季臨床大会として開催するようになったのである。そして、今年で23回目になるのである。当然のことながら、二つに分けても、春と秋それぞれがマンモス学会と言える大きな学会で、広い良い会

場のある都市でなくては、なかなか開けないとさえ言われている。

今回の大会長は、千葉大学大学院小児病態学教授の河野陽一先生で、免疫・アレルギー学の基礎研究から始まって、臨床小児アレルギーの分野でも多くの業績を上げられ、今回の第23回大会の会長を引き受けられることになったのである。その上、幕張メッセという立派な会場に恵まれて、良く企画されたプログラムのもとに学会は行われた。

日本子ども学会の理事会があったりして、残念ながら全部は出席出来なかったが、大変勉強になった。特に、ドイツのマールブルク大学のHolger Garn教授の、ヨーロッパで行われているコホート研究の発表は興味深かった。「コホート」とは、300~600人の兵士からなるローマ軍団のことを意味し、「コホート研究」とは、疫学の追跡研究のことを指す。

この10年来アレルギーの原因として、「過剰衛生仮説」という考えが言われている。「農家の子どもの方が、都会で育つ子どもに比べてアレルギー疾患が少ない」、「発展途上国の子どもの方が、先進国の子どもの比較して、アレルギー疾患の頻度が低い」、「ひとりっ子で育つた子どもの方が、兄弟の多い家庭で育つた子より、アレルギー疾患を発症する確率が高い」など、疫学研究の成果が次々と報告されたのである。生まれてからの育つ環境が余りにも衛生的で、きれい過ぎるのが原因で、その結果、アレルギーがおこるのだという考えである。考えてみれば、私が子どもの時には、兄弟も多く、泥んこ遊びは日常茶飯事であり、銭湯に入るのが普通であり、現在の様に毎日シャワーというような清潔な生活ではなかった。

そもそも「過剰衛生説」は、20世紀末のスウェーデンとエストニアで行われた出生コホート研究、即ち二つの国で出生の時期をそろえて追跡し、育つ過程の中で、子ども達にどんなアレルギー疾患が、どのようにおこるか追跡した疫学研究が最初のデータであった。スウェーデンの学者が、農業国エストニアよりスウェーデンの方が衛生的で清潔と考えて、アレルギーの発症頻度を比較したのである。爾来、ドイツばかりでなく、イギリス、さらにはEUとしてまとまって行なっているいろいろなコホートの研究が次々と行われているのである。その成果をGarn教授はまとめて報告された。いずれも同じ傾向であったが、興味をもったのは、生まれる前の母親の胎内にいる時の環境も、生まれた子どもに影響するという報告であり、注目に値しよう。農業をしている母親から生まれた子どもの方が、アレルギーになりにくいというのである。

過剰衛生学説の仕組となると、なかなか説明は困難である。平たい言葉で言えば、雑菌にもまれて育つと、子どもはアレルギーになりにくいということになる。したがって、誰でもがもっている皮膚・口腔・鼻腔・腸管腔の中に住みついている雑菌の集団（常在細菌叢）の果たす役割は大きい。さらには、ドイツの研究グループが、大腸菌という、最近の生肉の食中毒で問題になった病原大腸菌（O15とかO11）の仲間も、アレルギー疾患の発症回避に、他の腸内に住む雑菌と同じように一役かっているという成果も示した。それは、大腸菌という細菌は細胞膜にもっているLPS（リポポリサッカロイド）という物質に、免疫に関係する細胞が反応して、アレルギー発症をおさえると考えたのである。

こんな報告を聞くと、子育てには、如何に自然が大切かということになる。人間は、その進化の歴史を、自然の中で過ごし、子育てを繰り返して来たのである。それと同時に、人間が生きていく「いとなみ」の中で、腸は勿論のこと、口や皮膚に住みついている、いわゆる雑菌（常在細菌）とのやりとり、すなわち「ヒト-細菌共生系」の果たす役割は大きく、畏敬の念を覚える。

いいね! 0

ポスト



私にとっての新宿

掲載日： 2011年5月13日掲載

カテゴリー： [名誉所長メッセージ](#)

神田神保町にあったオフィスが、新宿（JR新宿駅の西側）に移ったのが3月7日（月）、初めて新しいオフィスに出勤したのは3月9日（水）であった。ベネッセコーポレーションの方針として、研究・開発関係のグループが、教育研究開発センターとしてまとめられることになったのである。それぞれの研究を統合して、開発につなげる意義は大きいものと思う。新宿に移った機会に、東京生まれの東京育ちの私にとっての新宿について、思い出を書くことにしていた。

しかし、その矢先、3.11の東日本大震災が起り、掲載が今日になってしまったのである。

新宿というと、私にとっては、何となく、赤ちょうちん・居酒屋で酒を飲む街、グルメ・食べ歩き、デパートでショッピングの街、映画・ゲームなどの遊びの街、そして、30を超す高層ビルの街、となる。勿論、私にとっての新宿は、戦後の記憶のものが大きく、戦前の新宿となると霞のような記憶しか残っていない。

新宿の街の歴史は古く、1600年代にさかのぼる。徳川家康の居城を造るため、信州高遠藩主の内藤清成が、家康の江戸入府前に、警備のため鉄砲隊を率いて甲州街道と鎌倉街道の交差していた場所（現在の新宿二丁目）に陣を張ったのが始まりという。

その後、内藤清成は、付近一帯を拝領して、自らの屋敷（今の新宿御苑）のひとつを造るとともに、宿場も開いたという。それまでは、日本橋を出発して甲府までの甲州街道の最初の宿場は高井戸であり、距離が長くいろいろと不便だったと言われていた。その後、東海道の品川の宿、中山道の板橋の宿、日光街道・奥州街道の千住の宿の4つの宿のひとつとして、行楽地に発展し、つづいて歓楽街としての新宿の原型が出来上がったと言われている。

現在のJR新宿駅は、品川・新宿線、すなわち現在の山手線の駅として1885年に出来たと言われるが、大正時代に入って、新宿駅から西に中央線として伸び、やがてそれが逆に東京駅にもつながって、東京の市街地の交通の要衝となったと考えられる。同時にデパート、いろいろな商店、映画館、カフェ、劇場などが集中して、昭和に入って、一大歓楽街として発展したのである。

戦前の新宿は、小学生の頃のデパートと、中学生の頃の戦争中の屋台の記憶として私の中にある。しかし、新宿で生活をはじめてみると、それ以外の思い出もいろいろ出て来て、なつかしさで一杯になる。

前に申し上げた新宿の記憶の第一は、小学校入学前、日本画を描いていた父が、杉並のはずれの美術学校の仕事の都合もあったと思うが、善福寺池に近い武蔵野の林のわきに小さなアトリエを建て、世田谷から移って来てからのことである。しかし、小学生の頃、母親や祖母に連れられて、西荻窪駅から省線（現在のJR線にあたる）に乗って来た当時のデパートの面影は、かすかに残っているのみである。

第二の戦争中の屋台の記憶は、昭和18年11月だったと思うが、海軍の学校に入学が決まり、広島に向けて出発する前に、娑婆の臭いでもかがせようと思った父が、新宿に連れて来た時のものである。昭和18年というと、艦載機による爆撃を東京はすでに一回受けていて、夜は灯火管制が敷かれていた。新宿の夜の明るいにぎわいも全くなかった。暗闇の中でろうそくの焰がゆれ動くもとの、父と語り合った屋台のひとつを思い出す。お酒は未成年で飲んだ記憶もないが、何を食べたのかも憶えていない。暗闇の中の屋台の姿だけが不思議と目に残っている。正に、新宿駅東側の駅前だったと思う。

戦後の新宿について思い出すのは、東京に帰り学生生活を始めた1946年から、大学を卒業してアメリカにインターンに出かけた1954年までの8年間の新宿であった。はじめは、やはりアメリカによるB29の焼夷弾爆撃の後の焼野原、続いて闇市の人混みが続く街になっていった姿は今も思い出せる。しかし、1959年アメリカから帰って来た時には、もう歓楽街としての印象が強くなっていた。そんな中で、本を求めて折々訪れた「紀伊國屋書店」の思い出は特に大きい。

現在、私は西新宿の高層ビルのひとつの13階で仕事をしているが、目の前に林立する高層ビルが窓一杯に見られる。これらは1970年代に入って建ち始め、80年代、90年代、2000年代と、国の経済に反映して、ニョキニョキとマッシュルームのように林立していったものである。まさに英語でいうmushroomingである。建った高層ビルの数は、1970年代に7、80年代に入って9、90年代に10、2000年代に入って9と記録されている。高さからみると、最低19階80m、最高55階225mと言われている。ここで生活してみると、ニューヨークの姿もかくありなんという感じであり、遠くからみても新宿のビルの林は、ある意味で見事なものである。

東日本大震災の国難が起こって1ヶ月程の今、その立て直しに、この首都東京の果たす役割は大きいものと思う。戦争による焼野原は、日本全国に及んだ。しかし、今回の国難は幸い東日本に限定され、また中国に抜かれたとは言え、日本の国力も敗戦した1945年当時とは比較にならない程強い。なんとか、国を挙げて東日本大震災の災害から東日本を復興させて、新しい日

本を作り上げたいものである。私も出来ることで何とかお手伝いしたいと思う今日この頃である。

いいね! 0

ポスト

8!

<<前へ

6

7

8

次へ>>

調査データ

- ▶ 乳幼児
- ▶ 小中高生
- ▶ 国際調査

▶ More

研究論文

- ▶ 異文化理解
- ▶ 健康と発達
- ▶ 学校教育
- ▶ 子どもの権利

▶ More

海外の子育て

- ▶ インド
- ▶ カナダ
- ▶ タイ
- ▶ ドイツ (ベルリン)
- ▶ ニュージーランド
- ▶ ノルウェー
- ▶ フィンランド
- ▶ サウジアラビア ▶ More

CRNについて

- ▶ ごあいさつ
- ▶ CRN概要
- ▶ 活動履歴
- ▶ CRN刊行物

▶ More



TOP > 名誉所長ブログ



名誉所長ブログ

Koby's Note -Honorary Director's Blog

名誉所長ブログでは、CRNの創設者であり名誉所長である小林登の日々の活動の様子や、子どもをめぐる話題、所感などを発信しています。



東日本大震災における子ども支援をチャイルドケアリング・デザインしよう

掲載日： 2011年4月25日掲載

カテゴリー： 名誉所長メッセージ

3.11の大地震とそれにつづく大きな津波、そして従来にない数の余震、さらには予期せぬ福島原発事故と、危機の連鎖した東日本大震災が起こって早くも1ヶ月になる。1945年の第二次世界大戦敗戦にならぶ、第2の国難 National Crisisが起こったと言えよう。メディアによると、幸い被害者の方々への支援も、何とか軌道に乗り始めたようである。

しかし、子ども問題に関心をもつ我々としては、当然のことながら、被災地の子ども達への支援を第一に考えなければならない。この場合、子どもの立場になって、子どものことを気にかけて心配して、子どもに優しい支援をしなければならない事は明らか。即ち、支援の在り方をチャイルドケアリング・デザインする必要があるのである。

CRNでは、3.11大震災にあたってまず、阪神・淡路大震災の時の記事、そして中国の四川大地震の時の記事などをまとめて、新たに開設した「東日本大震災の子ども学：子どもの心のケア」の中で再掲した。また、福島原子力発電所事故に関して、稲葉俊哉先生に「放射線と子ども」というタイトルで、放射線のABCから始めて、健康への影響、特に子どもに関係する甲状腺がんについて書いて頂いた。稲葉君は、学生の時から知り合いで、卒業後東大小児科に入り、子どもの病気を勉強している内に放射線医学の道に入り専門家になって、現在では広島大学の原爆放射線医科学研究所の教授になられた方である。

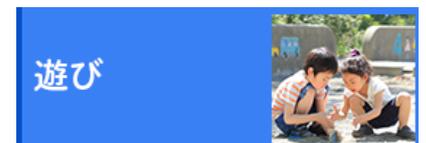
さらに、吉田穂波先生には「被災地レポート」というタイトルで、現地をご覧になって体験された事を中心に、妊婦さんの問題、子どもの心のケアの問題などを母親の立場から書いて頂いた。吉田先生は、名古屋大学、聖路加病院、ドイツ・アメリカ留学を経て、現在ハーバード大学のリサーチフェローをしていらっしゃる産婦人科医である。いずれも、役に立つ論文なので、ぜひお読み下さい。

この大震災にあたり色々と考えて、よりよい支援するには情報を集める必要があると考え、[所長ブログ \(2011.4.5\)](#) と、[4月の所長コラム](#)では、CRNをご覧になっている皆さんから、親として、保育士として、教師として体験したこと、考えたこと、思ったことを何でもよから投稿してほしいというお願いもした。<東日本大震災の子ども学>として、それらの記録をまとめ上げ、今後の非常時のために、後世に残すべきと考えたからである。

しかし、今直ちに必要なのは、被害にあった子ども達への支援である。地震で傷つき、あるいは津波に溺れて命を失った子ども達も少なくないと思うと、悲しい思いで胸一杯になる。心から冥福を祈るのみである。幸い助かった子ども達の中にも、親や兄弟姉妹を失った子ども達、

キーワード検索

Google 提供



名誉所長ブログカテゴリ

- 名誉所長メッセージ (50)
- CRNスタッフメッセージ (1)
- リレーエッセイ

新着記事

- 【誰一人取り残さない「こどもみんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】 その11：若い世代の描くライフデザインや出会いを考えるワーキンググループ

PAGE TOP

先生や友人を失った子ども達、家や学校を失った子ども達もあろう。自分の生まれた土地から離れて生活せざるを得ない子ども達、いろいろな施設で不自由な生活を強いられている子ども達などなど、考えてみれば子ども達のおかれた状況にはいろいろあって限りはない。今、まさに多様な対応が求められている中、子ども達への支援の在り方、特に心のケアを考えたチャイルドケアリング・デザインこそが、緊急の課題なのである。

3.11以来、CRNとして、これら以外に何が出来るかをいろいろと考えていたところ、東京おもちゃ美術館が、多田千尋館長を隊長として、おもちゃなどを用意して子ども達によるこびを与える「あそび支援隊」を、被災地の陸前高田と気仙沼に出すことになった。CRNは早速、突貫工事で、遊びに関するDVDを制作して現地に持って行って頂いた。タイトルは「遊びのレシピ集：震災地の子どもの心のケア」で、内容は身近にあるものを使って子ども達を遊ばせる方法の紹介である。紙コップで動物を作るとか、紙皿で皿回しをすとかなどである。あそび支援隊からの報告によると、被災者は、DVDそのものを感謝されると共に、その制作の早さに感動されたそうである。幸いなことに、テレビ報道によると、被災地の子ども達には、いろいろなところから立派なおもちゃが沢山送られているようである。映像の子ども達の笑顔が印象的であった。

ここで、皆さん方をお願いしたいことは、育児・保育・教育に関する問題の解決に必要な支援の在り方を考えるため、被災地にいらっしゃる方々は当然のことながら、それ以外にもいろいろなお立場で関心をお持ちの親御さん、保育士さん、そして先生・教育関係者の方々から、チャイルドケアリング・デザインするのに役立つアイデアをいろいろと頂きたいと思うのである。何とぞ宜しくお願い申し上げます。

いいね！ 0

ポスト



東日本大震災のお見舞いと〈震災の子ども学〉のお願い

掲載日： 2011年4月5日掲載

カテゴリー： 名誉所長メッセージ

東日本大震災の被災者の皆さん、心からお見舞い申し上げます。亡くなられた方々の御冥福を祈り、ご遺族には心からお悔やみ申し上げます。いろいろと大変なことと思いますが、皆さん方と一緒に頑張って再建して行きましょう。

4月の所長コラムで、私の経験やら考えた事を申し述べさせて頂きますが、皆さん方からも私達の最大関心事である子ども達について何でも、体験された事、考えられた事などをCRNのコメント欄で共有してください。また、記事の投稿も受け付けていますので、お寄せください。「震災の子ども学」として、皆さんと一緒にそれらをまとめようではありませんか。

また、保護者の方、学校の先生方、行政・支援にあたる方のために新コーナーを開設しました。こちらもご参考ください。

[「東日本大震災の子ども学：子どもの心のケア」](#)

いいね！ 0

ポスト



東大医学部に『健康と医学の博物館』がオープンした

掲載日： 2011年2月8日掲載

カテゴリー： 名誉所長メッセージ

この1月20日（木）、東大の医学部に『健康と医学の博物館』がオープンした。神田お玉ヶ池種痘所から始まった東大医学部・医学部附属病院は、平成20年（2008年）に創立150周年を迎え、その記念事業のひとつとして、この博物館が出来たのだ。

残念ながら、私は未だ見ていないが、中は常設展示と企画展示とに分かれているようだ。常設展示では、神田お玉ヶ池種痘所から始まり、ドイツ人教師による西洋医学教育を行う東大病院

- ▶ 【ニュージーランド子育て・教育便り】第51回 天候被害に関する子どもの準備・事後のサポート
- ▶ 【カナダBC州の子育てレポート】第37回 フルインクルーシブ教育：自立と自律を中心に考える
- ▶ 【誰一人取り残さない「こどもまんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】その10：こども政策に関する国と地方の協議の場～こども政策の最前線は自治体～
- ▶ 【ドイツの子育て・教育事情～ベルリンの場合】第62回 子どもの健康診査～日独比較
- ▶ 【一人一人の違いに寄り添うために】第12回 知識は無限、順位は有限
- ▶ 【インドの育児と教育レポート～チェンナイ編】第11回 インドの学校教育におけるスクールカウンセラーの役割
- ▶ 【カナダBC州の子育てレポート】第36回 フルインクルーシブ教育の理想と現実
- ▶ 【誰一人取り残さない「こどもまんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】その9：「こどもまんなか」の視点で乳幼児の育ちを支える「こども誰でも通園制度」について
- ▶ 【CRNA国際共同研究】子どものレジリエンスを育む保育実践に関する調査2024 結果報告



Tweets by crn_jp

へ、そして東大医学部へと変わった150年の歴史の中で、多くの先輩達の努力によって積み上げられたモノを展示している。その代表としては、東大で行われた研究の成果である眼科の石原式色盲検査表や、病理学教室で作られた人工癌、外科が開発した胃カメラなどがあるという。

企画展は、一般の方々に医学・医療の問題をわかりやすく紹介するトピック形式で、年数回行う計画だそう。立ち上げの企画展は、当時重大な感染症だった天然痘を予防するために設立された神田お玉ヶ池種痘所にちなんで「感染症への挑戦」というテーマである。「感染症とは」、「感染症と東大医学部のかかわり」、「身近な感染症」、「医療における取り組み」、「新たな挑戦」の5テーマについて展示しているそうである。

私が東大医学部で過ごしたのは、学生として1950年から54年の4年間、そして1959年に東大医学部小児科の教官助手になってから国立小児病院に移るまでの25年間であった。学生時代は勿論のこと、アメリカ留学から帰った1959年でも、第二次世界大戦の影響で、医学部・東大病院はまだまだミゼラブルなものであった。つづいて、1960年代末の大学紛争と、なかなか病院はきれいにならなかった。

特に病院の現実はいどく、何しろ1960年代はじめは、入院している子ども達の食事を、ベッドのかたわらで母親が七輪の火で作っているような状態だったのである。しかし、この20年間で、病院も医学部も立派になった。特に病院は新しくクリーンになったばかりでなく、沢山の外来患者さんに対応する職員も親切で、コンピューター・システムのおかげか、待ち時間も少なく、スムーズに診療が行われている。職員たちは、患者さんに対する対応のやり方を研修などで学んでいるそうである。私も患者として何回か病院にかかったもので、それは実感として体験している。

その東大医学部・医学部附属病院が、第二次世界大戦後の平和のつづく中で、わが国の発展とともに立派になり、医学・医療の社会教育のために、外からお招き出来るような博物館も出来たことは、大変喜ばしいことである。

御関心をお持ちの方は、ぜひ御来館下さい。赤門に入って真直ぐ行くと医学部本館に突き当たり、その右側のゆるやかな坂を下って、龍岡門から入って来るバス通りに当たる手前左側に医学部総合中央館があり、その1階が医学図書館で、地下1階（B1F）が博物館になる。医学図書館は東大医学部100周年記念事業で、150周年の記念事業の博物館が並んだことになる。私も近く参上したいと考えている。

「健康と医学の博物館」

<http://mhm.m.u-tokyo.ac.jp/>

いいね！ 0

ポスト



日本子守唄協会主催の児童虐待防止キャンペーン

掲載日： 2011年1月19日掲載

カテゴリー： 名誉所長メッセージ

日本子守唄協会は、理事長 西館好子さんが作られたNPO団体であるが、子育てばかりでなく児童虐待防止も、活動の大きなテーマのひとつで、何回かキャンペーンをしている。それは、子守唄は、子どもを喜ばせたり、眠らせたりするばかりでなく、母親の心をなごませたり、子育て意欲を高めたりする力もあり、子ども虐待の防止力になると考えられるからである。

平成22年12月15日午後、江戸東京博物館ホールで、「やめようとおめよう児童虐待－児童虐待防止を考察する」と題して、読売新聞東京本社との共催で、内閣府、厚生労働省、文部科学省、東京都・心の東京革命推進協議会、子どもの虹情報研修センターの後援をいただいて、NPO法人日本子守唄協会主催で開かれた。

基調講演は、私が「児童虐待防止と子育て支援」と題して、この春までセンター長をつとめていた子どもの虹情報研修センター（日本虐待・思春期問題情報研修センター）で学んだ事の中

ご意見・ご質問

CRNへのご意見・ご質問はこちらへお寄せください。

[ご意見・ご質問はこちら](#)

メルマガ登録

メールマガジン「CRN通信」を購入しませんか？子どもにまつわる耳よりな情報をお届けします。

[登録・変更はこちら](#)

心に、ダナ・ラファエル女史の「ドゥーラ」という考え方を紹介し、子ども虐待防止には、優しい社会、人を思いやる社会を作る必要があることを述べた。基調講演の第2は、盛岡にある、みちのくみどり学園（養護施設）の園長であられる藤澤昇先生が、親と別れて学園に入ってきた、虐待された子ども達の心の問題について、自らの御体験を話された。子ども達のエピソードは、親達の問題にも関係しているが、正に心が痛むものであった。

つづいて、子どもの虹情報研修センターの研究部長で、児童相談所に長期にわたり勤められて虐待問題に対応し、それに関する多数の本も書かれておられる川崎二三彦氏を司会にして、日本子守唄協会理事長 西館好子さん、読売新聞東京本社 記者の小坂佳子さん、そして基調講演の演者2人が加わってシンポジウムが開かれ、児童虐待の予防も含めて、会場の皆さんと一緒に話し合った。

内容の細かい点は別の機会にゆずるが、第三部の「命の讃歌ミニコンサート」が開かれ、木下綾香さん作詞・作曲の「冬に咲くひまわり」が彼女自身によってまず歌われた。つづいて声楽家の川口京子さんが、「この子の可愛さ」「しゃぼん玉」など、子守唄や童謡が6曲歌われ、最後に美輪明宏氏作詞・作曲の「ヨイトマケの唄」が熱唱され、会場の皆さんに感銘を与えた。つづいてフィナーレは、演者全員が壇上に上がり、会場の皆さんと一緒に「夕焼け小焼け」が合唱されて終了した。



子守唄協会が行う行事は、いつもこのやり方である。協会は、過去に「日本の子守唄」「とやま子守唄フェスタ」「親子のきずな」「子ども虐待」などいろいろなテーマで、このような会を開いているが、そのあとに必ず子守唄・童謡などが歌われ、フィナーレは皆さん御存知の歌の合唱で終わるのである。「歌は人の心を優しくする」ということを、この会ではいつも身をもって体験することが出来る。

現在のように、物質的に豊かな社会では、「優しさ」、「思いやり」、「うるおい」などがなくなり、人間関係は希薄、考え方は物質万能主義、人々の心は荒び、家庭・社会のあらゆる面で心の問題を起こしている。社会にガタが来ているのである。それを取り除くために、みんなが歌を唄う明るい町、子守唄や童謡のメロディーが流れる町にすることが、町を優しさで一杯にし、社会のガタを取り除き、虐待のない社会にする大きな力になると思うのである。

この運動に関心をお持ちの方は、ぜひ日本子守唄協会の活動を御支援いただきたい。

(連絡先：NPO法人 日本子守唄協会 TEL 03-3861-9417

URL : <http://www.komoriuta.jp/> MAIL: info@komoriuta.jp

いいね！ 0

ポスト



10年ぶりの北京訪問で思ったこと

掲載日： 2010年12月27日掲載

カテゴリー： 名誉所長メッセージ

先月11月22日から3泊4日で、東アジア子ども学交流プログラムのため北京に旅した。1970年初頭以来、北京訪問は10回以上になると思うが、この前の旅では、ホテルのテレビで9・11テロ事件の飛行機がニューヨークの高いビルに突っ込むあの映像を見た。ということは、2001年のことである。北京で開かれた国際小児科学会議に参加した年で、もう10年近くなる。

久しぶりに来た北京は、日本のGNPを抜いて、いろいろな面でアメリカに次ぐ世界第2位の大国の矜持を示し始めていた。まず、オリンピックのために建て替えられた北京国際空港ビルの屋根の優しい流線は、中国を感じさせる美しさであった。建物の中は近代化され、乗客の流れもスムーズであった。その上、対応する役人達の服装もきちんとしていて、好感が持てた。町を走るタクシーは、日本とあまり変わらなくなり、10年前ならタクシーの流れをぬって走っていた自転車の群もほとんど消えてしまっていた。中国は豊かになったばかりでなく、人々もそれなりに国際化の意義を理解し、大国の誇りを感じさせた。

東アジア子ども学交流プログラムの会場は、中華女子学院という中国に現在ある3つの女子大のひとつで、歴史と伝統ある大学のホールであった。毛沢東が政権をとって1949年10月1日に中華人民共和国を設立した時に、次の中国を担う女性の教育を目的として北京に設立された大学である。会場には1500人近くの人が集まり、幼稚園（保育園）と小中学校教育をどう結び付けるのが良いかを、日中の専門家と共に話し合ったのである。質疑応答も活発で、会場は沸いた。



(中華女子学院の学生さん達に囲まれて)

中国側のいくつかの発表は、私達に考えさせる問題でもあった。というのは、北京のような大都市には、仕事を求めて人が集まってくるものであるが、家に住み仕事に就いていても、外から来た人は正式の住居登録は出来ないという。すなわち、従来から住んでいた北京在住の人々とは別に登録されるのである。したがって、そういう立場の人々の子ども達が受ける教育は、前から北京に住んでいた人々の子ども達が受ける正式の教育とは異なるのである。特に、学校に就学する前の教育は充分でなく、幼稚園・保育園も少なく、なかなか入れないという現実がある。

帰国のため、北京空港に向かう前に、北京師範大学の学生さんの案内で、就学前教育を専門とする教師と学生さん、そして親とが一緒になって運営している保育園を見学させて頂いた。30人程の4・5歳の子ども達が、学生さんのお世話で、寒い空気の中で元気よく遊んでいた。先生とのやりとりで見せる子ども達の笑顔や、小さなけんかで見せる泣き顔は共に印象的であった。その子どもの母親が働いている市場も見せてもらった。電気用品から野菜・果物、肉まで並べている大小の店が、優に100はあったであろう。そこは、人間の生きている姿と息づかいが一杯であった。その中では、保育園で笑顔をみせていた男の子の母親が、食糧品を売って働いていた。太った恰幅の良い白衣を着た明るい女性だった。

中国が、間もなくアジア、さらには世界の大国として、世界をリードする国の仲間に入るとは間違いない。その中国の未来を支える子ども達のこと、もう少し配慮して頂きたいものと思ったのは、私だけではないであろう。



(訪問した保育園で遊ぶ元気な子ども達)



(保育園に近いマーケット)

いいね! 0

ポスト



<<前へ

7

8

9

次へ>>

調査データ

- ▶ 乳幼児
- ▶ 小中高生
- ▶ 国際調査

▶ More

研究論文

- ▶ 異文化理解
- ▶ 健康と発達
- ▶ 学校教育
- ▶ 子どもの権利

▶ More

海外の子育て

- ▶ インド
- ▶ カナダ
- ▶ タイ
- ▶ ドイツ (ベルリン)
- ▶ ニュージーランド
- ▶ ノルウェー
- ▶ フィンランド
- ▶ サウジアラビア ▶ More

CRNについて

- ▶ ごあいさつ
- ▶ CRN概要
- ▶ 活動履歴
- ▶ CRN刊行物

▶ More



TOP > 名誉所長ブログ



名誉所長ブログ

Koby's Note -Honorary Director's Blog

名誉所長ブログでは、CRNの創設者であり名誉所長である小林登の日々の活動の様子や、子どもをめぐる話題、所感などを発信しています。



年末のご挨拶

掲載日： 2010年12月22日掲載

カテゴリ： 名誉所長メッセージ

2010年（平成22年）もいよいよ終わり、CRNは来年4月に設立16年目に入ります。ノルウェーのベルゲンで開かれた国際会議で、子どもに関心を持ついろいろな立場の人達が、インターネットのやりとりによって、子ども問題を解決し、世界のよりよい未来を築こうと話し合ったのが1992年、わが国ばかりでなく世界に向け、われわれもそれを実践しようと、ベネッセコーポレーションの支援を受けて、CRNの日本語と英語のサイトを立ち上げたのが1996年、続いて2005年には中国語サイトも立ち上げることが出来ました。

この15年間を思い出すと、月日の流れが如何に早いかを実感します。この間、いくつかの国際機関や外国の大学からも注目され、連携を深めています。CRNがよくここまで育ったものと感無量であり、ご協力、ご支援いただいた皆様には感謝の念で一杯です。

この1年間も、お陰様で、CRNの国際活動は活発になり、5月には、韓国・晋州にある晋州教育大学より、「子ども学研究所」設立計画のため招かれて、CRN所長として、子ども学の講演を行いました。7月には、中国・杭州で開かれた環太平洋乳幼児教育学会（PECERA）"Early Childhood Education in a Changing World" に参加し、「子ども学」という考え方を紹介しました。そして11月には、北京の中華女子学院にて「第6回東アジア子ども学交流プログラム」を開くことが出来ました。その冒頭のキーノート・レクチャーでは、子どもは遺伝の情報と文化の情報で育つことを、CRN所長として述べました。

もちろん、国内で開かれた7月の日本赤ちゃん学会、10月の日本子ども学会もCRNにとっては重要な学会でした。特に日本子ども学会に、米国NICHD（国立小児保健・人間発達研究所）で子どもの成長・発達と保育の関係を研究されたSarah Friedman女史（心理学者）をお招き出来た意義は大きいと思います。女史は、お茶の水女子大学、甲南女子大学、武庫川女子大学、NHK放送文化研究所、ベネッセ次世代育成研究所5周年記念シンポジウムでもご講演され、わが国の子どもに関心を持つ研究者にとって、子ども学研究の正統的方法論を学ぶよい機会になったと思います。

最近のIT技術や方法論の進歩に鑑みて、今年にはCRNの3回目のサイトリニューアルを行いました。それにより、検索機能やコメント機能、記事のサマリーやキーワードも追加され、より読みやすく、またアクセスしやすくなったものと思います。

2011年も、この2010年のCRNの流れを継承し、一同力を合わせて、サイトのコンテンツを中

キーワード検索

Google 提供



インクルーシブ教育



社会情動的スキル



遊び



メディア



発達障害とは？



名誉所長ブログカテゴリ

- 名誉所長メッセージ (50)
- CRNスタッフメッセージ (1)
- リレーエッセイ

新着記事

- 【誰一人取り残さない「こどもみんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】 その11：若い世代の描くライフデザインや出会いを考えるワーキンググループ

心に、よりよいものにする所存です。皆様のご指導、ご支援何卒宜しくお願いいたします。

いいね！ 0

ポスト

BI

読売新聞大阪本社の子育て支援事業

掲載日： 2010年12月..8日掲載

カテゴリー： 名誉所長メッセージ

読売新聞大阪社は、社会的意義の大きい子育て支援事業を行っている。20年程前に始まった「よみうり子育て応援団」と称する、子育ての専門家、研究者、さらに親の代表者などによる一般向けの講演会、相談会やシンポジウムのようなものである。それに加えて、5年程前から始まった事業もある。日本全国で行われている民間の子育て支援運動の中から、良い運動、ユニークな運動などを選んで表彰し、賞を差し上げ、専門家も派遣して運動を支援する「よみうり子育て応援団大賞」である。御縁あって、始めた当初から私も楽しくこの事業をお手伝いさせていただいている。

今年は、この11月13日（土）に応援団大賞などの授賞式と、「知りたい、みんなのしかり方」というテーマで応援団が大阪のドーンセンター（大阪府立男女共同参画・青少年センター）で行われた。

応援団の各賞は応募団体220程の中から5団体が選ばれた。大賞は京都市の「京都子育てネットワーク」（代表 藤本明美さん）で、京都にあるいろいろな子育てサークル約170団体を、「親には子育て仲間を、子どもには遊び仲間」をスローガンに、ネットワーク化したものである。

奨励賞としては、福井県坂井市にあるNPO「パピジャングル」（代表 荒巻仁さん）という、本の読み聞かせを軸に、父と子のキャンプ、運動会、山登り、料理教室、放課後の遊びや勉強などを行っている父親の団体と、北海道士幌町の「ばん・ばん・ばんがきん」（代表 松浪智子さん）という、特別に作った「子育て支援カー」で広大な農業地域をまわり、子ども達に土曜日の居場所を作り、移動図書館、移動教室などを行って勉強させる運動も展開している団体に賞が与えられた。

応募した団体はどれもレベルが高く、優劣つけ難かったので、残念ながら賞金はないが選考委員特別賞を2団体に贈ることになった。熱心な話し合いと公平な評価によって、東京の世田谷区で30年程前から、子ども達に冒険あそびをさせる先駆的な活動をしている「プレイパークせたがや」（理事長 西郷泰之さん）と、福岡市で、商店街の空き店舗を利用して子どもをいろいろと遊ばせる運動を展開している大学生の団体「きんしゃいきゃんぱす」（代表 山下智也さん）であった。

応援団のテーマ「知りたい、みんなのしかり方」も、やりとりが活発で、時間の経つのを忘れる程であった。司会進行は、千葉商科大学の宮崎緑さんの見事な手さばき、口さばきによって行われた。参加した専門家の方々は、恵泉女学園大学の日向雅美さん、母親として発言した女優の奥山佳恵さん、京都大学教授の心理学者である子安増生さん、子育て支援を実践していて、その昔応援団賞を受賞したNPOハートフレンド代表の徳谷章子さんであった。あらかじめ集めた質問を整理して、それに答える格好で行われたが、当日参加しているお父さんからの直接の質問も加わった。

話し合いの内容は、大変興味深く、私にとっても大変勉強になった。敢えて私の考えをもうひとつ加えるならば、お父さんとお母さんの二人が一緒に叱らないことも重要と思う。片方が叱ったら、しばしば一緒になることが多いが、片方は必ずサポートティブにまわり、折を見て何か良い事を誉めることである。お父さん、お母さんから一緒に叱られたら、子どもにとっては救いがなく、追いつめられてしまうと思うのである。

少子化が進み、子育て問題が多発する中、全国各地域で頑張っている子育て支援活動をサポートする、読売新聞大阪本社のこの事業の、草の根の力を強化する役割は極めて大きいものと思った。この11月13日土曜日の午後、楽しい半日であった。

- 【ニュージーランド子育て・教育便り】第51回 天候被害に関する子どもの準備・事後のサポート
- 【カナダBC州の子育てレポート】第37回 フルインクルーシブ教育：自立と自律を中心に考える
- 【誰一人取り残さない「こどもまんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】その10：こども政策に関する国と地方の協議の場～こども政策の最前線は自治体～
- 【ドイツの子育て・教育事情～ベルリンの場合】第62回 子どもの健康診査～日独比較
- 【一人一人の違いに寄り添うために】第12回 知識は無限、順位は有限
- 【インドの育児と教育レポート～チェンナイ編】第11回 インドの学校教育におけるスクールカウンセラーの役割
- 【カナダBC州の子育てレポート】第36回 フルインクルーシブ教育の理想と現実
- 【誰一人取り残さない「こどもまんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】その9：「こどもまんなか」の視点で乳幼児の育ちを支える「こども誰でも通園制度」について
- 【CRNA国際共同研究】子どものレジリエンスを育む保育実践に関する調査2024 結果報告



Tweets by crn_jp

(関係記事は、10月5日(火)、11月14日(日)、11月28日(日)の読売新聞大阪版朝刊に掲載)

いいね! 0

ポスト



11月は児童虐待防止推進月間 – 親になることを考える

掲載日: 2010年12月3日掲載

カテゴリー: 名誉所長メッセージ

厚生労働省は、11月を「児童虐待防止推進月間」と決めている。もっとも、内閣府が決めた11月の第3日曜日の「家族の日」と言う日もある。お互いに関係なくはないが、「家族の日」は虐待と重ならない方が良いように思う。それは温かい感じの日にしたいと思うからである。しかし、お互いに御都合があるのであろう。

児童虐待防止推進月間の行事のひとつとして、11月9日(火)に、この春までお手伝いしていた子どもの虹情報研修センター主催で行われた公開講座「子育てとやさしさ」に招かれて話をした。私の講演タイトルは「やさしい親になるには～子ども虐待からマタレッセンスとパタレッセンスを考える」であった。

虐待する親を考えると、親になることの重要性は明らかである。生まれた子どもが、乳児・幼児・学童と育ち、思春期・青年期を経て大人になり、やがて結婚して親になる。女の子が親になる時がマタレッセンス(成母期)であり、男の子がなる時がパタレッセンス(成父期)である。

文化人類学者マーガレット・ミードのお弟子さんで、子育ての文化人類学を研究したダナ・ラファエル女史は、マタレッセンスの重要性を強調している。赤ちゃんを産んだ母親は、どちらかというあまり注目されずに、ほとんどの周囲の目が生まれたばかりの赤ちゃんの方に向けてしまっているが、むしろ、なったばかりの母親の方をもっと大切にすべきだと言うのである。

公開講演で私が述べたことは、ひと昔前までは、赤ちゃんが生まれれば、自然に母親になり父親になったと思われているが、今では、なり損ねている母親、父親が多くなっている現実があることを学ばなければいけない。虐待する親はその中の大きなひとつの代表であると言える。

親になるには、本能的な生まれながらの心のプログラムや、小さい時の育てられ方などが関係するとよく言われるが、子育てをしている人を見たり、赤ちゃんにふれ合ったりする機会が、少子化社会では少なくなったことも関係しよう。その昔は、親の子育て、隣の人の子育て、子育てを助ける子ども達の姿などをよく見てきた。しかし、最近では子どもの数の減少とともに見る事は少なくなり、子ども同士で遊んでいる時でも、赤ちゃんをおんぶして遊んでいる子どもの姿は全くと言ってよい程、見ることはなくなってしまった。したがって、現在親になるには、子どもの時、子育てする親や他人の姿を見たり、学校教育の中で子育ての学習を体験したりすることも必要になってきたことを述べた。

そんな考えを持つようになったひとつの理由は、チンパンジー学者のJ.グッドールさんの話からである。ある時、グッドールさんに、チンパンジーの母親は自分の子どもを虐待するかと尋ねたところ、兄弟姉妹の末の方の女性チンパンジーでは起こることがあるとおっしゃった。子育てする姿を見る機会がないと、生まれ出たものが何だかわからず、驚き狂乱して、わが子を放出したりしてしまうのだそう。しかし、そんなチンパンジーでも、何回か妊娠・出産を繰り返すと、立派に子育てするようになるというのである。すなわち、子育てのあり方を学ぶからなのである。

幸い、私のそんな話の後のスピーカーであった鳥取大学の高塚人志先生は、小学校、中学校の子ども達ばかりでなく、医学部の学生、さらには社会人まで、赤ちゃんとのふれあい体験をさせる授業の話がされた。勿論、大学生や社会人になると、子育て教育というよりは、コミュニケーション教育を目的としていて、単なる子育て教育を越えている。話し言葉の通じない赤ちゃんとのやりとりで、コミュニケーションの基本を学ぶというのである。

ご意見・ご質問

CRNへのご意見・ご質問はこちらへお寄せください。

[ご意見・ご質問はこちら](#)

メルマガ登録

メールマガジン「CRN通信」を購読しませんか? 子どもにまつわる耳よりな情報をお届けします。

[登録・変更はこちら](#)

重要なのは、高塚先生が、子育て教育では、単に赤ちゃんとの接触ばかりでなく、理論的にカリキュラムを組んで、子ども達には特に礼儀作法を含めていろいろな方法で子育て教育を行っていることである。鳥取県や石川県では、全ての小学校、中学校でその教育を取り込む運動がおこっているという。少なくとも、少子化問題解決には有用で、全国的な動きになることを祈る次第である。

いいね! 0

ポスト



食育はいつ始まるか、いつ始めるべきか

掲載日： 2010年11月22日掲載

カテゴリー： [名誉所長メッセージ](#)

「食育」という言葉が、世の中を走り始める前、「食習慣はどのようにして出来るのだろうか?」というように考えたことがある。それは、1970年代の中頃だったと思うが、ランセット誌に発表された、母乳哺育の論文を読んで、その発想に驚いたからである。

その論文は、母乳哺育の始めから、すなわち赤ちゃんが母乳を飲み始めた時点からの経過にともなって、分泌する母乳の成分を分析してみると、いろいろと変化が起こっていると言うのである。つまり、母乳中の脂肪成分の濃度は上がり、pHも上昇する、しかし、たんぱく成分にはあまり変化がないのである。これは、母乳の味（風味）が変化することを意味する。簡単に言えば、母乳の味はクリーミーになり、酸味は弱くなるのである。

この報告者は、この味の変化が、赤ちゃんに食事の始めと終わりを教え、食欲のコントロールに役立っているという。確かに、ミルクでは始めから終わりまで味は単一であり、始めも終わりもない。だから赤ちゃんはミルクを飲み続け、太り気味になってしまうのである。大学で小児科の助手をやっていた1960年代は、ある意味でミルク全盛時代であり、ミルク会社のスポンサーで行われた「赤ちゃんコンクール」の優勝児は丸太った赤ちゃんであった。今で言えば、肥満児コンクールだったと言える。

ところが、11月の「母子保健」（母子衛生研究会発行）によると、食育の始まりはもっと早いというのである。微量ではあるが、母親の食事成分が羊水中に出ていて、それを飲むことで胎児は味を学んでいるというのである。確かに、味を学ぶには、味覚以外に方法はない。しかも、味のセンサーである舌の味蕾は、妊娠100日の胎児ではちゃんと出来上がっているのである。したがって、食育は胎児期から始まっていると言える。

一寸考えても、食文化は色々ある。わが国のような味噌・醤油文化ばかりでなく、インドのカリー文化、韓国の辛子文化などなど。したがって、それぞれの文化の中で、人間は生きていくために、それぞれの食文化の味のエッセンスを、胎児の時から学ぶ必要があるのかも知れない。

大切なことは、子ども達の食育に対するお母さんの責任として、おいしい料理を作り、テーブルを囲んで楽しく食事をする事は、勿論大切であるが、それだけではない。妊娠とわかったら、生まれて来るわが子のために、健康な生活をするばかりでなく、食生活も豊かにして、食文化の基本もおなかの赤ちゃんに教える必要があると言えるのである。特に、日本の食文化がいろいろと世界的に評価されている現在、その伝承のためにも、これは重要である。

いいね! 0

ポスト



共生の医療、腸内フローラの医学

掲載日： 2010年11月18日掲載

カテゴリー： [名誉所長メッセージ](#)

10月29日（金）、ヤクルト・バイオサイエンス研究財団主催の「腸内フローラシンポジウム」が開催された。毎年、この頃にかかれる恒例の会で、腸内フローラ（腸内常在細菌叢）という

関心のあるテーマなので、可能な限り出席することにしてきた。

しかも、このシンポジウムは、歴史が古い。今回が19回目というから、20年程前から始まっている。もっとも、その前から、理化学研究所が主催で10回以上も開いたそうである。

いつものように今回もお招き頂いたが、今回のテーマは「腸内フローラとこどもの健康」なので、都合して全日参加した。何故「腸内フローラ」（以下IFと略す）に関心を持つかというと、小児科学の歴史の中では、第二次世界大戦前から取り上げられて来たテーマのひとつでもあり、戦後の免疫学の発達と共に、IFの果たす役割が腸管免疫と関連して、従来考えられていた以上のものであることが明らかになったからである。若い頃、私自身は、免疫学をライフワークにしようと考えていた事もある。

それ以外にも、もうひとつの大きな理由がある。医学の歴史によると、外からくる病気の原因として、一番最初に見つけられたのは細菌であり、したがって、医学歴史の中では、それを叩くことを中心にした治療法がまず大きく発達したのである。殺菌剤しかり、抗生物質(antibiotics)しかりである。しかし、IFは、腸の中で人間と共生して、お互いに助け合いながら生きている。人間の皮膚とか腸管以外の粘膜にもフローラ（常在細菌叢）はいて、それなりに役を果たしているのである。したがって、フローラを使った医療を、私は「共生の医療」と呼んでいる。今や社会は共生、共創の時代、学問も学際、文理融合の時代であるように、医療にも同じ考えのものが現れてきても不思議はないのである。

今回のシンポジウムでは、小児医療の中で、IFの細菌を選んで積極的に利用した成果が報告された。細菌を制する薬品を抗生物質、すなわちアンチバイオティクス(antibiotics)と呼ぶように、IFの細菌の中で、医療用に作られた生きた細菌製剤をプロバイオティクス(probiotics)と呼び、自然に得られる、IFのような細菌を増殖させる物質をプレバイオティクス(prebiotics)と呼ぶようになった。

今回のシンポジウムで取り上げられたテーマをみると、小児医療の現場では、まず第1に未熟児の治療ばかりでなく、赤ちゃんのいろいろな奇形の手術、小児癌などの治療で多発する感染症の予防と治療に、多くのプロバイオティクス、プレバイオティクス、それらを組み合わせたシンバイオティクスが利用されているのである。特に、母乳中にはプロバイオティクス、プレバイオティクスが存在するので、母乳哺育さらに母乳育児の重要性も、多くの発表者によって強調された。

第2は、アレルギー、すなわちアトピー性皮膚炎とか気管支喘息などの発症予防に、プロバイオティクスを生後早期に与えることが有効であるという報告である。

さらに、インドのコルカタ（カルカッタ）の恵まれない地域で、子ども達にプロバイオティクスを毎日飲ませると、飲ませなかった子どもより下痢にかかる頻度が有為に低下するという日印共同研究の成果も報告された。

今回のシンポジウムで最も驚いたのは、IFが心の発達に関係するのではないかという発表である。残念ながら医療現場の研究ではなく、マウスの実験である。生まれて間もなく、腸内細菌がちゃんと出来ないと、ストレスに対応する力が弱い、行動の発達が悪いというのである。実験動物とは言え、最近話題になっている発達障害の子ども達の増加を考えるのに重要なヒントになると思った。また、この数十年来の喘息の子どもの増加と発達障害の増加は、考えてみれば対比出来るかもしれないとも考えた。そのメカニズムはこれからであるが、腸は第2の脳であり、神経系を介して、さらにはIFの作る活性物質が第1の脳に作用しても不思議はないと思うのである。当然のことながら、プロバイオティクス、プレバイオティクスをとるために重要な母乳哺育も、あらためて役割を考え直さなければならない時にある。

いいね！ 0

ポスト

BI

<<前へ

8

9

10

次へ>>

調査データ

- ▶ 乳幼児
- ▶ 小中高生
- ▶ 国際調査

▶ More

研究論文

- ▶ 異文化理解
- ▶ 健康と発達
- ▶ 学校教育
- ▶ 子どもの権利

▶ More

海外の子育て

- ▶ インド
- ▶ カナダ
- ▶ タイ
- ▶ ドイツ (ベルリン)
- ▶ ニュージーランド
- ▶ ノルウェー
- ▶ フィンランド
- ▶ サウジアラビア ▶ More

CRNについて

- ▶ ごあいさつ
- ▶ CRN概要
- ▶ 活動履歴
- ▶ CRN刊行物

▶ More



TOP > 名誉所長ブログ



名誉所長ブログ

Koby's Note -Honorary Director's Blog

名誉所長ブログでは、CRNの創設者であり名誉所長である小林登の日々の活動の様子や、子どもをめぐる話題、所感などを発信しています。



またハロウィーンが来た

掲載日： 2010年11月11日掲載

カテゴリー： 名誉所長メッセージ

冷たい風と共にまたハロウィーンが来た。町を歩くと繁華街のアメリカ風の店やレストラン、そしてデパートの飾りの中に、くり抜いて作ったカボチャの顔が並ぶようになった。カボチャの目や鼻や口の奥に、ろうそくの焰がゆれ動いたり、あるいは赤い豆電球が点滅したりしているのが見える。近くに置かれた木には、異様な仮面や衣装もぶら下がっている。

そもそもハロウィーンは、キリスト教の国や地域で、11月1日の万聖節の前夜祭として広まった。教会の行事のほか、古代ケルト人の風習に基づいて、それぞれの地域でいろいろな行事が行われている。それこそ焚火から始まって、運命占い、リング食い競走まであり、子どもを巻き込んだ民俗的な行事も行われている。元来はカブが使われていたそうだが、アメリカでは開拓の歴史からか、秋の収穫の代表としてなじみの深いカボチャをくり抜いて、目・鼻・口をつけた顔を飾り、いろいろと扮装した子ども達が近所の家をまわって、お菓子などを求めるのである。

昔は、日本にはハロウィーンはなかったし、アメリカ人のコミュニティは別であろうが、戦後もなかった。しかし、この10年程前からと思うが、日本の町にもハロウィーンが現れ始めた。家庭ではあまり見たことはないが、商店やレストランにはカボチャの顔や仮面が並ぶようになった。東京の街全体がアメリカのそれに似てきたためか、商業主義とは言え、あまり異質な感じがしなくなった。しかし、私が折々利用する学士会館という固いところにさえ、それが現れてきたのには一寸驚いた。

私が初めてハロウィーンに出くわしたのは、昭和29年（1954年）の10月末、アメリカでインターンを始めて数ヶ月の頃だった。最初のハロウィーンの思い出は、冷たい風がエリー湖から吹き始めたクリーブランドの東の住宅街を、アドレスのメモを見ながら、ある人の家を訪ねて、コンクリートの石畳の道をひとりコツコツと歩いていた姿から始まる。薄暗い通りに面した家々の窓からカボチャの顔が目をゆらゆらと輝かせ、口を大きく開いているのが見られた。グループを作った子ども達は、顔に異様な化粧をしたり、怪物の面をかぶったりして、飴やケーキをもらおうとドアのところに群がっていた。アメリカのハロウィーンは子ども達にとってのお祭りの様なものだと思った。

窓のカボチャの顔を見ながら、隣近所の家々を訪ねてお菓子をもらって歩きまわる子ども達の群とすれ違い、とっぴり日も暮れて、やっと訪ねる家に着き、待っている人と出会うことが出来た。

キーワード検索

Google 提供



インクルーシブ教育



社会情動的スキル



遊び



メディア



発達障害とは？



名誉所長ブログカテゴリ

- 名誉所長メッセージ (50)
- CRNスタッフメッセージ (1)
- リレーエッセイ

新着記事

- 【誰一人取り残さない「こどもみんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】 その11：若い世代の描くライフデザインや出会いを考えるワーキンググループ

その人は、名前は忘れてしまったが、戦前私と同じように大学を出て間もなくアメリカに渡った日本人で、西海岸から東海岸のクリーブランドの町に移り、事業を興して大成功し、商工会議所の会頭まで務めた方なのである。しかし、第二次世界大戦が始まると共に、その全てを失い、収容所にまで入れられてしまった。正に、奈落の底に落ちるような大事件で、彼の憤りと悲しみは想像に絶する。しかし、令夫人がアメリカ女性であり、多くのアメリカ人の友人の力で、収容所だけは出て、戦時中も街でなんとか生活することだけは出来たという。

戦争は終わったものの、全てが急に良くなるわけではなく、当然のことながら、厳しい生活をしておられた。そんな中、戦後10年足らず経って、日本から留学してきた若かった私に偶々出会い、アメリカに来た若い当時のことを思い出したのであろう。遊びに来いと招かれた日が、ハロウィーンだったわけである。

勿論、家も立派な訳もなく、子ども達の影もない淋しい閑散とした裏の部屋で、戦中の彼の苦勞の物語を聞かされたのである。しばらくたって、もの静かな優しいアメリカ女性の夫人が仕事から帰ってこられて、温かい手料理が作られた。ビールを飲みながら話は続けられたのである。その時、勉強が済んだら、自分はちゃんと日本に帰ろうと心に決めた事だけは確かである。

あれから50余年になるので、もう御存命でないであろう。しかし、10月末になり、ハロウィーンのカボチャの顔の飾りを見ると、いつもクリーブランドの最初のハロウィーンと、そこで出会った彼の話を、一抹の感傷をもって思い出す。

いいね! 0

ポスト

8!

インターネットと私

掲載日： 2010年10月28日掲載

カテゴリー： 名誉所長メッセージ

「インターネット」という言葉を初めて耳にしたのは、20年近く前のことであった。1992年春、ノルウェーのベルゲンで開かれた国際会議"Children at Risk"（危機にある子ども達）後の話し合いの場であった。会議後、世界各国代表と言うべき人達が、バスに乗せられて4、5時間、残雪のある山に囲まれた静かなフィヨルドの奥の瀟灑なホテルまで連れて行かれ、2泊3日で缶詰になった。内容は、「インターネット」で、子ども問題に関心のある世界各地の学者、研究者、実践家を繋ごうという話であった。国際会議そのものは、ノルウェー国立子ども学研究センターと呼ぶべき施設の主催であった。旅費まで出していただき、時間も取れたので参加することにした。何も知らなかった私は、冒頭で「インターネット」はないが、「ファックス」ならあると言って笑われた。

当時私は国立小児病院の院長をしていたので、幸いなことに、会議後間もなく病院にインターネットが入り、院長室にもコンピューターの端末を置いてもらう事が出来た。早速、人差し指でキーをたたきながら、使い方を学び、何とかインターネットをいじることが出来るようになった。もっとも、秘書の方がお上手で、助けられた事もあったと思う。

最初に驚いた事は、何かを探しているうちに、アメリカのとんでもないところにあるホームページまで入り込んでしまったことである。インターネットのネットワークは、地球全体を大きくカバーしているという実感をもった次第である。

そんな体験から、ノルウェーで話し合った、世界の子どもの問題に関心をもつ人々をインターネットで繋ぐ仕事を、日本代表としてやってみようかという気になった。国立小児病院の定年退職も近づいていたので、単なる小児科医としての仕事より、子ども達のためになるもっと大きな仕事が、人生のまとめとして出来るかも知れないと思ったこともある。

- [【ニュージーランド子育て・教育便り】第51回 天候被害に関する子どもの準備・事後の](#) [PAGE TOP](#)
- [【カナダBC州の子育てレポート】第37回 フルインクルーシブ教育：自立と自律を中心に考える](#)
- [【誰一人取り残さない「こどもまんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】その10：こども政策に関する国と地方の協議の場～こども政策の最前線は自治体～](#)
- [【ドイツの子育て・教育事情～ベルリンの場合】第62回 子どもの健康診査～日独比較](#)
- [【一人一人の違いに寄り添うために】第12回 知識は無限、順位は有限](#)
- [【インドの育児と教育レポート～チェンナイ編】第11回 インドの学校教育におけるスクールカウンセラーの役割](#)
- [【カナダBC州の子育てレポート】第36回 フルインクルーシブ教育の理想と現実](#)
- [【誰一人取り残さない「こどもまんなか社会」の実現を目指す「こども家庭庁」】その9：「こどもまんなか」の視点で乳幼児の育ちを支える「こども誰でも通園制度」について](#)
- [【CRNA国際共同研究】子どものレジリエンスを育む保育実践に関する調査2024 結果報告](#)



Tweets by crn_jp

いろいろやり方を考えて、結局インターネットによる子ども問題の解決をどう研究したらよいかを話し合う場として作ろうということになり、Child Research Net (CRN)を、国立小児病院を定年退官した1996年に設立した。ベネッセコーポレーションの御支援によって、ノン・プロフィットな組織として出来上がったのである。国際的な活動を目指して設立したので、当然日本語版ばかりでなく、英語版、中国語版もお願いして始めたのである。

設立以来15年になり、その間いろいろと思わぬところからメールが飛び込み、やりとりすることになった。フロリダのお母さんからの育児相談とか、シカゴ大学で助産学を勉強している留学生からドゥーラの問合せがあったり、ヨーロッパの国際機関から子どもに関するwikipediaのようなものを作ろうとか、数え上げれば切りがない。その中には、ドゥーラ研究室のように、問い合わせてきた方をお願いして、新しい活動を始めたものもある。その後、CRNのアクセス数が順調に伸びているのは、コンテンツもそれなりに良いからであろうと自負している。

最近驚いたのは、CRNで私の書いたものを読んで、「子ども」とは関係のない個人的な話で、イギリスから私に問い合わせがきた事である。インターネットの情報というものは、生き物のように世界を走り回り、人間の心を動かし、新しい人間関係さえもつくるものであることを学んだのである。

いいね! 0

ポスト



学会のはしご

掲載日： 2019年10月18日掲載

カテゴリー： 名誉所長メッセージ

今までの人生の殆どが大学務めだったお陰で、学会とは今も御縁が深い。出たい学会の期日が重なれば、どちらかを犠牲にしなければならないのは、自然の理。しかし、今年はそれがなかった。したがって、この4月から月1回の頻度で、9月から10月にかけてはほぼ毎週末の頻度で学会に出かけることになってしまった。学会をはしごしたようなものである。この間に講演も何回か行い、その上、東アジアではあるが外国にも2回程出かけたので忙しかった。

今年の学会のはしごは、3月末の日本発達心理学会、4月の日本小児科学会、5月の日本アレルギー学会、6月の日本赤ちゃん学会と始まり、7月は日本の学会には出なかったが中国の杭州で環太平洋乳幼児教育学会 (PECERA)、8月下旬に入ると日本で開かれた国際免疫学会、日本思春期学会と2週末、一寸間をおいて9月から10月の3週末には、日本小児保健学会、日本母乳哺育学会、日本子ども学会と、正に学会のはしごになってしまった。しかも、その多くは子どもの医学・医療に関係する学会である。

学会に出ると申しても、現役を引いた身なので、自ら発表することはないため、子ども学に関係して子ども問題を気楽に勉強することが出来るのが楽しみである。昔から関係していた学会なので、旧友に会えること、東京から離れる旅をエンジョイ出来ることも、出席の意欲を高める。

これらの中には、特に私が作った学会もある。日本赤ちゃん学会、日本母乳哺育学会、日本子ども学会がそれである。また、戦後日本で医学会が発展する時代でもあったので、設立の手伝いをした日本アレルギー学会、日本発達心理学会もある。いずれにしても、それぞれの学会がますます盛んになる姿をみる事も、嬉しい事である。それに加えて、私が考え作った「子ども学」とか日本子ども学会は、子どもに関係ある小児科学とか小児保健学などの医学を取り込み乗りこえる、子どもに関係する学際的な学会である。したがって、医学・医療関係の学会に出て勉強することの意義は大きいと考えるので、はしごまでしてしまうのである。

ご意見・ご質問 PAGE TOP

CRNへのご意見・ご質問はこちらへお寄せください。

[ご意見・ご質問はこちら](#)

メルマガ登録

メールマガジン「CRN通信」を購入しませんか？子どもにまつわる耳よりな情報をお届けします。

[登録・変更はこちら](#)



(9月に新潟で行われた「日本小児保健学会」の様様)

いいね! 0

ポスト



はじめに

掲載日： 2010年9月30日掲載

カテゴリー： 名誉所長メッセージ

CRNの事務局から、今回のサイトリニューアルで、私のブログをオープンして下さったが、何を書いたら良いのかいろいろと迷った。ブログという言葉は折々耳にはいたが、まずこの機会に、本来何なのか調べてみることにした。

ブログは2002年頃からブームになったというが、そもそもは"weblog"の略で、日記型の個人サイトであった。"log"を英和辞典でみると、はじめに誰でも知っている「丸太」とあるが、終わりの方をみると「航海日誌」「運転記録」、あるいはそれらを書くことであった。もう昔になるが、私も若い頃、終戦前の2年間帝国海軍の学校で勉強していたので、「航海日誌」でピンと来た。

現在インターネット上で行われているブログをみると、三つに分けられるようである。第1は、個人の日記を公開するタイプ、第2は知っていることをニュースとして発信するタイプ、そして第3は、考えたこと、表現したいことを発表するタイプだそうである。いわば、個人がジャーナリストとしてサイトで発表することになる。

しかし、ブログの出現は、社会の言論の場にいろいろ影響を与えはじめているという。従来は、個人の言論は、マスメディアを経由して、社会の言論の場に出たが、ブログはそれを通さないことになる。したがって、個人とマスメディアが同じ土俵で勝負することになっているようである。

私も馬齢を重ね、医学、小児科学、そして子ども学（Child Science）と、子どもに関係することに関心を持ち、あるいは学ぼうとして60年近くになる。この機会に、私が子どもについて学んだこと、考えたことならば発信することが出来ると考え、このブログを始めることにした。私の日記を公開する心算は無いので、毎日とは言わないが、つれづれなるままに筆をとることにする。どうか、皆さんからも、それに対して忌憚のない御意見を下されば幸いです。

いいね! 0

ポスト



【CRNスタッフより】CRN新しいスタートを祝って

掲載日： 2010年9月23日掲載

先週9月15日（水）に、CRN日本語版サイトを無事リニューアルオープンしました！！

制作にかかわったスタッフ一同の労をねぎらって、お祝いの打ち上げ会を開催しました。

驚いたことに、CRN日本語版の担当スタッフと、今回のデザイン、制作している方々が初対面！！メールや電話でのやりとりは頻繁に行われていましたが、実際面識のなかった人も結構いることにびっくりです。こんな時代になったのですね～。

CRNサイト改訂のお話が出てきたのが、今年度はじめのことで、それから数か月をかけて、調査をしたり、ユーザーの声を聞いたりして、分析や検討を重ね、膨大な記事（600記事あまり）移行を経て、ようやく世の中に送りだしました。

所長小林登からはCRNのミッション、設立当初の思いや、インターネットの技術を使って、21世紀を子どもの世紀にしておくことなどが語られました。

CRNは世界の子どもの取り巻く社会問題を解決するため、異なる分野の専門家、子育て中の親に情報発信をし、議論の場を提供しています。

リニューアルしたCRNに是非アクセスしてください。そして、やってほしい、改善してほしいポイントなど、ご意見、ご感想を募集しています。

コメントやトラックバックも宜しくお願いします。



所長と制作にかかわったスタッフ

いいね！ 0

ポスト



<<前へ

9

10

11

次へ>>

調査データ

- ▶ 乳幼児
- ▶ 小中高生
- ▶ 国際調査

▶ More

研究論文

- ▶ 異文化理解
- ▶ 健康と発達
- ▶ 学校教育
- ▶ 子どもの権利

▶ More

海外の子育て

- ▶ インド
- ▶ カナダ
- ▶ タイ
- ▶ ドイツ（ベルリン）
- ▶ ニュージーランド
- ▶ ノルウェー
- ▶ フィンランド
- ▶ サウジアラビア ▶ More

CRNについて

- ▶ ごあいさつ
- ▶ CRN概要
- ▶ 活動履歴
- ▶ CRN刊行物

▶ More



TOP > 名誉所長ブログ



名誉所長ブログ

Koby's Note -Honorary Director's Blog

名誉所長ブログでは、CRNの創設者であり名誉所長である小林登の日々の活動の様子や、子どもをめぐる話題、所感などを発信しています。



過去の記事一覧

- 過去のコラム (2008~2013.3)
- 過去のメッセージ (~2007)

CRNサイトリニューアルのご挨拶

掲載日： 2010年9月15日掲載

カテゴリ： 名誉所長メッセージ

CRNの設立は1996年、もう15年目になる。この間、皆々様の御指導と御支援のお蔭で、日・英・中の三つの言語によるサイトが活発に運営され、わが国ばかりでなく、国外でも広く利用されています。

しかし、1996年当時から見ると、ウェブサイトの在り方も大きく変わり、読者の方々にとって、より利用しやすいようにする必要があると考えるようになりました。CRNでは検討を重ねこの度第3回目のリニューアルオープンを迎えることができました。

この新しいサイトで、国内の「日本子ども学会」、さらにはアジア近隣の国々の研究者・実践家と共に勉強する「東アジア子ども学交流プログラム」とも連携を取りながら、CRNの更なる発展に向け、一同努力する所存です。皆さん方の変わらぬご支援・御協力をお願い申し上げます。

CRN所長 小林 登

いいね! 0

ポスト



<<前へ

9

10

11

キーワード検索

Google 提供



Find us on **facebook**

インクルーシブ教育



社会情動的
スキル



遊び



メディア



発達障害とは?



タイプ・年齢別の症状と対応